
ねた的な小説

碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ねた的な小説

【Nコード】
N1367V

【作者名】
碧

【あらすじ】
今の所続く予定のないねた的なお話

神様は言うことをきかない（前書き）

中途半端な終わっていないネタ的な小説ですのでご注意ください。

神様は言うことをきかない

ふぁーと欠伸をしながら顔を洗う為に洗面所のドアを開けたらそこは、明らかに上空うんメートルっぽい大空に繋がっていました。あまりのことに私、数秒硬直。緩んだ手からタオルがひらりと風に乗って飛んでいった。青い空にタオルの黄色がやけに映える。

「・・・・・・・・へ？」

なにこれ？見慣れてしまった古い洗面所はどこにもなくただただ青い空と雲が広がっているのは・・・・にやぜ？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ぱたん！（↑ドアを閉めた）すうはぁー（↑深呼吸）がちゃ（↑再びあけた）。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

（↑変わらず広がる光景に絶句）。

「やっぱり変わんない！嘘！何！夢！私まだ、夢の中！寝てんの！早く起きないと遅刻！」

動揺した私は再びドアを閉めようとして・・・・うつかり足を滑らした。本当になんぜこういう時、こんな場面で最悪の事態を招くかな！私！

「ひつ・・・・・・・・」

当然足を滑らした私の行き着く未来は・・・・・・。

「ひやああつああああああああああああああああああああ
ああ！！！！！！！！」

ロープなしのバンジージャンプ！！

「し、し、し、死ぬううううううううううううううう！！」

猛烈な勢いで落ちていく。地面がぐんぐんと有り得ない勢いで近く
なつていく。いやだ！生まれて十六年。やりたいことも心残りもあ
り過ぎる。それにそれに……。

「落下死体にだけはなりたくないいいいいいいいいいいいいいいいい！！！！！」

高いところから落ちた人間っていうのはそりゃあ、もうえぐい状態なんだよ？人間が作った人工物から落ちててもそんなのだ。こんな高さから落ちたらもう……もう……（想像中）……い・や……死んでも死に切れませんよ！私！

嫌だ嫌だ！死ぬのなら畳の上で安らかに眠るようにが私の生涯目標なのに僅か十六年で享年でしかも棺おけの中身も見せられない死体になるのはいや~~~~~！！

「神さまのはっきゃろおおおおおおお！！！！！！」

とんでもない運命と人生の終焉を目の当たりにして私はそんなことを叫んだ。とにかく誰かのせいにしないと気がすまない！

「あほ！ぼけ！どSの鬼畜！恨んでやる妬んでやる祟ってやる！日本人舐めるなよ！死んだら速攻会いにいつて体育館裏へいらつしやい！卒業式のお礼参りだああああああ！！！」

もう自分が何を叫んでいるのか分からない。ただただこんな運命に異議を唱え続けていたような気がする。

いつそのこと意識が飛べばまだマシだったのだろうが私の神経は図太いのか一向に気を失う気配は無い。

あ~~~~~~~~もう、だめだあ！！！！！！！！！！

「ばかああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

もう、神様なんて信じない！！長年の正月初詣の際の賽銭と絵馬代とお守り代その他諸々耳を揃えてかえせええええええええええええええええ！！！！

来る痛みと衝撃に私が覚悟を決め、私はギュツと目を瞑り歯を食いしばった。

「新たな麒麟が生まれそうだというのは本当か？」

荘厳な神殿の一室。そこにいたこの神殿・・・国を守護する五聖獣の一つ麒麟を奉る黄宮の上位神官の服を纏った老人が入ってきて

た男の姿を見るなり膝を折、礼を取る。

入ってきたのは二十歳前後の武人。黒い髪に黒い瞳と平凡な色をもつ男だが瞳に宿る強烈な意思とまるで役者絵から抜け出したかのような顔で強烈な存在感を発する男であった。

黒を基調とした鎧を着込み腰に下げた無骨な刀が男を近寄りがたい威圧感を持ったように見せていたが男自身はあまりそのことには頓着していない様子であった。

恭しく礼を取った老人を手で止めさせ男は目線で先ほどの質問の答えを促す。その男に老人は深く一礼をした後に重々しく口を開いた。

「はい……先代の麒麟である紫遼さまが身罷れて百五十年あまり。ようやく兆しが現れました」

「そうか……上手くいけば五聖獣の守護が百五十年ぶりに復活するか……」

この国は東西南北と中央をそれぞれ 聖獣と呼ばれる存在が守護をしている。

北を守護するは玄武。

南は炎の霊長 朱雀

東の守護は気高き青龍

西を守護するのは白虎

そしてそれらをまとめ守護の礎たるのが麒麟だ。

彼らは人より遙かに長い時を生きる存在だがその命は無限ではない。怪我も老いも病気も彼らには無縁のものだが寿命がある。そし

て寿命を終え、聖獣が死した後はその座がしばし空位になる。

新たな聖獣は世界のどこかに生まれるのだがそれがいつなのかどこで生まれるのか分らない。

そして聖獣復活にはある条件がある。一つはもちろん麒麟自身が生まれてくること。だがこの段階ではまだ形を成さない意思をない人間でいうところの胎児のような状態だ。

意思を持ち形を持つて世に現れるには不思議なことに人の力を借りるのだ。

人の想い。

強く強く神を想ったもの。その意思と願いにより聖獣は世に生まれる。

「一番強く神を思った者がその聖獣を世に導き、巫女となり幼き聖獣を護り導く・・・人が聖獣を教育するなどおかしな話だ」

だが、強く願う者がいなければ聖獣は生まれ得ない。男が生まれてから聖獣の生誕を目の当たりにしたのはこの麒麟が始めてになりそうだ。・・・もつとも聖獣の世代交代は数千年単位であるので滅多にお目にかかれるものではないが。

「他の聖獣たちの世代交代はまだまだ先だろうから俺が目にするのはこの麒麟が最後だな」

その後、男は老人と短く今後のことを打ち合わせると足早に神殿を去った。

聖獣の誕生と巫女の探索の手配をするためだ。

聖獣が生まれると必ず巫女となる人間のもとに現われる。聖獣と

巫女が自分から神殿に現われてくれればいいのだがそう上手くはいかないのが世の常だ。聖獣の姿は絵姿に写し取ることが禁止されているため普通の人間はその姿を知らないために聖獣を見てもそうとは認識しない者が多い。そして聖獣と認識したとしても聖獣とその巫女を己の利のために役立てようとする下種も永き歴史の中でそれこそ掃いて捨てるほどいた。

生まれてすぐに巫女が殺され、聖獣が暴走することさえある。聖獣と巫女の保護は早急にすることが一番なのだ。

「さて・・・忙しくなりそうだ」

呟いた言葉がまさか様々な意味で彼の今後を言い当てていたと言った本人ですら知る由も無い未来であった。

さわさわと頬に温かい何かを押し付けられる。うう・・・なに？ふわふわした物も同時に感じて私は寝ぼけた頭の中に疑問符を浮かべながら薄っすら目を開けた。

つぶらな青い瞳がまず目に入った。視線を徐々に全体に移す。白い鬘、青い瞳・・・そして抱きかかえるのに丁度良さそうな身体・・・それらをあわせるとものすごくプリティーでキュウトな馬に似た動物になる。

その見ているだけで幸せになりそうな可愛い生き物がきゅきゅと私の頬に鼻を当てていた。

私は無言で起き上がるとその生き物と見合わせる。何故だかその生き物は逃げることもせずじっと私を見ていた。こう、何かがこみ上げてくるのを必死に我慢する可愛い・・・。

そろそろと鬘に手を伸ばしても逃げないし嫌がるそぶりはない。シルクよりも手触りの良いその毛並みに私の頬は緩む。わぁ・・・何これ、凄くさらさらで気持ちいい・・・。。むくむくと衝動が

こみ上げてくる・・・我慢我慢・・・。

触つても逃げないので図に乗つた私は両手を伸ばして生き物を抱き上げる。．．．やつぱり逃げない。私の手の中で大人しくしている。なにになと言わんばかりに私を見上げてくる瞳を至近距離で見せられて．．．．．かわいい．．．．．もう、我慢できない！！！！

[illegible]

ぎゅーと力の限り抱きしめて頬ずりをする。可愛い可愛い可愛い
 いはいはいはい！！！！

! ?

腕の中で目を白黒させながらそれでも暴れないこの子にますます私の可愛いもの好きの心に火をつける。ああ……もう！見た目も中身も可愛いだなんて反則！

「もう／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／可愛すぎる！
大好き！！！！きやあああああ！！！」

もう可愛くて可愛くて仕方がない！私が自分の状況を把握して氣を失う前までの出来事を思い出し自分が五体満足でいることの不思議に思い至るのは思う存分この子を可愛がり、心を満足させた後であつた。

七夜七月語り（前書き）

今の所続く予定はありませんのでご注意ください。

七夜七月語り

世界の夜は七つ七色の月の光に染まる。

いちつき
一月紅から始まりにじつき二月蒼・三月薄紫・四月橙・五月金・六月緑・
ななつきそして七月銀で終わり最初の一月に還る。

七つ七色の月はそれぞれ女神の化身。だけど遠い昔にあった悲しい出来事で女神の一人がいなくなっていました。

七番目の銀の女神は悲しみのあまり人に災いを与えた。災いは人を苦しめます。

銀の女神をのぞいた六人の女神は力をあわせて銀の女神を封印しましたがその時にはもう災いは世界に根付いてしまっていました。

沢山の人を傷つけ死なせてしまう災いを作ってしまった銀色の女神を人は恐れ、忌み嫌うようになってしまいました。そうして銀の女神と銀の月は災いとされてからとても長い月日が流れた頃、銀の月が夜を照らす晩に一人の女の子が世界に現れました。

その女の子は銀色の長い髪と月のように淡い銀色の目を持っていた。ました。

まるで喪われてしまった月の女神のような幼子は一人世界を夢見て眠り続けています。

御伽噺の始まりでした。

『どうして……』

やみの中でだれかが泣いている。

『どうして……』

どうしたの？なんで泣いているの？
ワタシのこえは泣いているだれかにはつたわからない。

『どうして、あの人がないの……』

あの人？あの人ってだれ？あなたは どうして泣いているの？

『寂しい……寂しいの……』

さみしい……？どうしてさみしいの？だって……だって・
……あなたの側には……。

とつぜんやみがぎんいろのひかりにくるりと変わった。目をあけて
いられなくてワタシは両手でかおを隠した。

ひかりのなかからたくさんの声がワタシにむかってしゃべりかけ
てきた。

『お行きなさい』

『真っ白な魂と心で世界を見てごらんなさい』

『胸の中に銀の光を一筋抱いて』

『世界は貴女を祝福もして拒絶もしましょう』

『だけど忘れないで』

『貴女は幸せになるために世界にいるのだとい

うことを』

こえがワタシにかたる。ひかりがどんどんつよくおおきくなって
もう目の前にひかりしかみえない。

『さあ、ここから貴女の始まり』

光がはじけて、そしてみたことのないせかいがワタシの前にひろ
がった。

波が打ち寄せる度に浜辺に倒れた少女を濡らす。動きやすそうな
淡い色の着物を着た少女の波に濡れた銀色の髪が同じ色の光に照ら
されてまるで髪自体が光っているかのように見える。

目覚めない少女を起こすように夜風が一際強く吹く。

「うつ……」

薄っすらと開いた瞼から覗くのは髪よりも空に浮ぶ月の色に似て
いる銀。その銀色の瞳がぼんやりと焦点を定めないまま周囲をみる。
ぼーとしたまま少女が起き上がる。波が座り込んだ少女を濡らし
また去っていった。

静かな夜の海。そらには銀の月。そしてその月を写し込んだよう
な色を纏う少女。酷く幻想的な光景の中で少女はぼんやりと辺りを
見渡した。

右を見る。延々と続く浜辺。左を見る。同じく浜辺。後ろを見る。
どこまでも続く暗い海。下を見る。砂。

最後に上を見る。そこに浮ぶのは銀色の月。七番目の七月。

「せかい……」

呟いて「はて？」と首を傾げる？自分で自分の言っている意味が分からない。

「せかい・・・？ここはせかいなの？」

考えてみるがわからない。

「ここは・・・どこ？」

やっぱり分からない。

「なまえ・・・ナナツキ」

これは分かった。ナナツキ。自分のこと。だけどそれ以外のことはどんなに頑張つて考えても全然わからない。

ざざーと波がまたナナツキを濡らしていく。海水をすってすつかりと重くなった着物を見てナナツキは立ち上がった。波がまた打ち寄せる。だけどナナツキが立ち上がったからもう濡れなかった。

海を見てそして月を見上げる。ナナツキの小さな月が空の大きな月を見た。

『お行きなさい』

どこかで誰かにそう言われた気がした。

「いくの？」

聞いてみたけど誰かは答えてくれない。

だけど背中を押されたような気がしてナナツキはそっと浜辺を歩き出した。草履の底で砂が鳴るのがとても面白い。

海からも音がする。ざざんって繰り返し繰り返す不思議な音。最初はとても静かだと思ったのに気付くと沢山の音がナナツキを包んでいた。

「きゅきゅざざんざざん。きゅきゅざざんざざん」

なんだか楽しくなって自分も音を出したくて聞こえてくる音を真似ながらナナツキは歩いた。

「きゅきゅざざんざざん。きゅきゅざざんざざん」

ナナツキの周りには音があった。砂を踏む音。波の音。風の音。それらを聞いているとナナツキはとてもとても嬉しくなった。

どれぐらい歩いただろう？ナナツキの足が疲れてしまっぐらいの時間は経った頃。ナナツキの真上からはざりと知らない音が聞こえてきた。

「きゅきゅざざんざざん・・・ばさばさ？」

知らない音に首を傾げるナナツキの足元が不意に陰る。

「おや、これは珍しい色をもつ童だね」

知らない音がまた一つ増える。それが声だと気付いたナナツキが顔を上げると銀色の月を背に真っ白い服を着て背中に黒いふわふわした大きなものはやしている男の子が空中で面白そうに笑っているのが見えた。

「あなたはだれ？ワタシはナナツキ」

「ほほう。礼儀をわきまえておる童じゃな」

男の子は不思議な喋り方をした。背中の大きなふわふわが一回大きく動いた。男の子が履いた高下駄が地面に着く。気がつくとも男の子がナナツキのすぐ側にいた。

「お主ナナツキと申すのか」

「うん。そうだよ」

「髪と目によおあった名じゃ。だが魂の色は無色じゃな」

男の子はナナツキの頭を撫でながらナナツキにはよく分からないことを言う。

「うーん」と考えてみるけどやっぱり良く分からない。眉間に皺を寄せて考えているナナツキに男の子が「すまんすまん」と謝ってくれた。

なんで謝るんだろう？やっぱりよく分からない。

「童はどこに行くのだ？」

「どこ……？」

「どこかに行く途中だったのではないのか？」

「どこか……」

『真っ白な魂と心で世界を見てごらんさい』

「せかいに行くの」

ぽつりと呟いた言葉に男の子が驚いたように目を大きく開く。その目を見ながらもう一度ナナツキは言った。

「ナナツキはせかいがみたいの」

そうナナツキは世界をみたい。そのために多分ここにいるんだ。そう理屈なしに確信できた。

そんなナナツキを男の子はまじまじと興味深そうに見る。そしてにやりと笑うとナナツキに手を伸ばし抱き寄せたかと思うと背中ふわふわを動かして空へと舞った。

「うあ~~~~」

突然の出来事に目を丸くするナナツキに男の子の楽しそうな声が響いた。

「世界をみたいか！そうかそうか！」

よくわからない。だけどふわふわした感覚は決して嫌いではないし空の上からみる海はとても綺麗でナナツキは嬉しくなって笑った。

「うん。せかいにいくの。せかいをみるの」

「世界は広いぞ。人の一生でも見きれないくらい広く深い」

「そうなの？」

「うむ。そうじゃ。だけど人は世界を初めから知っておる」

「?どうして?ひろくてふかいのにさいしょからしっているの?」

「人もまた世界の一部ゆえに」

「いちぶ」とたどたどしく少年の言葉を繰り返すナナツキ。一部。せかいの一部。

「ナナツキもせかいのいちぶなの?」

「そうだ。だが一部ゆえに人は世界を知りたがる。知っているのに知らないことがたくさんあるそれが世界」

ちんぷんかんぷんだ。頭がぐるぐるする。波の音が遠ざかり風の音が強くなる。

景色が変わりナナツキたちのしたに街が広がる。その街を男の子はナナツキを抱えたまま通り過ぎていく。

「どこにいくの?」

「なあに心配するな。昔馴染みの所に行くだけじゃ」

遠くに月に照らされた赤い不思議な形の何かが見えてくる。

「あれは何」

「鳥居じゃ」

鳥居を見つけるとばさりと男の子の背中に生えたふわふわが力強く動く。月明かりの中大きなふわふわから零れ落ちた小さなふわふわがナナツキの目の端を掠め、空高く飛んでいった。

手を伸ばしてももう、捕まえない。

「小さなふわふわとんでいっちゃった」

ぽつりと呟くナナツキ。もうどんなに見ても小さなふわふわはどこにもない。

「降りるぞ。しっかりと捕まっておれ」

男の子の言葉と共に風の抵抗が急激に強くなる。

ぐんぐんと地面が近くなる。怖くてナナツキはぎゅっと男の子に抱きついた。

ぐんと抵抗を感じた。ナナツキたちを包むように大きなふわふわがぱたぱたと動く。ふわりと地面に降りた男の子が丁寧にナナツキを地面に降ろしてくれた。

「ここは……」

きよろきよろと見渡す。小高い丘の上。後ろを振り向けば先ほどまでいた海が鬱葱とした木々の間から見えた。

鳥居がある小高い岡の上。そこにナナツキと男の子はいた。

「少し歩くぞ」

「うん」

先に歩きだした男の子のあとをてくてくとナナツキがついて行く。銀色のナナツキと同じ色と名前を持つ月が暗い山道を照らしてくれている。

「ツキ」

「うん？ああ、今晚は七月じゃな」

「ナナツキ。ナナツキとおなじなまえ」

「そうじゃな。お前さんと同じ名前と色をもつ月じゃ。明日は一月に戻るな」

「いちつき？」

不思議そうに首を傾げるナナツキに少年が月を見上げながら教えてくれる。

「世界の夜は七つ七色の月の光に染まるのじゃ。始まりは一月・紅。次に昇るのが二月・蒼」

少年が歌うように月の名前を口にする。

「三月・薄紫・四月は橙・五月は金・六月が緑でそして最後が七月・銀。世界の七つ七色の月」

最後の言葉が月夜に溶けていくのをナナツキは黙ってきいていた。

「おつきさまはいろがまいにちかわるんだね」

ナナツキは他の月も見てみたいと思った。
きつとこの月に負けないぐらい綺麗なのだろう。

「はやくつぎのおつきさまのぼらないかな？」

わくわくと空を見上げるナナツキに少年は外見に似合わない酷く老成した苦笑を浮かべた。

「まったく普通に生きておれば夜はおのずとやって来る・・・おっと着いたな」

少年が足を止めたその先には森の中に建っているにしては少々立派なからぶき屋根の一軒屋。

少年は迷うことなく門戸を叩く。中から鋭い男の声が聞こえてくる。

「誰だ」

「わしじゃ」

「帰れ！今すぐ俺の家から消えうせる！」

速攻でかえってくる罵倒。閉じられた扉越しでも分かるほどの拒絶と大声にナナツキは反射的に耳を塞いだ。

しかし少年はにこにここと男の声を無視して嬉しそうに引き戸に手を掛け一気に開こうとするが中から全力で阻止された。

内と外で力比べが開始された。

かゝゝゝんとどこからともなく鐘つばいものが鳴る音が響いた。

少年のたーん。

「いやじゃなあゝゝそんな照れんでもいいじゃないかつ！」

渾身の力を込めて引き戸を引く少年。少女と見間違っほどの華奢な外見に似合わない怪力で半分ほど扉が開いて中から暖かい色の光が零れる。

か~~~~ん。

中の人（男性）のたーん。

「消えろ失せる現れるな！世界のどこに生息してていからそれぐらい我慢するから金輪際俺の前に現れるな消息も知りたくないっ！」

息継ぎもなく罵ると中の人「のおおおおっ！」と野太い気合を入れて引き戸を閉める。

開きかけていた引き戸が完全に閉まりかけていく。

か~~~~ん。

少年のたーん

「あははははっ！相変らず照れ屋じゃなあ！」

がつっ！と閉まりかけた戸に足をねじ込ませる少年。

か~~~~ん。

中の人たーん。

「どける~~~~~！この厄病神！すみやかに回れ右してお空のかなたに飛んでいけ！」

徐々に身体までねじ込み始めた少年を中の人在必死に追い出そうとしている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・？」

それらをただ傍観するしかないナナツキ。

ナナツキは少し考えてテクテクと引き戸に近寄る。

押し問答が続いている少年たちには構わずに引き戸を軽くノックする。

「こんばんは！入っていいですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

男二人が完璧に固まる。ナナツキは大人しく答えを待つ。

「あ~~~~~えっと・・・・・・・・」

「隙あり！」

「あ、てめえ！」

中の人油断した隙について少年が引き戸を思いっきり開く。
中には三十代半ばの気難しそうな男がばつの悪そうな顔で立っていた。

「ふっふっふっ！ワシを追い返そうなんて無駄なことを」

思いつきり隙をついたくせに偉そうにふんぞり返る少年。ずかずかと中に入る少年に疲れきった顔の男はもう止めはしなかった。代わりに戸の外で大人しく立っているナナツキを見る。

ナナツキの銀の髪と瞳をみて少し驚いたが男は少年に対するものとは雲泥の差の態度でナナツキを中に招いてくれた。

「入りな。そこにずっと立っていた寒いだろ」

「うん。ありがとう・・・あ。ナナツキはナナツキなの！」

「ナナツキ・・・これはまたぴったりというかなんと言うか・・・」

「七番目のおつきさまとおなじなまえなの！」

嬉しそうに笑うナナツキに男の顔はどんどん複雑そうなものに変わっていく。

「そんなに嬉しいが名前じゃねえだろう。人間ならまず嫌がると思うが・・・」

「？なんで？おつきさまはあんなにきれいな。きれいなおつきさまとおなじだからうれしいよ？」

「七月の女神さんの話を知らんわけじゃないだろ？なんでそんなことを言える」

「はなし？」

不思議そうに首を傾げるナナツキに男は信じられないという顔を
した。

「七月の女神さんの話、知らないのか？」

首を横に振る。そんなのは知らない。ナナツキの記憶はほんとう
についさつきから始まっていたのだから。

「ナナツキはナナツキの名前しか知らないよ。あの子にあうまで
うみで一人きりだったの。めがさめたら波にぬれていたの」

その言葉を聞くなり男はナナツキの手を掴むと怒涛の勢いで家の
奥に消えた少年を追って走り出す。

その勢いは凄まじく引つ張られているナナツキは軽く足が浮いて
いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・天狗っ！てめえ、この子になにしゃが
った！」

迷いなく男が開いた襖の向こうで勝手に用意したらしいお茶を啜
っていた少年は突然の難癖にさすがに驚いて茶を吹いた。

「え？なんじゃ！問答無用でワシのせいかい！」

「他に誰がいる！こんな子供が記憶を失くすほど何をした！」

「なんもしとらんわ！珍しかったんで浜辺で一人おったのを拾っ
ただけじゃ！」

「誘拐か！」

断定されて天狗と呼ばれた少年もさすがに顔を引きつらせる。

「違う！保護じゃ！保護！人聞きの悪いことを言うな！」

ぼんぽんとよくもまあ出てくると感心するぐらいの言い争いだ。
ナナツキは口が挟めない。

「お前はこんな聖人仙人なワシがそんなことをするように見えるのか！」

「見えるから疑ってんだろが！っつか今までの自分の所業を棚に上げてよくもまあ「聖人」だの「仙人」だのほざけたな！」

「ひどっ！ワシはこんなに慎ましく生きておるのにこの義弟は冷たい！」

「さむっ！嘘泣きは止めろ！気持ち悪すぎて吐く！確かに俺はお前の妹を嫁にもらったがお前のことを義兄とは認めてない！」

「あはははっ！どんなに否定しようが絆はきれんぞ！義弟」

「義弟いうな！」

完全にナナツキ放置。というか兩人とも最初の問題点からどんどんずれていつていることに気付いていない。

無駄に内輪ネタない争いは家の奥にいた男の妻（天狗の妹）が鬼の形相で止めに入るまで続いた。

囲炉裏を囲んでナナツキの横に座るのは天狗……朱華。正面に座る男はこの屋敷の主であり土地神（よくわからなかったがこの辺りの土地を管理している神らしい）であり本人は全力で嫌がっていたが朱華の義弟である野宮。

そしてその野宮の隣に座った二十歳そこそこに見える朱華と同じ黒いふわふわを生やした女の人が野宮の奥さんで朱華の妹である蒼華。

教えられた名前と関係をナナツキが小さな頭で必死に整理する間に蒼華と野宮の二人は冷たい視線を朱華に送っていた。

「信じられない……ナナツキちゃんが自分のこと何も分かつたらず海水に濡れていることにも気付かずに連れまわしたの？」

「い、いや……その、無色透明の魂なんて初めてみて浮かれて……」

「にいさま？」

「す、すまん……」

外見上は姉と弟に見える天狗の兄妹の力関係は明らかに妹の方が強い。しおしおとナナツキに頭を下げる朱華にナナツキはなぜ謝れるのかよくわからずぼけつと彼をみていた。

今のナナツキはお風呂に入れられていい匂いのする着物に着替えさせられていた。

気持ちのよい服の肌さわりは新鮮だった。

ナナツキは不思議そうな顔をして野宮の方をみた。

「どうしてしゅかはナナツキにあやまっているの？」

「どうしてって……」

これには天狗兄妹だけでなく野宮も呆れて口を開いた。

名前以外のことを全て忘れた状態だったのにもかかわらず名乗りもせずにいきなり拉致された少女が言っているいいせりふではない。

「ナナツキ。お前は天狗を怒っているんだぞ？ 思う存分罵って嫌悪して罵倒して罵倒して罵倒してやれ。その権利がお前にはある」

ナナツキの肩を掴んで野宮が怖い顔でそう言い聞かせてくる。それに朱華が口を尖らせて文句を言っていたが誰も取り合わない。

「まあ、にいさまが馬鹿なのは今更だからいいけど」

「蒼華。さりげに馬鹿の部分強調してはおらんか？」

「あら、気のせいですわ。にいさま」

につこり否定する蒼華。

というか馬鹿そのものについて否定はしないのか朱華。

「ワシ、兄なんじゃが」

「私の兄を名乗るなら性格直して身長を越してからにしてください」

につこりと笑う蒼華。だがその背後に漂う空気は迫力に満ちている。

「ワシ・・・兄なのに・・・」

いじけ出した朱華に外見要素を除いても兄の威厳はない。

「で、結局なんでナナツキをうちに連れてきたんだ？」

「え？珍しいからお主らにもナナツキを見せてやろうと・・・」

「

「大馬鹿決定」

「なぬ！ランクアップした！」

ぱあ何故だか顔を明るくする朱華。背中の翼がぱっさぱっさと動く。その翼を思い切り顔にぶつけられた野宮が顔を顰める。

「喜ぶな！むしろらんくだうんだ。これは」

外つ国の言葉混じりになにやら訳のわからないことになっている兄と夫を無視して蒼華は今だに着物を珍しそうにあっちこち引っ張ったり撫でたりしているナナツキに向き直った。

「ナナツキ」

「なに？」

「貴女、この家で私たちと一緒に暮らさない？」

その言葉に野宮と朱華の動きが止まるが反対の声はあがらない。常識的にもナナツキの外見的に考えてもそれが一番いい案だからだ。

自分たちのような土地神や天狗などのアヤカシや神ならナナツキの外見にたいして何も含むものは持たないが人間に見られた場合まず間違いなく迫害されてしまう。

銀の女神に通じる色を持つ少女など人に受け入れられるはずがない。

そんな三人の思いに気付くはずのないナナツキはこてんと首を傾げる。

「くらす・・・？いつしよに？しゅかとそうかとのみやで？」

「天狗は除けて、だ」

「酷いっ！」

「うるさいですわよ！ごほん！見ての通り賑やかを通り越してうるさいぐらいですけ家は広いし遠慮することはないですわよ？」

ぱちくりと大きな瞳が瞬きをする。言われた言葉の意味を考えているようだ。

そんな彼女の銀色の髪を撫でてやりながら蒼華は優しい慈愛に満ちた表情を浮かべた。

「私たちの家族になつてくれない？」

「かぞく・・・？かぞくつて、なに？」

不思議そうにそう聞き返してくる幼子のようなナナツキに蒼華はもとより野宮も胸を衝かれた。

家族と言つ言葉の意味さえもこの子は知らないのだ。

無色透明の魂。

朱華が言っていた意味がようやく分かった。

この世に生きる全ての魂は色を持つ。それは自分で見つけたり他から染められたりするがどの魂も自分だけの色で己の魂を染める。

だがナナツキにはそれがない。

この子が喪ったのは記憶だけではない。

己を染め上げていたであろうその魂の色まで喪失してしまっている。

無色透明。それは何者にも染まっていない魂。言い換えれば何者にも染まりうる不安定さを抱え込んでいるといえる。

蒼華がナナツキを抱き寄せる。腕の中でナナツキが驚いたようにこちらを見上げてきていた。この子が人の世の害意に晒されたことを考えると蒼華は恐ろしくなる。無色透明の魂はその害意に耐え切れず遠からず破滅へと向かうだろう。

濁りきった魂はそれだけで容易く災いに堕ちていくものだから。

「そうか？どうしたの？くるしいの？」

腕の中の幼子が心配そうに蒼華を見詰めている。

魂の色を失っても少女は優しさは忘れていないようだ。

その小さな身体をしっかりと抱きしめながら蒼華は護ろうと決めた。

この誰よりも不安定な魂が自分の色を見つけるまで側で護り見守ろうと。

ナナツキは野宮と蒼華の娘になった。

「部屋が殺風景すぎるわね。必要なものは明日市に買いにいきましよう。あ、今日からここがナナツキの部屋よ」

案内された部屋をナナツキはそつと窺う。普段からちゃんと掃除してあつたらしく部屋にはチリ一つ落ちていない。黒い漆塗りの文机と鏡台が一つあるだけで結構殺風景だ。

きよるきよると物珍しそつに鏡を覗き込んだり文机をまじまじと見るナナツキを布団を引き終えた蒼華が苦笑しながら引き離す。

襟をつかまれきよんとするナナツキだったが蒼華から渡された夜着が何なのか分からずに首を傾げた。

「そうか、この着物なに？」

「なにつて・・・夜着よ」

「よぎ？」

「そうよ。寝るときはこの服に着替えて寝るの」

「ふゝん。そうなんだ。じゃ、きがえる」

慣れない手付きで服を着替えるナナツキ。夜着を着て布団に入ると蒼華が灯を吹き消す。ふ

うつと辺りが一瞬暗くなり障子越しに銀色の光が部屋に満ちた。

蒼華は枕元に座るとナナツキの髪を優しくすいてくれる。ナナツキの目が眠そつに瞬いた。

「そうか・・・」

「なに？」

「ナナツキはせかいをみるの・・・」

「世界を？」

「うん。あのね。だれかがいったの。世界を見てごらんさいつて・・・だからせかいをみればわすれたこともきつとおもいだすよ・・・」

「そうね。きつと思いいせるわ」

同意するとナナツキは嬉しそうに笑って頷いた。その瞳が閉じられる。

「うん・・・あのね。そうしたらね・・・きつと・・・あえるんだよ・・・ふりむいてくれるんだ・・・こんどこそ、かないで、くれ・・・る」

徐々に声が小さくなり最後には寝息に変わった。

最後の方は途切れ途切れでよく聞き取れなかったがナナツキが「世界をみる」ことに拘っていることは十分伝った。

「眠ったか」

「ええ。ぐっすりと」

虚空から現れた夫はそつと畳に降りると眠る少女を覗き込む。

「本当だな。なんだかんだで疲れていたんだろう」

「ええ」

寄り添いながら少女を見守る夫婦は本当にナナツキの親のように見えた。

朝日が眠るナナツキに降り注ぐ。

「まぶし・・・い」

何がそんなにまぶしいのか分からないままナナツキが目を開ける。窓の障子越しに光が部屋に差し込んでいてナナツキは驚いた。月の光じゃない。淡い月の光とは違いこの光はとても強い。

恐る恐る窓を開けて外を見ると風景が一新していた。闇が消えてる。

まず真っ先に思ったのがそれ。続いて色が違うことに気付いた。部屋の中も外も見える色が全然違っている。

空を見ると透き通るような青。そして月の代わりに力強く輝くのは・・・。。。

「たいよう?」

その光にいま自分が朝を迎えていることに気付いた。太陽をみる。月となんて違う輝きなんだろう。そして同じぐらい綺麗だとナナツキは思った。

「ナナツキ？起きているの？」

「そうか？」

返事をすると思襖が開いて蒼華が顔を覗かせる。夜着姿のまま窓を開けて外を見ているナナツキに苦笑いを禁止できない。

「まったく・・・起きたら服を着替えなさい。枕元に置いてあったでしょ？」

言われた通り目をやれば確かに丁寧に畳まれた服が置いてある。

「きがえるの？」

「夜着は寝るときだけよ」

「うん。わかったきがえる。あ、忘れてた。そうか」

「なに？」

「おはようございます」

ぺこりと頭を下げて挨拶したナナツキに蒼華はぺしりと自分の額を叩いた。

「おはよう。すっかりしていたわ。ごめんなさい。あいさつし損ねてた」

そう言って蒼華も頭を下げる。誰であろうとも礼儀を通し悪いと

思ったら潔く頭を下げるこ
とが出来る。それが蒼華という女だった。

「着替えたら顔を洗って朝ごはんにしましょう」

着物に着替え教えてもらった場所で顔を洗って言われたとおり悪
戦苦闘しながらどうにか
髪も櫛で整えたナナツキが居間に行くと仏頂面で座り込む野宮とそ
んな彼に楽しそうにちよっ
かいを掛けている朱華がそれぞれの膳の前で胡坐をかいていた。

「おはよう」

声を掛けると野宮の仏頂面が消えて穏やかに「おはよう」と返し
てくれる。朱華も手を挙げて挨拶してくる。ナナツキは手招きされるまま朱華の隣に用意され
た膳の前に座る。

膳の上には焼き魚やホウレン草の胡麻和え冷奴などが既に用意さ
れている。

「あ、ナナツキが来たわね。それでは朝ごはんにしましょうか」

割烹着姿の蒼華が手際よく汁椀に味噌汁を盛り付け各自に回った
所で朝食になった。

「いただきます」

全員手を合わせて合掌する。

「いただきます」

それを見てナナツキが一拍遅れてそれらを真似る。

赤い箸を手にとつてどれから食べようかと真剣に悩む。焼き魚もおいしそう。だけどホウレ

ン草の胡麻和えも捨てがたい。でも、真っ白なごはんも。それをいうなら味噌汁もひややつこも。

本来はもつと簡単な言語で悩んでいたが意識をすると概ねこんな感じ

のことがナナツキの頭の中で討論されていた。

じつと真剣な顔で膳を睨むナナツキに知らず知らずの内に他の三人も食事の手を止めて成り行きを見守ってしまう。

空中に止まっていた赤い箸がぴくりと動く。

ごくりと生唾をのむ観客。

ナナツキの目が一点に定まる。「いく」と全員が思った。赤い箸が迷いなくホウレン草の胡麻和えを掴みそれがそのままナナツキの口に運ばれる。

ぱくつ、もぐもぐ。ごくん。

「おいしい！」

にはーと嬉しそうに笑うナナツキに保護者も血の繋がらない叔父（共に一日目）が揃って安

堵の息を洩らした。

「ナナツキ。お代わりはあるから遠慮せずにどんどん食べなさいね」

「うん！ありがとうございます。そうか。ごはんとってもおいしいよ」

「あらあら、ご飯粒が頬についているわよ」

「ふえ・・・？」

くすくすと笑いながらあれこれとナナツキの世話をしてやる蒼華の姿はどうみても母親にか見えない。

そんな仲むつましい女性陣に対して男性陣は非常に仲がむつまじくない空気をかもし出していた。

正確には片方が非常に嫌悪感もあらわにした拒絶の姿勢でもう片方はそれを知っていながら
チョツカイを出しているという図だった。

「仲がいいねえ・・・本当の親子みたいじゃなあ・・・」

「親子だろ？ナナツキは俺らの娘になったんだしな」

「うんうん。ところで野宮気付いておるか？」

「何をだ？」

「お主たちの娘ってことはナナツキはワシのめ・・・」

「お前は俺の家族とは縁と所縁があっても他人だ」

「そんな力一杯わけのわからん断言せんでも」

「うるせえ！俺が朱華と結婚する時にてめえがしたこと俺は一生

忘れんぞ」

「ああ、「あれ」ね。別に悪気があったわけじゃないから許せ」

「許せるか！しかも悪意はあっただろうが！あれのせいで結婚式が伸びた上に危つく婚約破棄されるところだったぞ！」

「一体彼らの過去になにがあったのか・・・それは彼にしかわからない。」

「ふおお！縁と所縁があるなら十分身内じゃ！」

「お前を常に俺はこの世から消し去りたい」

虚ろな顔でそういう野宮。こいつさえいなかったら絶対に絶対に過去に巻き込まれた厄介事

及び心労は激減していたはずなんだ。

だが残念なことにどんなに切望したとしても叶うことはない。

土地神である野宮はそれなりに力のある存在だが北山の犬神と云われる朱華の方が力が上

なのだ。力も年齢も経験も全て向こうが上。自分が勝っている所なんて性格の良さぐらいだ。

野宮は生まれてまだ五百年ほどなのに対して野宮は齡数千とも言われる大妖。そこらの神よ

りよっぽど強い力を有している。

「ふふん。ワシを目障りだと思うのならワシより強くなるんじゃない」

自慢げに腕組をして野宮を見下す少年（姿だけで中身老人）はと

てもじゃないが大妖には見えない。

「いつか絶対に排除してやる」

「ふふふっ！できるかのうっ？」

男二人が険悪空気の側で

「そうかそうか。みそしるもおいしいよー！」

「そう？ありがとうナナツキ」

女二人楽しそうに盛り上がっていた。

片恋狂想曲

小さい頃から一緒にいた。

何をするのも鈍臭いナナと何をするのも速いイチ。

『あ、ナナ！聞いて聞いて！オレ、彼女が出来た！！』

中学一年の春、イチに彼女が出来た。

『そうなの？おめでとう』

イチの惚気を延々と聞かされ、帰宅。夕飯作りを手伝い、夕飯を食べ、宿題をして、入浴、明日の準備を済ませ、就寝。

『あ、私、イチのこと好きなんだ』

喉が渴き目覚めた午前2時。水を飲み終えた時にナナは己の恋心を自覚した。

あまりにも鈍過ぎる恋と失恋の自覚であった。

果て無き旅路の旅人

魂が廻る。死したのちあるべき場所へと還りそして全ての記憶を忘れ再び世界に生まれる。

それが定め。

だけど 幾度となく「私」は生まれる。

記憶も人格も外見すらも同じ「私」として世界に生まれ落ちる。

私の魂に寄生する一振りの刀が忘却と本当の意味での死を許さない。

「寄魂刀」

そう名づけたのは幾度前の「私」だっただろうか。

人の身体ではなく魂に取り憑いた妖刀は私を縛り放さない。

瞳を開ける。ここは魂の集う場所。闇でも光でもない柔らかな虚無に満たされた原初。

私の目の前で一つ、また一つと魂が集い、何処かへと消えていく。それらの光景を見ながら私は瞳を再び閉じた。

「私」はしばし眠ろう。

新たに世界に生まれるほんのひと時。

再び苦悩と苦痛の日々に戻るその刹那の休息に今は意識を委ねる。

『でも……何度何回繰り返そうとも同じ人生はひとつとしてな

い。感じる悲しみ痛み喜び笑顔全てその時だけのもの。

貴女は知らない。

何故、繰り返すのか。

何故、変わらないのか。

何故、魂に異質を抱えるのか。

その理由を貴女はまだ、知らない』

今より十八年前。

雪がちらつく夜半産声が上がった。

それと同時に常人には分からない強烈な力が世界に走った。

『生まれた・・・』

『再び生まれてきた』

『あの女が刀を抱いて』

恐怖、畏怖で世界はざわめいた。

そしてそれを感じた者の中で少数の者は別の感情を抱いていた。

ある者はその気配に笑みを浮かべ。

ある者は複雑な思いでその気配を感じ。

そしてある者は――。

千者万別の思いを胸に一人の赤子の生誕を世界は受け入れた。

そして十八年後。

物語は幕を開けた。

「――」

心地の良い日差し降り注ぐ午後。すっかりと春めいた気候の中、木陰に旅人が一人寝そべっていた。

年のころは十代後半。艶のある長い黒髪を後ろで結んでいる。動き易い男物の旅装を身につけているが整った顔立ちや体つきは明らかに女性であることを強調していた。

すうーと規則正しい寝息を立てる旅人に警戒心はない。

ちちつと遠くで鳥が囀っている。

のどかな放歌的とさえいえる光景の中アラズは息を殺して旅人に近寄った。

起きるな。起きるなよ……。

心の中で祈りながらそろそろと旅人に近寄りそして旅人の側に置かれた荷物に手を伸ばした。

（よしっ！）

思わずそう思った時を見計らったようにアラズの手首が別の手が捕まれた。

「……え？」

それが誰の手なのか考えるより早くアラズの腕が引かれ視界が回転した。

「あれ？」

気付いたら背中には大地の感触。そして空は見えない。

代わりに恐ろしいほど整った顔の女が自分を見下ろしている。

「えっ？あれ？」

アラズは女に押し倒された状態のまま間抜けな声を上げてしまった。

「……なんで？」

「――」

女は答えない。ただどこか焦点の合わない瞳でアラズを見ている。

「えっと……」

捕まった！

と理解した途端にアラズは猛然と暴れた。ここで捕まって役人にも引き渡された死活問題だ。役人に与えられる罰も勿論のことあいつにどんな目に遭わされるか。

暗い未来を思い浮かべ全力で暴れるが押さえ込まれた手はびくりとも動かない。女の方が十四歳のアラズより四・五歳上にみえるが華奢な外見から暴れればすぐに逃げ出せると思ったアラズは見事に裏切られることになる。

女はそんなに力を入れてるように見えないのに全くというほど束縛から逃げ出せないのだ。

「おい！離せ！離せて！」

ぎゃんぎゃんと騒ぐが女は全く動かない。ただぼんやりと黒曜石のような瞳でボンヤリ暴れるアラズを見ているだけである。

「おい・・・おい？」

ここでアラズはようやく相手の様子の奇妙さに気付き暴れるのを止めた。

「ちょい・・・大丈夫か？」

「――」

女は無言。ただボンヤリとした顔を下から見上げながらアラズは相手がかなりの美人だということに気付き、更にその相手に今まさに押し倒されている状態だということに改めて認識しそして・・・。

「のあ！」

先程よりも鬼気迫った様子で暴れ始めた。

ちよつと待て！待つてくれ！この状態はいかん！色々やばい！

こそ泥はしても女に無理矢理手をだすようなことはしねえ！！

動揺のあまり考えていることが滅茶苦茶だが本人は気づく余裕がない。

じたばたと暴れるアラズを見て、女が瞳を閉じる。

それを見たアラズがぎよつとする。

「ちょ！ちよつと待て！！俺はただ財布の中身が欲しかっただけでそういう展開を望んでいるわけじゃ・・・」

ちよつと考えて

「ないぞ！」

振り払うように怒鳴る。心の端っこで「美人だし……」と考えた分だけ間が開いてしまった。

その間にも女の顔がアラスに近寄り……思わずアラスは目を瞑った。フワリといい匂いが鼻腔を攪り不覚にも心臓が馬鹿みに早くなる。

（うあゝゝ！なるようになれ！男だろ！）

覚悟を決めたアラスだったが……いつまでたっても予想した感触はない。

「あれ？」

聞こえてくるのは健やかな寝息。

ぱちりと目を開けて横を見るとアラスに覆いかぶさるようにして眠っている女の姿。

もしか………寝ぼけていただけ？

気付いた途端に体中から力が抜けた。

「な、なんだよ……驚かせやがって……」

改めてしっかりと荷物を？むとアラスは女の下から抜け出そうとして………そして。

がっちりと背中に戻された手によって阻まれた。

「のあ！な、なんだ！」

こちらの動揺なんぞ気付かない女はぎゅっと抱きついてくる。

「ちよっ！待て！女が気安く男に抱きつくな！恥じらいを持って！恥じらいを！」

真っ赤な顔で説教するアラスだったが相手は寝ているためまったくと言っていいほど無駄な労力である。

それに密着されてリアルに感じられる体の感触やふんわりとしたいい匂いがアラスの動揺をますます酷くする。

「頼む！謝るから財布とらないから！離してくれ………」

どんな拷問もこれよりはマシだと思える時間は実に一時間も続いた。

蒼華は旅人だ。

十三で故郷を飛び出し以来一人で旅をしている。

女でしかも子供一人旅など親が反対するだらうし危険も多い。

蒼華は家庭に不満があつたわけではない。両親は優しく家は裕福だつた。不満はない恵まれた幸せな生活だつた。

だけど、蒼華は旅にでなければいけなかつた。

十三の時、母が身ごもつたのを契機に蒼華は家を出る決心をした。ある理由により蒼華は二十歳になるまでに家を出なければならなかつた。その理由を両親は知らない。周りの誰も知らない蒼華だけの「理由」だ。

二十歳を過ぎてしまうと彼女が抱える「異常」が浮き彫りになつてしまふ。それを誰に教えられる訳でなく蒼華は悟っていた。

本来ならぎりぎりまで両親の側にいようと考えていたが母が身ごもつたのを契機に考えを変えた。

いつか自分は居なくなる。だけど・・・新に生まれてくる弟か妹が両親を支え、癒してくれる。

新たな命。自分と血を分けた兄弟。

彼だか彼女だかに勝手だと分かつてはいたが後を託し、蒼華は旅にでた。

旅に出ることへの不安はなかつた。

旅に必要な知識も護身術も危険への対処のしかたも一人で生きていくことに必要なことは全て「知って」いたからだ。

以来五年。蒼華は当ての無い旅を続けていた。

「うにゅ？」

寝ぼけ眼で蒼花は側にあつた暖かいものを抱き寄せる。それは暖かくて柔らかい。最初はちよつと暴れられたがぎゅうつと抱きしめると大人しくなつた。

遠くから「く、くるし・・・」という声が聞こえた気がしたが寝ぼけている蒼華は気にせずその暖かいものに擦り寄る。

柔らかい暖かく抱きしめるのに丁度良い大きさ。

（バロンみたい・・・）

幼い頃いつも一緒にいた飼い犬を思い出しふふっと笑った。

日差しが気持ちよくて風が心地よくて腕の中の暖かい物が懐かしい飼い犬を思い出させて蒼華は幸せだった。

「このっ・・・いい加減起きやがれ！」

（・・・え？）

ぱちりと目を開けると真っ赤な顔でこちらを睨んでいる少年の顔が有り得ないくらい近くにあった。

「あら」

蒼華が目丸くする。

随分と勝気そうな少年だが顔立ちは女の子のように可愛らしい。

栗色の髪に緑色の瞳。もう少し大きくなったら随分と女の子が騒ぎそうだ。

マジマジと少年を見る。何がどうなったのかわからないが自分が暖かいものだと思っていたのはどうやらこの少年のようだった。

「起きたか？起きたなら離してくれ！」

「え、あら？ごめんなさい」

素直に手を離し起き上がる。少年は起き上がるなりぱつと蒼華から距離を取る。

じりじりと後ずさりするとぱつと身を翻し走りだした。

そして十分に距離を取ると一度立ち止まり蒼華に向かって叫んだ。

「お前！ちったあ危機感とか恥じらいを持て！」

言うだけ言って再び走り出した少年の言葉の意味がわからない蒼華は小さく首を傾げるしかなかった。

「ふう〜。心臓にわりい・・・」

全力で走ったせいか息が上がってしまったアラズは近くの噴水の縁に腰を下ろして息を整えていた。

「ったく。変な奴に当たっちゃったぜ」

思い出すのは先ほどまで彼を捕まえて眠っていた旅人の姿。

狼狽して怒って怒鳴ってそして結局は何も盗らずに逃げ出してしまった。

おかげで今日の収穫はなしである。

「あゝあ。今日は家に帰れねえな」

家のことを思い出しアラズの瞳が翳る。

「・・・・・・・・ふん」

自分の境遇が幸福とは思わない。だけど不幸だとも思わない。

自分で足掻く機会があるだけかもしれませんがアラズは考えていた。

足掻けるチャンスはある。だから足掻き、生きるのだ。

「さつてと明日また力モを探すとして今日はどうするか・・」

家には帰れないため早々に寢床を探さないといけない。

幸いこの街は大きいため空き家などがおおい。寒い季節でもないので一日ぐらい野外で過ごしても大丈夫だろう。

頭の中で野宿に適した場所を挙げながらアラズは歩き出した。

思い出したのは少し前に見つけた町外れの古い洋館。昔から魔物が出る噂された曰く付きの建物だが浮浪者やアラズのように家を追い出された子供にとっては格好の泊まり場所であった。

「うん。決めた」

今日の寢床を決めたアラズはぶらぶらと通りを歩く。と、目の前で走っていた子供がコケた。

「大丈夫か？」

目の前でコケられては無視することもできず手を差し伸べたアラズに五歳ぐらいの少年はびっくりしたように目を丸くすると見る見る目に涙を溜める。

「ふえ・・・・・・・・」

「ああ。泣くな・・・ほら、痛くねえ。男だろ？これくらいで泣くな」

立ち上がらせぱんと砂を叩いてやる。それでもぐずる子供にアラズはしゃがんで目線を合わせる。

「ほれ。大丈夫。につて笑ってみろ」

「につ」と手本を見せてやると子供もぎこちなく「につ」とする。
「よゝゝし。笑えればもう大丈夫だ。気をつけて帰んな」

ぼんぽんと頭を撫でてやると子供は「うん。ありがとうお兄ちゃん」と笑顔で走り出す。

手を振りながら見送るとアラスは再び歩き出した。

ほえゝゝゝと蒼華は夕暮れの中に佇む廃墟を見上げていた。

ぼろぼろに朽ちた外壁に蔦が張り、窓ガラスは一つ残らず割れ、屋根の一部にも穴が空いていた。

「あゝゝゝ、見事に「廃墟！」って感じたあゝゝゝ」

夕暮れという状況も合わさって見事なまでに何か出そうである。

「ふゝゝむ。確かに「何か」が出てもおかしくはないかなゝゝ」

蒼華の様子は感心しているのか呆れているのか分からない。ただのぼんぽんと蒼華はしばし廃墟を見上げると次に辺りを歩いて回る。

しゃがんで何かを見てフムフムと頷いたと思うと窓から中を覗きこむ。しばらくそうやっていると何か納得したのか最初にいた場所に再び再び廃墟を見上げた。

ちりつと火の粉に触れたような熱さが右手に走り蒼華はそつと右手を？む。

「まだよ」

ふわりとした笑顔は変わらない。なのに受ける印象は恐ろしいほど違う。

「あなたの出番はまだ」

唇が言葉を紡ぎ出す。

沈みいく夕日に照らされたその顔は酷く魅惑的であると同時に恐ろしさを内包していた。

訴えかけるような熱さに蒼華は痛いぐらいの力で右手を？む。

夕日が沈む。最後の光が山の向こうへと消え、辺りが闇に包まれた。

光が生まれる。蒼華の用意したカンテラの光が淡く辺りを照らした。

右手の熱さは大分治まった。ふうと息を吐いた蒼華はもういつも通りの彼女であった。

「さて、と」

カンテラの光に浮き上がった廃墟は恐ろしさが倍増しであったが蒼華は躊躇せずに入り口の前に立つ。

無言で手を伸ばす。白い手が朽ちかけた扉に手を触れた。

きいーと耳障りな音を立てながら扉が開く。こつこつと石畳に蒼華の足音だけが響き渡る。ホールの中ほどで蒼華は足を止めた。

きよろきよろと首をめぐらせそしてにつこりと笑った。

「逃げられたら追いたくなるのが人の性。出てこないなら出てくるようにするまで」

にこにこ笑う蒼華。だが背後に黒いオーラが渦巻いていた。

「やべえ・・・日が暮れる」

沈んでいく夕日を見詰めながらアラズは走っていた。目的地は街はずれの小高い丘の上に建っている。なだらかな坂道を駆け上がっているところらりと光が動いたように見えてアラズは首を傾げた。

（だれか・・・あの廃墟にいるのか？）

アラズのような訳アリの人間かそれとも浮浪者か。だがここ最近流れた噂のせいである場所には人が寄りつかなくなっていたはずだが。

駆け上がり、上がりきり足を止める。月明かりに照らされた廃墟はひどく薄気味悪い。何回か寝泊りしたがどうにも居心地の悪い場所であるのは間違いない。

しかもここ数ヶ月の内に廃墟に寝泊りしていたらしい浮浪者や子供が続けて三人惨殺された事件があった。見つかった場所自体は廃墟の中ではないのだがいずれも廃墟から近い森の中やら丘の入り口やらで見つかっておりしかも遺体には喰われたような後があったた

め街の住人はすっかり怯えてしまっているのだ。

（だからこんな時間に誰かが来るとは思えねえんだよな）

アラズのような噂を信じない人間かそれとも肝試しでもしている暇人か……そんなことを考えながらアラズはそろりと入り口に近寄った。

開いていた扉にやはり誰か入ったのだと悟ったアラズは息を潜めてそろりと扉の内側に入り込む。

入ると淡いカンテラの光が辺りを照らしていた。

（あ……）

光の中に一人の女が蹲っていた。長い黒髪を結い上げ動きやすそうな男物の旅装。後姿だが見覚えがあった。

女は足元にカンテラを置いて地面に何か描いていた。
なんだ？ 一体なに、しているんだ？

余程集中しているのか近寄るアラズにも気付かず女は手にしたチヨークを止めると満足げに「よし」と頷きそしてようやくアラズに気付いた。

「あら？ 君は……」

黒い瞳がアラズの姿を映し出す。驚きはあるがやましさのない態度にアラズはますます首を傾げる破目になる。

そんな彼の手を？ むと女は申し訳なそうに抱き寄せてきた。

「なっ！」

突然の密着に出会いの光景が蘇る。

「なっ なっ なっ！」

「申し訳ありませんが……間が悪いですね」

「なっ！ って間？」

「丁度、怒らせてしまった所で……もうすぐ出てこられますよ？ 劇的に効く嫌がらせ、しましたから」

嫌がらせといって女が指差したのはチヨークで描かれた複雑な幾何学模様。カンテラの光に浮ぶそれはアラズにはサッパリ意味がわからない代物だった。

人畜無害な顔で言い放つ言葉に一瞬聞き流しかけ「うん？」と考
え直す。

「怒らせたって・・・何を？」

見上げるように問いただすアラズに女は申し訳なさそうにそれこ
そ出した料理の味付けを間違えたときのような口調で

「ここに住み着いて人を三人喰らった魔物を、です」

さらりと答えた。

アラズは「ふゝゝん」と聞き流しかけて・・・今度こそ聞き流さ
ずに女の服をつかんで詰め寄る。

「つて！ちよつと待てい！！」

なんだなんつたこいつ！

「魔物つて・・・え、居るのか？それになんで怒らすんだ？ど
うやって？」

混乱状態のアラズの背をあやすように叩くと女は一つ一つ丁寧に
答えてくれる。

「はい。居ます。怒らすのは私の気配に怯えて出てきてくれない
からです。怒らす方法はこの魔方阵です。闇に属する魔物の住みか
に光属性の魔方阵を描いたらそりや怒りますよ。人間にしてみたら
家の周りで延々騒音を立てられているようなものですから」

アッサリキツパリ何の含みもなく女は喋る。呆氣に取られている
間に周囲の空気が一変する。禍々しさが膨れ上がり空気すら凍りつ
いたようだ。

背筋を悪寒が駆け上がる。本能的な恐怖にアラズは女にしがみ付
いてしまう。そんな彼をしつかりと抱きしめる女の態度は恐ろしい
ことに出会った当初から全く変わらない。

のほほんと虚空を見詰める。

足元のカンテラの火が風も無いのに揺れる。それにあわせてアラ
ズたちの影も揺れた。

恐ろしいほどの威圧感。感じたことの無い恐怖にアラズは目を逸
らすことすら忘れていた。

「来ます」

女の声とカンテラの火が消えるのはほぼ同時だった。ずっずつと何かを引きずるような音と共に闇から這い出てきた「それ」にアラズは堪えきれず小さく呻き声をあげてしまった。

がうあああつあああうあああ。

外見は狼に似ている。だがあげる唸り声は動物のものではない。いや生き物の声であるはずがない。

あれは・・・まるで亡者の声だ・・・。

この世のものとは思えない声に耳を塞ぎたくなる。びちゃりと「それ」が一步前に出る。影のような身体から肉の一部が腐り落ち石畳を腐らせる。

耳を塞ぎたいのに目を閉じたいのにアラズの身体は凍りついたように何一つ動かない。

「あつ・・・あつ・・・」

「大丈夫ですか？」

「！」

いきなり至近距離に現れた女の顔にアラズは思わずのげぞる。どつという神経をしているのか女は特に怯えた風もなく「それ」から目を逸らしアラズを覗き込んでいた。

「顔が青いですね・・・。まあ、魔物を見たら大抵そうなりますけどね・・・」

のほほんとした口調の女の肩越しにこちらに向かってくる「それ」が見えてアラズはぎよつと目を剥く。

「あぶな・・・！」

アラズが警告を発するより早く。

「あら？ 案外素早い」

女が感心したように「それ」の動きを誉めながらアラズを抱えてその場を離れる。

ふわりととても人一人抱えているとは思えない動きで音も無く着地した女は少し困ったように「それ」を見る。

「案外素早いですね・・・やっぱり三人も食べちゃったから力つけちゃっていますか・・・」

襲い掛かって来る「それ」をアラズを抱えたままヒョイヒョイと軽やかに避けながら女は腕の中のアラズに視線を落とす。

「走れますか？走れないならこのまま連れて行きますけど？」

その言葉にお姫様抱っこされる自分の姿が思い浮かび瞬間的に打ち消した。

「走れる！」

「わかりました。逃げます。付いてきてください」

「おうよ！」

勢い良く返事を返してきたアラズに走りかけていた女は少し目を丸くする。アラズが「なんか文句あつか」と言わんばかりに睨むとふわりと微笑んだ。

水に浮かぶ月

同じ顔。同じ声。

この手も足も髪も全て分け合って生まれてきた。

この世に一人の半身。

同じはずだったのにどうして、わたしたちはこうも違ってしまっ
たの？

空に浮ぶ月と水に映る月のようにそっくりなのに違う。

本物と偽者。実像と虚像。

わたしは静かに思考を閉ざす。

だけど閉ざす一瞬を狙ったように疑問が浮かび上がってくる。

おんなじはずだったのに心はどうしてこんなに違ってしまったん
だろうか……。

「おねえちゃん！」

明るい声と共に廊下を歩いていたらわたしに勢いよく飛びついてき
た妹をよるけながらも何とか受け止めると腰の辺りにある淡い栗色
の頭を軽く叩いて彼女の名前を呼んだ。

「ミナト……。」

「えへへへっ！」

双子の妹であるミナトはわたしと全く同じ顔でわたしが決して浮
かべることのできない影のない明るい笑顔で笑った。

わたしはその笑顔が真っ直ぐ見れずに誤魔化すように飛びつかれ
た衝撃ですれた眼鏡の位置を指で直した。

わたしとミナトは双子……。それも一卵双生児なので顔はそっ

くりな上に身長も体格もほぼ一緒。同じ格好をして黙っていれば家族でも間違えるほどそっくりだ。

もっとも学校でわたしとミナトを間違える人はそうはいないだろうが。

明るく人気者のミナトに対してわたしは人付き合いが苦手で口下手だ。

浮かべる表情からして全く違う。

ミナトが朗らかな笑顔を絶やさないのとは反対にわたしはいつも無表情だ。

別に自分からそんな陰気な顔をしているわけではなく昔から感情を顔に出すのが苦手なのだ。

似ているのは外見だけ。

中身は全然似ていない。

似ていないから外見もわたしはわざとミナトと区別がつくようにした。

別に目は悪くないのに眼鏡をかけて、ミナトと同じで耳でそろえていた髪を伸ばして今では軽くみつ編みにして背中に流している。

嫌になるぐらいそっくりで全く違うことが胸に痛い。

胸に抱く複雑な思いを全部飲み込んでわたしはミナトをわたしから引き離した。

名残惜しそうに手を伸ばすミナトの手を仕方なしに握りながら彼女の用事を聞いてやる。

「ミナト・・・どうしたの？」

「ミノリ！一生のお願い！英語の課題見せて！」

突然手を合わせて拝み倒してくる妹にわたしは動揺して辺りを見渡した。

廊下を歩いていた数人がくすくすとわたしたちを見て笑っている。

「ミナト・・・恥ずかしいからやめて」

ミナトは別に気にしないのだろうけどわたしは注目されるのが嫌いだ。特にミナトと一緒にいると誰も彼もがわたしとミナトを比べているような被害妄想を浮かべてしまいそうになるので特に嫌だ。なのがいい意味でも悪い意味でも目立つ妹はいつもわたしを巻き込んでくれる。

わたしは慌てて丁度手にもっていた英語のノートを取り出し彼女に差し出した。

「はい」

途端にミナトの顔がぱあっと晴れやかなものになる。・・・我が妹ながらその変化の露骨さに現金だと思わずにはいられない。

「わあ~~~~！これこれ！ありがとう！おねえちゃん大好き！」

英語のノートを額に押し抱いたかと思えばすぐさま抱きついてくるのでわたしは再び転ばないようにミナトを抱きとめる破目になった。

じゃ〜ねえ〜と凄い勢いで廊下を爆走していく妹にわたしは我知らず溜息を零していた。

本当にわたしとは全然違う。

明るくて。

素直で。

可愛くて。

誰からも愛されるような女の子。

『同じ顔なのに妹とは全然違うだろ？妹は可愛いけど姉の方は堅

物じゃん。同じ顔でもさすがにちよつとな』

思い出したくも無い言葉が蘇る。

胸に走った痛みはもう昔のものなのにどうしても和らいでくれない。

わたしは

暗くて。

不器用で。

全然可愛くなくて……。

付き合いづらいと思われるような人間。

当たり前の真実を言われただけ。

言った本人だって別に他意があつたわけではないだろう。

誰もが思うことだ。彼に罪はない。

それなのに傷ついていつまでも引きずっている自分が一番嫌だ。

「……………」

とぼとぼと歩いている足取りが自分でも分かるぐらい重い。

次は移動教室だから早く行かないといけないのに……嫌な過去を思い出してしまったせいかな気持ちがどん底に落ち込んでいる。

「はぁ……………」

溜息は自然と重くなる。

早く行かないと。

そう思えば思うほど足が重くなる。

なんでだろう。どうしてわたしここまで落ち込んでいるんだろう。大概根暗であの時のことを思い出すと気分が沈むけどここまで落ち込んでいたっけ？

疑問に思うけどその疑問さえも暗い気持ちに飲み込まれていく。

頭の中をぐるぐるとあの時のセリフが駆け巡る。

暗く暗く気持ちが落ち込んでいく。

進んでいたはずの足がだんだんと遅くなりついにはぴたりと止まる。

どんどんどん穴に落ちるように暗い気持ちがわたしを寝食していく。

どうしようもなく惨めだった。

俯いたわたしの視界には学校の廊下がある。

前を向けば人気のない廊下が延々と続いている。

動きたくない。

不意にそう思った。

もう、動きたくない。立ち止まりたい。

蹲って顔を埋めてしまいたい衝動に駆られた。

『願って』

どつぱりと泥に足を取られたように動けない。

『ねえ、願ってよ』

心が悲鳴を上げている。

『たった一言でいいんだよ？さあ、願って』

何かに急かされるようにわたしはその一言を口にした。

それが、自分の運命を大きく変える一言だと自覚もないままにわたしは交わるはずのない運命の扉を開いた。

「ミナトのいない場所にいきたい」

遠のく意識の中で楽しそうな子供の笑い声が聞こえた気がした。

姉の声が聞こえた気がしてミナトは必死になって写していたノートから顔を上げた。

「…………おねえちゃん？」

もちろんクラスの違う姉がミナトのクラスにいるはずはない。喧騒に満ちた教室。いつもの光景。

でも何か違う。

何か足りない。

不可思議な喪失を感じてミナトは胸が騒いできゅっと胸を押さえた。

「ミノリ？」

ぶつつりと何かが断ち切られたような感覚の理由を彼女が悟るのは姉が学校から忽然と姿を消したと知らされることになった時だった。

手の中に堕ちて来たのは一人の少女。

彼にしてみれば可愛らしすぎる「闇」を抱え、だがその闇を否定しきれず受け入れることも出来ずに持て余している少女の姿は滑稽で哀れで退屈に倦んでいる彼からしてみればその少女の有り方は格

好の暇つぶしであつた。

見つけたのは偶然。

そしてかの少女を彼が選んだのは必然。

歪み嫉みそして自己否定。

なんと美しさから掛け離れた感情だろう。

清らかとはとても言えない心。だが邪惡ともいえない。

光と闇・美と醜を抱えるその心の有り様こそが彼を惹き付ける。

だが人は己の内の闇を認めない。

穢れよりも潔癖を。

黒より白を。

闇より光を。

人は求める。

だが人の心とは本来この少女のように闇を抱えている。

清らかで潔白な心根の人間なんてこの世には存在しない。

欲と闇を理性という名の檻に閉じ込めて人は生きるもの。

この少女のように己の醜い部分に怯え嫌悪しそれでもなお抱いて生きて足掻いていくのが人である。

「ねえ？きみが望んだんだよ？」

さらりと掬った黒髪がさらりと彼の指先から零れ落ちていく。

彼は飽きることなく少女の髪を弄ぶ。

「きみの望みは叶えたよ。ここは誰もきみを知らない世界。いちいち双子の妹と比較されないきみの劣等感を刺激するものなどない世界。きみが知らない。きみを知らない世界」

だからと彼は口元に歪んだ笑みを浮かべ眠り続ける少女にそっと囁いた。

「僕を楽しませてよね」

邪気の無い笑み。なのにそれはどこまでも歪んだ笑みでほの暗い印象を与えた。

目が覚めると視界がずれていた。

「あ・・・れ・・・？」

夕焼けに被っているのがずれた眼鏡のフレームだと気が付いてわたしは自分が地面に仰向けに倒れているのに気が付いた。

眼鏡を直しながら起き上がったわたしは気を失う前とは一変した景色に忙しなく目を瞬く破目になった。

「ここ、どこ？」

必死に思い出す記憶は学校の廊下でぶつりと盛大に途切れていた。今、わたしが座り込んでいるのはフローリングの廊下ではなく剥き出しの土。頭上に広がるのはどこまでも高い青空。

どこからともなく吹く風が深い森の梢を揺らしていた。

「な、なんで？ どうして？ 森？」

疑問符ばかりが頭に浮いてくる。
一体、何が起きているの？

あまりの事態に呆然と座りこんだままわたしは思わず頬をつねってしまった。

「いたっ！」

痛覚がある……ということはこれ、現実？

でもどうして教室から行き成りこんな鬱葱とした森の中に倒れるなんて事態になるの？

「どうしよう……」

自分の身になにが起きたのもわからないままこれからの行動を決めかねていたわたしだったが背後の茂みから聞こえてきた音にびくりと肩を震わせた。

な、なに……。

恐る恐る振り返る。がさ、がさ、とゆれる茂みはだんだんとわたしが居る方に近づいている。

それと同時に生臭い匂いと荒い獣の息使いが聞こえてきてわたしの体が硬直する。

「あ、あ……」

意味を成さない声がわたしの口から零れた。

逃げないと。

どう考えたって茂みの中にいるのはわたしにとっていいものじゃない。わかっているのに恐怖のあまり足が動いてくれない！

「こ、ない……で……」

擦れた声は自分でも嫌になるほど小さく弱弱い。

がくがくと信じられないほど体が震えて目を逸らしてしまいたいのに視線は縫いとめられたように揺れる茂みを見詰め続けていた。茂みが一層大きく動くのが見えた。

「いや……………！」

わたしは喉が張り裂けんばかりに叫んで這い蹲るようにその場を逃げるのと茂みから何かが飛び出すのとはほぼ同時だった。

風を切るような音と続いて襲い掛かった衝撃にわたしはなす術もなくぶっ飛ばされた。

「っう！」

横倒しになったわたしは顔に感じた土の感触と右腕に焼けるような痛み感じて、一瞬意識を飛ばしかけた。

だけど体の方は勝手に動いていたようで気が付くと腕の傷を押さえながら立ち上がっていた。

ずきずきと痛む右腕を見ればするどい爪で制服が切り裂かれており露出した肌からは盛大に血が流れていた。

それを見てまた意識を飛ばしそうになるけどどうにか踏ん張る。

いま、意識を無くしたら確実に殺される！

生存本能が意識を必死に繋ぎとめる。

荒い息でどうにか襲ってきた何かを確認しようとしたわたしはそこにいた見たこともない生物に短く悲鳴を上げた。

なに、あれ？

全体的に猫課の動物に見える。だけど鋭く尖った爪も牙も凶悪すぎる上にその姿は物語に出てくる魔物を思わせるほど醜悪であった。頭が重いのは失血のせいかわり得ない展開に頭がついていけてい

ないのか。

逃げ出そうにも魔物はじつとわたしから視線を外さずにこちらの隙を窺っている。

今、背中を見せれば襲われることぐらいわたしにも分かった。

わたしの足じゃ、逃げてもすぐに追いつかれる。それにあの魔物が視線を逸らしてくれない限り動くことすらできない。

じわりと握り締めた手にいやな汗をかく。

どうする。

どうすればいい。

右腕を襲う激痛と今すぐにも逃げ出そうとする恐怖心を無理矢理押さえ込みながらわたしは生き残る術を必死に探していた。

どくどくと自分の心臓が煩い。

視力も聴力も五感全てがこの事態を打開すべくフル活動していた。生まれてから十六年間。ここまで必死に自分に与えられた体の能力を使おうとしたことはない。

これほどまでに死にたくないと思ったこともない。

今が瀬戸際。

ここで行動の選択を一つでも間違えれば。

変化を一つでも見誤れば。

わたしは死ぬ。

その考えに至った瞬間いやな悪寒が体中を巡った。

どくんどくと早くなる鼓動を落ち着かせながらわたしは一つの選択をしようとしていた。

思いついたのはいたってシンプルなこと。

ポケットの中に入っていた「もの」を使って魔物を怯ませている間に逃げる。

そっとポケットに手を入れて「それ」をぎゅっと握り締めて、キヤップを外す。

たったそれだけの作業が極度の緊張を伴う。

視線は相変らず目の前の魔物に固定されている。

相手もこちらの隙を窺うように低く唸りながらも襲ってはこない。

嫌な硬直状態。

微かに息を吐くとわたしは覚悟を決めて魔物に向かって走り出す。逃げるならともかくまさか向かってくるとは思わなかったのだろう。どれほど相手に知性があるのか知らないが一瞬、戸惑ったように動きを止めた魔物の顔面にわたしはポケットから取り出したパウダースプレーを思い切り吹きかけた。

パウダースプレーの注意書き。

同じ箇所に三秒以上の噴射はおやめ下さい。凍傷の恐れがあります。

本当に聞くかどうかなんてわからない。凍傷なんてするのも知らない。だけと思いついたのはこれだったのだ。賭けるしかない。

一、二、三……。

心の中でカウントする声はやけに遅く感じる。

四・五、六、七、八、九、十！

最初に決めていた十秒を切った時点でわたしは迷わず魔物の顔にパウダースプレーを全力で投げ付けその横を走りぬける。

「ぎゃああああああああああああああ！」

耳を塞ぎたくなるような魔物の絶叫が辺りに響く。それに体が竦みそうになるのを必死に叱咤しながらわたしはそのまま茂みに飛び込みがむしゃらに走り続ける。

少しでも遠くへ。

あの魔物が見つけれないぐらい遠くへ逃げる。

遠くから怒りに満ちた獣の声が聞こえてきてその度に死に物狂いで足を前へ前へと走らせた。

何度も後ろを振り向きそうになるのを必死に堪えてついでに泣き崩れそうになるのも堪えてただからだを走らせることだけに集中した。

走って走ってようやくあの魔物が追いかけてきていないと思えたらわたしはへなへなとその場に崩れ落ちた。

ゼーはーと荒い息しか出てこず、喉は走りすぎてヒリヒリするし信じられない量の汗が顎から滴り落ちているのを手で無操作に拭くとわたしは近くにある木の幹に背中を預けた。

しばらくはわたしの息を整える音だけが聴こえた。

ぼんやりと梢の間から見上げた空の色はわたしの知っているそれと同じはずなのに・・・どうしてか見慣れない。

ここは、どこ？

あの化け物はなに？

ぐるぐると色んな疑問が浮んでは答えを無くして消えていく。体の辛さと現実の訳の分からなさで頭の中がパンク寸前だ。

「水、飲みたい・・・」

からからと乾きすぎて喉がくっ付いているような感じ。

唾を飲んでも乾きは癒せない。

水が飲みたい。

この状況になって喉が渴いたらすぐ水が飲める環境にいた自分がどれだけ恵まれていたのかいやというほど実感した。

お金があれば自販機やお店で飲み物が買えるし、無かったらなくて蛇口を捻れば水が出てくる。

当たり前だったはずのことが本当は凄く恵まれていた。
そう思ったらジワリと涙が滲んだ。

水だけじゃない。わたしが今まで暮らしてきた世界はなんて便利で恵まれた場所だったのだろうか。

少なくとも衣食住は十分すぎるほど整えられ、安全面でもあんな化け物に襲われる心配なんてない。

ごくりと喉がなる。

喉が渴くことは空腹を我慢するよりも辛い気がする。

どうしようもない辛さを耐えているわたしの耳に微かに聞こえてきた水音。

最初は乾きのあまり幻聴が聴こえてきたのかと思った。
だけど水音は消えず、わたしはのろのろと体を起こした。

「・・・か、わ・・・？」

川か・・・泉か・・・兎に角水が流れている場所がある。

ふらふらする体をどうにか起こす。

そういえば右腕も怪我をしていたんだっけ、血は止まったようだけど痛みは麻痺してしまったのかあまり感じない。

水音が聴こえる方へ行こう。

水があれば乾きを癒せるし傷を洗うことも出来る。

そうだ、手当てもしないと。

聴こえてきた水音はわたしに少しだけ元気を取り戻させてくれた。
だから少しだけ先のことが考えられるようになったわたしは自分でも不安になるほどのおぼつかなさで歩く。

なんども蹴つまづいたりよろけたりしながらも何とか水音がはっきりと聴こえる範囲までやってこられた。

わたしは右腕を庇いながら茂みを進んでそして唐突にひらけた視界の先にあったのは。

地面からコンコンと湧き出る澄んだ水をたたえる泉と

「おや、久方ぶりに人が迷い込んだと思うたら小娘かえ」

泉の中央に浮ぶ人とは思えない美しさを讃えた青い髪女性の妖艶な笑みとその足元に広がる水に沈む無数の骸骨の残骸だった。

それはまるで現実感のない光景だった。

水の上に苦もなく浮ぶ女性は幻想的でまるで水の妖精のように美しく侵し難い空気があった。

一枚の絵画のように完成された美。なのに視線を落とせば水の中にある無数の人の骸骨がその美を壮絶なものに変える。

ただ美しいだけではない恐ろしさを秘めた美。

それでも目を奪われずにはいられない。

現実とは思えない光景にわたしはそれまで感じていた渴きも腕の痛みも忘れただ突然とその場に立ち尽くしていた。

動くことはもとより声を出すことすら許されない気がしてわたしは一切の自発的行動を封じられていた。

ただただ目の前に広がる光景に圧倒されてしまった。

水に浮ぶ女性がそんなわたしを笑う。

ころころとまるで鈴を転がすように響いた笑い声は耳に心地よく涼やかだ。

「阿呆のようにわらわを見ておるがこの顔はそんなに珍しいかえ？」

その言葉と共に女性の足元に波紋が広がる。

最初は小さなそれは時を待たずものすごい勢いで動きを早めていく。

「なっ……！」

わたしが異変に気付いて次の行動に移るよりも早く、泉の水がまるで生き物のようにわたしの身体に巻きつきそのまま高く抱え上げてしまう。

優に家の二階分の高さは上げられてしまったわたしはその高さに思わずぞっとする。

なに、これ！

常識を無視した水の動きに驚愕するわたしを他所に水は更に強くわたしを拘束してくる。その強さにわたしは息ができず思わず苦悶の声を洩らしてしまう。

「っ……あっ……」

息が出来ない苦しさに顔を歪めるわたしの目の前にあの泉の中央に浮んでいた女性がわたしと同じ目線まで浮んでくる。

真っ青な髪が微かに風に吹かれわたしの頬に触れて離れた。女性が楽しそうに苦しむわたしの顔を覗きこむ。

「わらわの棲みかに迷い込んだがお主の運の無さ。最近はめつきり人が訪れなかったので暇しておったのだ」

だから遊んでおくれと細い指がわたしの頬をなぞる。その冷たい指先がどうしようもなくわたしの不安を煽る。優しく笑ってもその「遊び」がわたしにとって安全であるだなんてこの状況で信じれるほどわたしは能天気ではない。

さあーと血の気が一気に引いていくのが自分でも分かった。

彼女の言う「遊び」がわたしに何をもたらすのか曖昧でも感じ取ったからだ。

顔面蒼白なるわたしの頬をゆっくりとなぞりながら女性はまるで夢のような美しさでわたしに残酷な運命を運んでこようとしていた。

「ふふっ・・・怖いのかえ？」

こちらの恐怖を見透かしているだろうにあえてこの女性は気付かない振りをしてそんなことをわたしに問いかけてくる。

だけどわたしは答えるほど余裕がない。ただただ目を見開いて目の前の美しい女性を見詰めることしか出来ない。

不思議なことに恐怖を感じておるというのにわたしは目の前にいる女性から目を逸らすことができないでいた。

恐怖からではなく彼女のその美しさゆえに目が逸らせない。

見惚れていた。

わたしは恐怖を感じながらも確かに目の前の女性に見惚れていたのだ。

青い瞳がまるで見透かすように細められ、口元が軽く緩んだ。

「面白い小娘じゃ・・・この期に及んでなお瞳に恐怖以外の感情を浮かべられるとは。のお、お主の願いを一つだけ叶えてやろう」

突然、女性が訳のわからないことを言い出した。

願いを叶える？

目で訴えかけると女性がふふと楽しそうに笑う。

「ほれ、言うてみい。おぬしがいま一番望むことはなんじゃ？」

わたしは女性のその言葉に促されるようにされた質問について考える。

耳を塞ぎたくとも今だに水（なのかなこれ？泉から出てきたけど服も濡れない）に拘束されている身ではそれも叶わず耳が思い切りきーんとして目を白黒させているわたしの前で目じりに涙さえ浮かべながら女性が腹を抱えて笑いこけていた。

一体何がそこまで彼女の笑いのツボにはまったのか皆目検討もつかないわたしはただただ事態を見守るしかできない。

ゆうに二分以上は笑い続けた女性は目じりに浮んだ涙を指で拭いながら再びわたしを見た。けどその顔も雰囲気も先ほどとは違どこか親しみが籠もったようにわたしには感じられた。

女性がふつとその白い手を挙げるとわたしを拘束していた水が緩やかに下降していきわたしが地面に足をつけると同時にぱつと散水して泉に還っていく。

・・・どうでもいいが一気にどばつと出てきたのなら帰る時も同じように帰って欲しい・・・スライムみたいに小分けにしているごうごと地面を這いずりながら帰る必要性はどこにあるの？

少々釈然としないものを感じてしまう。

後に残ったのはのろのろと顔を上げたわたしといつの間にか地面に降りてきていた女性だけだった。

女性はわたしを上から下までじっくりと見る。その視線が居心地悪くてわたしは微かに身じろぎした。

気が済むまで見ると何か納得したのか女性は「ふむ」とひとつ頷く。

なに？一体なんなの？

あれこれと相手の意味不明な行動にわたしが右往左往していると女性がずつと顔を寄せてくる。綺麗すぎる顔で視界一杯になりわたしはドキマギさせられる。

「あ、あの・・・？」

「お主……ずたぼろじゃのお」

魔物に襲われて右腕の服は制服はおろか下のブラウスまで破れているしオマケに血がアッチコッチに飛び散っている上に闇雲に逃げていたため木の枝やら草であっちこっち切り傷だらけ。

砂や葉っぱもついているだろうし確かにずたぼろと言われても反論のしようもない。

思わず俯いてしまったわたしだったが女性の放った一言に再び顔を上げる破目になった。

「まずは怪我の手当てとその小汚い格好をどうにかせねばな。飲み物はその後じゃ、我慢せい」

へっ？と顔を上げたわたしに女性がニツコリと笑いかける。

正直、綺麗だけど有無を言わさない何かを感じさせる笑顔だった。

えっと……あの……、先ほどまでなにやら「遊ぶ」と言われていませんでしたか？

などとは口が裂けても言えない。
藪をつついて蛇は出したくない。

「では、傷から治すか」

気が付くと女性の手がわたしの右腕に伸びていた。

「っう！」

不遠慮に傷に触れられて走った痛み思わず呻き声が出てしまうわたしに構わず女性はわたしの右腕に手を動かす。

再び走る痛みわたしはじつと耐えていたが不意に痛みが和らいできて驚いて視線を右腕に向ける。

それはまるで魔法を見ているようだった。

女性の手が傷に触れるたびに傷は薄くなっていき一分とたたない内にわたしの右腕にあった傷は跡形もなく治ってしまったのである。

「うそ……」

自分の目で見て自分に起こったことなのに信じられなくてわたしは思わずそう呟いていた。

痛みもない。血はこびりついているけどその下の肌には傷なんてもうなかった。

そこに傷があつたなんて服の破れと血の後がなければ自分のことながら到底信じられないぐらい完璧に治っている。

「ほれ、いつまで呆けておるのじゃ。さっさと服を脱がぬか」

「……はい？」

いま、なにをおっしゃったのでしょうかこの女性は？

言われた意味を理解できないでいたわたしに気が長くないらしい女性が苛立ったように再び手を挙げる。

その光景に先ほどの悪夢が脳裏を過ぎる。

ま、まさか。

さーと血の気が引いた。

「ちょ……」

ちょっと待ってくださいという言葉を使い終えるよりも早く女性が物騒なセリフを投げ付けてきた。

「面倒じゃ、その服ごと洗濯してくれる」

その言葉と共に泉からそそり立った大量の水がわたしの頭上めかけて降り注いだ。

正直いつてありえなさ過ぎる。

逃げる暇も心構えもできていないわたしは当然のようにその水を被る破目になってしまい水が引いた後に残ったのは全身ぬれねずみになって震えるわたしの姿だった。

くっしゅんとクシヤミをするわたしに女性がどこからともなく取り出した大きな布がふわりと被さってくる。

「わっ！」

視界を覆われわたするわたしに構わず女性はどんどんものを取り出す。

「さっさとその服を脱いでしまえ、あとは・・・代えの服じゃ」

ぼんぽんと本当にどこからともなく取り出された服が一式わたしの前に並べられる。

え、え~~~~っと？

どうにか布を頭から取り払ったわたしを女性が腰に手を当てて叱り付けて来る。

「ほれ、さつさと身体を拭いて服を着替えぬか！わらわと違ってお主は病気になるのじゃろ」

「は、はい！」

野外で・・・しかも同性とはいえ人の目の前で着替えるのに抵抗は感じたけどこれ以上待たせたらこの人、怒りそうだからわたしはあたふたと服を抜いて水滴を拭い用意された服に着替えた。

服はボタンがなくて紐で大きさを調整するみたいだったのでサイズ的に少し大きかったけどどうにかわたしに合わせることができた。

「ふむ。着替え終わったか」

「は、はい」

動き易い服はどうみても男性の服だったけどこの際文句は言うまい。

きぐしゃくと向き合ってたしとは対照的に女性はじろじろと遠慮なくわたしの姿を上から下までみて何か納得したように頷いた。

「そこらに残っていた服を適当に見繕ったのじゃがまあまあじゃな。女物があれば良かったのじゃが着られるほど状態の良いものがなくてのお〜」

女性のセリフに口元が引きつる。

もしかして・・・この、服って・・・。

脳裏に浮ぶのはすぐそこで静かに沈んでいる骸骨。
そして女性が最初に口にした「遊ぶ」という言葉。

つつと背筋に嫌に冷たい汗が流れた気がした。
ぶんぶんと頭を振って頭に浮んだ考えを追い出す。
ダメだダメだ。深く考えると怖いことになる。

「ふむ？どうしたのじゃ？」

「べ、別に何でもありません・・・あ、あの・・・」

「うん？」

「ありがとうございます・・・傷を治していただいた上に服まで・・・」

この服の出所は・・・と聞きたくなるのをぐつと堪えながらわたしは頭を下げた。

怪我を一瞬で治したり水を操ったり物騒発言やら証拠の多いすこぶる怪しい人？だが彼女がわたしにしてくれた親切は確かだからわたしは素直に頭を下げて感謝を伝えた。

あれ？おかしい。なんの反応もない。

そろそろと視線だけ上げると何故だか絶句している女性と目があった。

なんで・・・そんなに驚いているんだろう？

女性はものすごく驚いているように見えた。

目を見開いてわたしを見ている。

反応に困ってまごついていると女性が顔を手で覆って深い溜息をついた。

なんなんですか、その反応は。

何となく面白くないわたしが眉を潜めるのに気付いた女性が苦笑いを浮かべた。

「いや、別にお主をバカにしたわけではないのじゃ。ただ、まさか礼を言われるとは思ってもみなんだもんでな……」

「えっと……普通はお礼、言うと思いますけど……?」

「わらわのような魔物に礼を言うなどとおぬしは変わり者じゃな」

「まも……の?」

わたしの反応に女性は満足そうに頷いた。

「気付いておらんようだから改めて言おう。わらわは水の大妖ウインディー。人からは魔物と呼ばれる存在じゃ」

水の大妖?魔物?え?何?何のこと?

女性の言うことはわたしには全くちんぷんかんぷんで、多分表情から分かったんだろう女性も不審気な顔で首を傾げてわたしを見ていた。

「おぬし……本気でわからぬのか?」

問われてわたしは頷く。

「あ、あの……魔物って……一体なんのことですか?」

恐る恐るそういえば女性が目を丸くして信じられないものを見つけたような顔した。

「魔物を知らない!?おぬし一体どんな暮らしをして……いや待て」

なにやら叫びかけて途中で何かに気付いたように女性は言葉を切った。そしてじつとわたしの顔を見る。青い瞳は吸い込まれそうなぐらい深く綺麗。

その瞳に映るわたしは酷く不安気な顔をしていた。

じつと何も言わない女性・・・ウィンディーさんにわたしは居心地が悪いながらもじつとしていた。

ささっーと風が泉に波紋を広げる。

ウィンディーさんは真剣な目で何が楽しいのかわたしの顔を見続ける。

み、身動きしたら怒られそうだ。というか迂闊に邪魔したら泉の下の骸骨に仲間入りさせられそうで怖い！

くだらだらと汗をかくわたしに気付かずにウィンディーさんがわたしを見たままぽつりと「やはり」と呟いた。

「おぬし、この世界の者ではないな」

「・・・・・・・・・・はい？」

今、なんとおっしゃいましたか？この人（本日二回目の疑問）

「あ、あははは。何をおっしゃって・・・」

「なんじゃ、自覚なしか？まあ、無理もないか・・・」

あの、もしもし？勝手に納得されてもこちらとしてはその、全く事態が把握できないので出来れば詳細な説明などをしていただければ嬉しいのですけど？

なんてことを言う度胸もないまま黙っているしかないわたし。

「どうすれば納得できるかのお……」

ウィンディーさんはしばらく顎に手をやって考え込んでいた。

「ここはお主のいた世界とは違う世界。それで納得せい」

物凄く簡略にされた上にかなり投げた感じがしたのはわたしの気のせいでしょうか？

実は結構大雑把で短気な性格？

「納得せぬなら面倒なのであっちじゃ」

本当に面倒そうに指差された「あっち」とは泉（の素敵な骸骨のオブジェ付き）

「納得しました！」

背筋を伸ばして新米海兵隊員のように敬礼しつつ返事をするわたしにウィンディーさんは「よし！」となぜか得意げに胸を張った。

「ところで、お主の名はなんじゃ？」

「あ、あのすいません！えつと……ミノリ、です」

「ふむ、ミノリ、か不思議な響きじゃのお……」

「そう、ですか？」

「ミノリ、お主本当になぜ自分がこの世界に来たのか覚えがないのか？」

言われてわたしは考える。覚えて言われても廊下を歩いていたら急に意識が遠のいて気付いたらここにいたって感じだったもんな・
・・・何が起きて異世界？にくることになったのかわたしの方が知りたい。

「わかりません」

わたしは緩く頭を横に振った。

「ふむ。お主から神気がするので神が関係するのは確かなのじゃろうが・・・」

「神気？」

「そうじゃ、お主から微かにじゃが神気が感じられる。ゆえにお主に起こった一連の事に神が関わっているはずなのじゃ」

問題はなぜ、神さまなんぞがわたしに干渉したかということである。

問題が山積みの上に事態の把握は容易ではないときた。
本当に頭が痛くてわたしは少しよろけた。

何だかんだ言ってわたしは自分が異世界に飛ばされたということを受け入れていた。

まあ、わたしの常識では有り得ない動物に襲われ、人間とは思えない人？に逢ったりで認めざるを得なかったというか・・・。

はあ・・・と溜息が自然と零れる。
見慣れない森の中をとりあえず歩く。

「よいしょ・・・っと」

背中に背負った荷物を背負い直す、と腰にさげていた細身の剣がかちやりと鳴って存在を主張する。その音にわたしは慣れない腰の剣、これを貰った経緯を思い出していた。

「取り合えず、街にいくがいいぞ」

色々なことがあり過ぎて何にも考えられなくなっていたわたしにウィンディーさんはそう言ってどさどさーと色々なものを取り出したかと思うと手ごろなりユックに詰め込み始める。

「え、あ、あの・・・？」

「手ごろなものを詰め込んでおくから持っていけ、どうせ使う者ももうおらんから文句はどこからも出んぞ」

この人の言葉は本当に一々物騒な空気が漂うな・・・ってそうじゃなくて！

「ま、街に行けって・・・うあ！」

わたしの言いかけた言葉はウィンディーさんに押し付けられたりユックサックによって遮られた。

わたふたと受け取るうちにウィンディーさんは何故だか泉に帰っていく。

うあ～～滑るように水面歩いている・・・じゃない！

「う、ウィンディーさん～～」

どんなに物騒で怖い人でも一人ぼっちで投げ出されるのは幾らなんでも怖い。

自然と心細い声で彼女の名前を呼んでしまった。

だけどウィンディーさんは全くわたしを顧みようとはせずに泉の中央まで来ると歩みを止めて手を水面に掲げた。

一体何をするのだろうか？

と、不意に風が吹いた。

「うぁ……」

驚いて目を瞑りかけたわたしだったけど水面の変化に気付いて必死に目を凝らした。

「水が光っている」

まるで幻のように淡い青光が泉全体から発せられていた。

「な、にこれ……」

光がまるで意思があるようにウィンディーさんの立つ中央へ……正確には彼女が水面につけた手の元に集まっていく。

とくん。

その光景に何故だか心臓の鼓動が早くなるのを感じた。
ざわざわと空気が騒いでいる。

何かが、何かが普通とは違う。

ウィンディーさんの手元が一際大きな光を発する。

ふわっと目もくらむような光の中からウィンディーさんが何かを

引き抜いたのが辛うじて確かめられた。

ばんっ！と水柱がたちそれが一気に散開した。

「きゃっ！」

水圧と水で思わずよろける。

水がまるで狂ったかのように泉の周囲で暴れまわる。

不意に飛んできた水の塊がへたりこんだわたしのすぐ側の地面を抉って消えたのを見てわたしは血の気をなくした。

「ウィンディーさん~~~~~~~~~！」

先ほどよりもよほど切羽詰まった声で名前を呼ぶと泉の中央にいた彼女がようやくわたしの方を見てくれた。

情けなく座り込むわたしを見て実にいい笑顔で笑われて思わず唇を尖らせてしまう。

そんなに笑わなくてもいいのに……。

釈然としない気持ちのまま立ち上がるとフワリとウィンディーさんが再びわたしの前に現れる。

相変らず体重を感じさせない動きをするウィンディーさんの手には先程まではなかった一振りの青い剣。

彼女はまるで我が子でも抱くような手つきで剣を鞘から抜き放った。

鮮やかな青い刀身から零れた光がわたしの瞳にうつり込み、目を奪った。

「これは魔剣じゃ」

「まけん？」

「大妖たるわらわが生み出した水の魔剣」

ウィンディーさんの言葉に反応するように青い刀身に水のような波紋が広がる。

これが普通の剣じゃないことぐらい何も知らないわたしでも分かった。

雰囲気というかそういう「力」を無条件で感じられた。とくと心臓の鼓動が耳を打つ。

それはわたしの鼓動でありわたしのもではない鼓動。違うはずの鼓動はけど同じタイミングで打つ。

水のイメージがわたしの中に広がる。

青い青い深い色。

凪いだ水面を思わせる刀身にわたしが映った。

「名を」

「名？」

全身青尽くめのウィンディーさんの唯一赤い唇が三日月の形になる。

「そう、名前じゃ。この刀には名がない。生まれたばかりの文字通り赤子じゃ。そしてそれゆえに名が必要」

名をと再度催促される。

青い色が思考を染め上げていく。

——なまえ……。

幼い、少女のような声がわたしの耳に微かに届いた。

——あたしの、なまえ・・・なあに？

舌足らずな幼子の声に導かれるようにわたしは手を伸ばしてウィンディーさんから剣を受け取った。

ウィンディーさんは何も言わずにわたしに剣を手渡してくれた。予想以上に軽い剣を両手で持つてその青い刀身を見詰める。

——つけて？あたしの、なまえ、おしえて？

とくんと心臓の鼓動がまた、聴こえてわたしは目を瞑りそして悟る。

重なっている鼓動はこの剣の鼓動だ。

いま、誰よりもなによりもわたしとこの剣は繋がっている。

「あなたの、名前は・・・」

——なまえは？

わくわくとまるでプレゼントを貰う前の子供のような声と待ちきれない気持ちかわたしにまで伝わってきて思わず口元が綻んだ。

それは不思議なほどすんなりわたしの口から零れた。

まるで最初から紡がれることを待っていたかのように水の雫が落ちてくるようにわたしの中にあつた。

「アクア」

わたしの口がその名を口にした途端わたしを中心に青い光の魔方阵が現れる。

それと同時に空気が震え、再び盛大に水柱が上がった。

「な、なに！」

——アクア！あたしはアクア！名前、もらった！

腕の中の剣から直接叩き込まれた声なき声にわたしは目を剥くがそんなのはお構いなしに剣から聴こえてくる歓喜の声にあわせて盛大に水柱は立つは魔方阵は光を増していくはで事態ははっちゃかめっちゃかな方向へと突き進んでいる。

「な、な、な………」

周囲を舞う水は一滴たりともわたしを濡らさず、光はよく見ると魔法陣に描かれている文字のようなものがそのまま浮びあがっておりそれらはくるくるとわたしの周囲を回っていた。

呆然唖然驚愕のわたしの腕の中からふわりと剣が浮かび上がる。

座り込んだわたしの目線に浮んだ剣に幼い少女の姿が重なる。

年は十歳前後の青い髪に瞳のどこか巫女を思わせる服をきた少女はわたしの顔をみるなり嬉しそうに顔をほころばせ腕を伸ばしてきた。

——主！貴女はあたしの主！

ふわりと抱きついてくる少女の腕がわたしの首に回る。

反射的に抱きとめようと上げたわたしの腕はただ何も掴むことが出来ないまま宙を抱きしめた。

まるで幻だったかのようにわたしに抱きついてきた少女の姿が消える。

同時に光も魔方阵も水柱も綺麗に消え去る。

残ったのはへたりこんだわたしと目の前に落ちている一振りの剣。

「選ばれたようじゃな」

顔を上げるといつの間にかウィンディーさんがいた。

のろのろと剣を拾い上げる。なんだか・・・何が起きたなんて理解できないけどこのままこの子をここに転がしておくのはなんだが忍びなくて再び抱きかかえる。

腕の中の剣が微かに光って震えたように感じたけどきつと気のせいだ。

思い出したら何だか余計に腰の剣が重く感じられてわたしは足を止めて剣に恐る恐る触れる。

硬質な感触と一緒に冷たさを感じてびっくりして手をすぐに引く込めた。

あの後、ウィンディーさんはわたしに荷物とこの剣を押しつける
とほぼ無理矢理わたしを追い立てたのだ。

「ちよつと！」

と振り向いた時には泉もウィンディーさんも居なくて、そこにはただただ深い茂みが広がっているだけだったのわたしはあっけにとられてしまった。

まるで魔法のように消えてしまったけど剣と荷物だけはしっかりと手に持っていてこれまでのことが夢ではないとわたしに教えてくれた。

見渡せば鬱葱と広がる深い森。

どんな獣が潜んでいるのかも分からずしかも獣どころか魔物までいる。

「どうしろって・・・言つのよ・・・」

剣と荷物を抱えたままわたしが途方に暮れたとしても仕方がないと思う。

先行きが不安すぎて泣く気にすらならない。

人間想像も絶する状態に陥ると混乱を通り越して何も考えられなくなるんだあ……。

妙な納得をしかけていたわたしだったけど遠くの茂みがかざりと鳴った音に肩をびくつかせた。

な、なに……。

茂みにはものすごく嫌な心理的外傷がある。まだかさぶたどころか真新しすぎる傷に反射的にわたしは荷物と剣を抱えなおし一目散にその場を駆け出した。

途中でスツ転んだりその際散らばった荷物の中から剣を腰に下げる帯みたいなのが見つかってそれをつけたり再び物音で全力で逃げたりして今に至る。

歩けども歩けども途切れない森、現れない人、あっちこっちから聞こえる物音に一々反応して精神的にも肉体的にもかなり消耗していく。

うつっ……なんで……どうしてわたしがこんな目に？

ほんの数時間前までは普通に高校生だったはずなのに……。

とぼとぼと歩くわたしはもう時間間隔もなければ自分がどれだけの距離を歩いているのかさえも把握できていない。

じんわりと涙が滲んでくる。

知らない。

こんな場所知らない。

どうして、どうしてわたしがこんな場所にいるの？

「なんで……」

考えはじめると後は坂を転がるように思考が暗い方向へと転がり落ちていく。

自分が巻き込まれた理不尽さにどうしようもないくらい苛立つて今すぐでもいいから戻りたいと思った。

こんなわけのわからない世界じゃなくて自分の世界に戻りたかった。

「なんで！」

わたしの激昂した声が森に響く。

「なんでわたしがこんな目に遭わないといけないのよ!!」

もう頭の中がぐちゃぐちゃして心が物凄く荒れていた。

「もう嫌！」

叫んでもだだを捏ねても森は相変わらず鬱葱としていて人の気配ない。

それが余計わたしの癪に障っていく。

「ウツ……うああああああ！」

座り込んでわたしは大声で泣いた。

そんな大声で泣いて危険な生き物が近寄ってくるとかそんなこと考えている余裕なんてない。

癪癪を起こした子供のようにその場に座り込んでわーわーと泣い

た。

まるで泣けば誰かが助けしてくれる、元の世界に帰れるそう思い込んだみたいに泣いていた。

現実なんてそんなに甘くない。

誰も手を差し伸べてなんてくれない。

わたしがどんなに泣いて助けを求めても現実は見知らぬ世界の見知らぬ森の中で一人ぼっち。

泣いて、泣いて。だけど誰かに引っぱり上げて貰うのではなく自分の足で歩き出さないといけない。

わたしがそう悟るのはもう少しだけ、先のこと。

今はただ、泣いていたかった。

助けてもらえるって信じたかったのだ。

たとえそれが儚い願望でも、わたしは信じたかった。

誰も助けてなんてくれないって心のどこかで悟っていたけど。

くくつと想像以上の展開に彼は面白くて笑いがこみ上げてくるの止めることができなかった。

「まさか、魔剣の主になるなんてね・・・」

予想外もいいところだ。

大抵のことはやってのける力をもつ彼でさえも予測できない事態を引き寄せて見せた少女は実はものすごい運の持ち主ではなからうか。

上に「強」がつくか「凶」がつくかそれは知らないが。

「さあて、泣いている場合じゃないよ。ミノリ」

魔物が生み出す魔剣。
精霊が生み出す聖剣。

聖剣の持ち主は精霊の加護を受けし世の平定を導く者。
魔剣の主は力に溺れ、世に災いを招く争乱の担い手。

このままではミノリが人から迫害され、やがては狩られるのは明白だ。

だが、彼はそれでも笑っていた。

彼は彼に科せられた事情でミノリを選んだ。

その心に抱え込んだ闇が面白そうという理由で選んだミノリはしよっぱなからこちらを裏切るような予想外の出来事をばんぽんと呼び込み続けている。

水の大妖に遭遇しておきながら五体満足でいるだけではなく彼女から魔剣まで持たされた。

ここまでの展開、彼にとっては本当に予想外だ。

「最初の魔物に襲われた時点で死ぬかと思ったけど……」

その危機を彼女はどうか回避してみせた。己の知恵ももっていた道具と度胸だけで。

彼がほんの短い間の玩具だと思っていた少女に彼が少しばかり違う感情を抱き始めた瞬間だった。

「今までの人間とは少し違うということかな。さて、君はどう足掻く？」

足掻く様すら面白いと彼は笑う。

その声も眼差しもミノリには届かない。

彼とミノリは視線も声も届かない絶対的な距離にいた。その眼差

しが交わることは無い。

泣いて泣いてとことんまで泣いたらなんだかものすごくスッキリした。

目の端に引つかかっていた涙を拳で拭くとわたしは気合を入れるように頬を両手で叩いた。

「よし！」

散々泣き続けたせいか頭上の太陽はもう西に傾いている。頭が大方、現実を見詰め始めていた。そういえば・・・もうすぐ夜だ。

「寝れる場所、探さないと」

野宿なんてしたことないけどどうにかしなきゃ。

「えっと・・・見晴らしが良くて、何か近づいてもすぐに分かって、出来るなら水が近くにある場所がいいかな？」

ずらずらと思いついたままを口にだしながらわたしは野宿できそうな場所を探す。

つつい言葉をついてしまうのは黙っていると静けさが忍び寄ってきて怖いからだ。

「つかれた・・・」

どうにかこうにか見つけた大木の根元に蹲る。

辺りは真っ暗。空に浮ぶ星と月の灯だけが仄かに森を照らしていた。

だけど、さすがに色々あり過ぎて夜空を見て綺麗だと思うほどの余裕がない。

瞼が酷く重かった。

眠い。

思いつきり泣いたせいかもしれない。駆けずり回ったせいかもしれない。身体が物凄く疲れている。

あ、そうだ……。もらった荷物の中身全然確かめてない……。のろのろと荷物を引き寄せて、だけど眠気には勝てずにそれを枕にしてしまう。

「ねむ……」

すうと眠りが訪れる。

長い長い一日がようやく終わろうとしていたことすら気付かずわたしは夢さえ見ない眠りへと落ちていった。

ざわざわと風が森の木々を揺らす音が耳に心地よい。

ごつごつした木の感触。

そして頬に触れてくる大きな温かい……。手？

まどろみの中に感じた違和感にわたしは目を瞑ったままむつと眉を顰めて考える。

手？なんで、手？

だらだらと汗が背中を流れる。

え？本当になんで手？というかなんで明らかに男の手がわたしの頬を撫でているの？

予想外過ぎる事態に硬直しているわたしをいいことに手は頬を撫

でそのまま顎まで下がり・・・唇をなぞって・・・。

って！ちよつと待って！

素肌を撫でられる感触にぞわりと鳥肌が立った。

さすがに手が露出した首を緩やかに撫でてさらに下に下がろうとした段階でわたしははつきりと意識を覚醒させて目を見開いて叫んだ。

「なっ！なにするんですかああああ！！」

今、まさに胸元を緩めようとした手を跳ね除けながらわたしは座ったまま後ろに距離を取った。

服をかき集め涙目で睨みつけるわたしに寝起きを襲った変質者はにこりととても好青年に見える笑みで手招きした。これが普通の街中でしかも女の子ならついふらふらと寄っていきかねないオーラが出ていたが生憎とわたしは平常時にも見知らぬ人に手招きされてついて行くことはない上に今はその平常時ですらない。

怪しすぎる変質者についてくほどわたしの頭はお目出度くはない。

わたしはじりじりと距離を取りながら男を観察する。

年の頃は二十歳前半だろうか。酷く整った顔をしており細めた目は綺麗な紫色で黒い髪を動物のしっぽのように後ろに結んでいる。

美形・・・だけど変質者の時点で全ての外見的長所がチャラにされている。

そして男はファンタジー映画にでも出てくるような戦士の格好をしていた。まあ・・・別の世界だからそういう格好の人が出てきても可笑しくはないようね。うん。

しゃがみこんで手招きしている彼の腰にはばっちり剣がぶら下がっているのを見てしまったわたしは軽い目眩に襲われた。

寝起きに剣を所持した変質者に遭遇するとは・・・わたしの運はとことん悪いようである・・・。

「あはは。そんなに怖がらなくてもいいじゃない。こっちにおいてよ」

「い、行くわけじゃないですか！ね、眠っている女にベタベタ触るような人に近寄りたくなんでありません！」

わたしが捲くし立てると目の前の変質者はきょとんと目を見開いてまじまじとわたしを見た後意味ありげに口の端を上げた。

「ふゝん。そつか。僕には近寄りたくないか」

そつかそつかと妙に物分りのいいことを言う男にわたしは段々と不安になってきた。

なに・・・この人・・・。

理解が出来ない。

いや、全然見知らぬ人だし変質者の心理なんて理解したくもないのだが・・・それでも・・・なんというか・・・。

「でも、さ・・・」

近くで聞こえた声にはつと視線を上げると信じられないくらい近くにまで距離と縮められていた。

「あつ・・・」

逃げようとする腕を掴まれ無理やり男の方をむかされる。

「残念ながら僕の方には近寄って欲しい訳があるんだよね」

につこりと笑う男。柔くてとても紳士的な笑顔であるのにわたしを捕まえる腕の力は痛いぐらいでその笑顔との落差にわたしはすと胃の下辺りが冷えるのを感じた。

紫色の綺麗な瞳が冷静にわたしを見下ろす。

正確にはわたしの腕の中の剣を。

「まさか、こんな所で魔剣の主に出会うなんて運がいいのかな？ 悪いのかな？」

その言葉はわたしに向けられたものかそれとも彼自身に向けられたものなのか。

くすくすと楽しそうに男は笑う。

笑いながら彼はわたしの喉に銀の刃を押し付けていた。

いつ抜いたのか全然分からなかった。

押し付けられた刃の冷たさと首筋を流れる血の熱さにわたしは今、彼がわたしに明確な殺意を持ったことを知った。

「ま、いつか。どうせ殺すことには変わらないもんね」

紫色の目が楽しげに揺れてわたしを見る。

くすくすと邪気のない笑顔。子供のようだと言ってもいいぐらい無邪気な笑顔で死神はわたしに笑顔を見せて、そして命を絶つ剣を動かした。

「さよなら」

朗らかなその言葉と銀の刃の冷えた輝きが酷く対照的でわたしの目に鮮やかに焼きつく。

わたしの視線は迫り来る銀色の軌跡ではなくただ真っ直ぐにわた

しを見る紫色の瞳だけに囚われていた。

恐怖が一瞬消える。

ただ見詰め続けるだけに意識が向かう。

銀の軌跡がわたしに振り下ろされた。

殺されると思った。

確かに銀の軌跡はわたしの首を切り裂いたはずだ。

なのに銀の刃はわたしを切り裂かず、わたしの頬を軽く切り裂いただけで止まっていた。

呆然とわたしは冷たく細められた紫色の瞳を見上げた。

アメジストのような綺麗さ。冷たくて体温を感じさせないその瞳に恐れを抱くのと同時に妙に引き付けられた。

「どうして避けないの？」

「なぜ、殺さないんですか？」

言葉は同時に空気を震わせた。

男がくいつと刃でわたしの顎を上げさせて視線を合わせた。

「質問していいとは言っていないよ」

男が笑う。

まるで人形のように整った作り物めいた笑顔。

「殺されたいの？」

黙って首を振ると「じゃ、黙って。僕の質問以外は答えないよう

に」と釘を刺されたのでわたしは緩慢に首を振った。

色々な感情が酷く鈍い。

恐怖だけが酷く鮮やかなのにそれもどこか遠く感じる。

「そう、いい子だね」

にっとうと男は剣をわたしの顔のすぐ側の幹に剣をこれ見よがしに突き立ててわたしの顔を覗きこんだ。

まるで甘く恋人に睦言を囁くように彼はわたしに囁いた。

「君は、何者？」

わたしはぼんやりと彼を見上げる。

彼は何を言っているのだろうか？

わたしが何者か？

そう、聞いているの？

それが頭に届くと同時に疑問が胸に浮ぶ。

わたしは・・・別に何者でもない。

そんな特異な存在ではない。

ちっぽけで弱くて矮小な人間だ。

「わたしは・・・」

口がかすかに動くがそれから先の言葉が出てこない。

上手く、言えない。

胸の中に蠢く感情だとか言葉とかが自尊心とかが邪魔をしてわたしは結局言葉をとめた。

自分が矮小な人間だと分かっているのにそれをいざ口にしようとするのは嫌だった。

本当にどこまでわたしは・・・。

自己嫌悪だけが沸き起こってくる。

「言えないの？」

なら、殺すよ？と男が剣を持つ手に少し力を入れる。

それでもいいような気がした。

もう色々あり過ぎて抱えすぎて疲れた。

これが一番楽になれる方法だと思ってわたしは全てを諦めた。

「どうぞ」

それだけ言ってわたしは瞳を閉じた。

もういい。

もういいのだ。

身体中から力が抜けた。

目を瞑って闇の中でわたしは終わりを望んだ。

しばらく沈黙が続く。

いつまでたっても訪れない終わりにわたしは再び瞳を開けた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

開けると剣の柄に手をかけたままで男が非常に不機嫌そうな顔でわたしを睨んでいた。

なんで？

疑問が湧いてくる。

疑問が湧くということは麻痺していた何かが正常に動き始めたってことだけそれをわたしは理解できてはいなかった。

ただ、少しだけ動き出した感情でわたしは男を見た。

「面白くない」

「…………はい？」

ぼつりと呟いた男の言葉にわたしは思わず聞き返してしまった。
いま、なんて言った？面白くない？

（何が？）

「面白くないなあ……。そんなあっさり無抵抗になられたらさ
僕がつまらないよ」

だだをこねて拗ねる子供のような顔で男がわたしに文句を言うてくる。

そんなことを言われてわたしは困る。

ざざつと風が森の木々を揺らして走り去る。

「つまらない？」

「うん。つまらない」

真面目な顔で頷かれた。

本気で反応に困ってしまうのはわたしだけでしょうか？

「つままないなあ……もつと抵抗しなよ」

ぺしぺしと剣で頬を叩かれてそんなお願いをされてしまってます
ますわたしは困ってしまう。

ごくりと唾を飲み込んでからわたしは意を決して口を開く。

……質問に答える以外は口を開くなと言われていたがそれで

も聞かずにはいられないことがあった。

「も、もしも・・・」

「うん？」

男は不思議そうに首を傾げたけどそれだけで別に切りなかったりはしなかった。

「もしも・・・わたしが抵抗したらどうしたんですか？」

「え、それは勿論殺していたよ」

あつさりキツパリ当たり前のように言い切られてわたしは抵抗しなくて良かったと心の底から安堵した。
彼はやる。きっとやる。必ずやる。
それを確信できるぐらいにはこの人は分かりやすい。

「抵抗しない今はどうするんですか？」

「うーん？どうしようかな？」

悩む男は何故だがわたしにわたしの処遇について相談してくる。
怖いと思えばとぼけたことを言う。
全く目の前の男が理解できない。

「殺さないんですか？」

「殺して欲しいの？」

ぶんぶんと勢いよく首を振って否定しておく。そうしておかないとあっさりと「じゃあ殺す」とかいつて首を搔っ切られそうだ。

「ねえ」

「はい！」

「殺して欲しい？」

「いいえ！ちつとも！」

「そう・・・うーんどうしようかなあ～～抵抗されないのはつまらないしなあ～～君が抵抗してくれば楽なんだけど・・・」

ちらりと横目で見られて引きつった笑みが浮ぶ。

ものすごく抵抗することを期待さらえているがその先が自分の「死」ならわたしは全力をもって抵抗しない。

「面白くない」

不機嫌そうに口を尖らせ男は剣を幹から抜くとそれを慣れた動作で鞘に納めた。

「君は面白くない・・・」

そう言つて男は・・・。

「ぐっ！」

わたしの鳩尾に容赦なく拳を叩き込んだ。

「なっ・・・」

鈍い痛みが広がり意識が遠のく。

「面白くないくせに、興味深いなんて生意気な子だね」

そんな不機嫌なのかそうでないのか微妙な声で囁かれた言葉を最後にわたしは意識を閉じた。

『おねえちゃん!』

いつからだろう。

屈託なく笑う妹の笑顔が真っ直ぐに見れなくなったのは。

明るい声が顔が喋り方全てを妹と比べて一人落ち込んでいたのはいつから？

『なあに。みなと!』

屈託なく伸ばされた手を繋げた時も確かにあったのはずなのにわたしはいつからその手を離してしまったの？

疑問に答えはない。

ただ今があるだけ。

選んだ今は望んだものではなくだけど変えるだけの勇氣はわたしにはなかった。

何の邪氣も劣等感もなく『大好き』と言えない自分が一番嫌い。

見知らぬ石の天井を寝起きの頭でぼんやりと見上げる。

ここ、どこ？

疑問に思いベットから起き上がると腹部にかすかに痛みが走った。

「・・・っ・・・」

腹を押さえて辺りを見渡す。

石造りの飾り気のない部屋。

特に何かを言うべき箇所がないごくごく普通の部屋。

「ここ、どこ？」

寝起きで頭が上手く働かないがそれでもこの場所にわたしがいるのはおかしい。

だって・・・わたしは意識を失う前まで森にたんだよ？それがなんで普通のベットの上？

「・・・」

そこまで考えて直前までの諸々が蘇ってきてわたしは固まった。

「えつと・・・」

痛みの走る腹。

いるはずのない部屋。

これって・・・もしかして・・・もしかして・・・？

「拉致監禁？」

いやいや。監禁まではわからない・・・ってドア、開かないし窓も逃走できないように細工されている！

がちゃがちゃと回らないノブに完璧に顔が引きつった。

先ほどのセリフから？が完璧に消えた。いまのわたしの状況それは立派な「拉致監禁」だ。

ど、どうする？どうするのが正しい？

答えなんて出るわきゃない。

普通の女子高生がこんな状況に追い込まれてそれで適切な行動がとれるわけがない。

ノブに手をかけたままわたしは茫然としていた。

事態に頭が付いていかない。

「落ち着け。考えろ」

ドアに額をくっつけてこの状況を打破すべく頭を働かせる。

鍵が掛かって閉じ込められている。

でもわたしは生きているということは相手はわたしを今のところは殺す気はない。それでもって逃げ出されるのも望んでいない。

相手がどういふつもりなのかはわからないが取り合えずはわたしを生かすことに意味を見出していると考えてもいいと・・・思う。

意識を失う寸前のあの男との会話を思い出すと心元なくなってくるけど。

「どうする」

相手の思惑がちつともわからない以上わたしに取れる対策は少ないすぎた。

「どうする。わたし」

こつんとドアに後頭部を押し付けてわたしはそのままずると床に座り込んでそのまま膝に顔を埋めた。

このままここに居るべきか、それとも逃げ出すべきなのか。

・・・なんかどちらも命が危ない気がするのはどうだろう。

脳裏に浮ぶのはここに閉じ込めただろう張本人の胡散臭すぎる笑顔。

逃げ道なんてない気がした。

ふうと溜息が零しかけたわたしの耳にこつこつと近づいてくる足音が届いてびくりと反射的に立ち上がった。

誰か、来る。

ど、どうしよう。

あああわと拳動不審に辺りを見回してわたしは咄嗟にベッドの下に隠れていた。

別に隠れる必要はどこにもなく普通にベッドの上に戻って寝た振りでもしてれば良かったと気付いたのは部屋のドアが開いたときだった。

今更出て行くわけにもいかないわたしはじっとベッドの下で息を潜める。

部屋の中に入ってきた人物は迷うことなくわたしの隠れるベッドに近寄ってくる。

ブーツが見える。

近くに來られてわたしは必死に息を殺す。

気付くな。気付くなよ。気付かないで！

「おや？」

ベットの上にわたしがいないことに気付いたのか少し驚いたような声が響いた。

というかこの声・・・。

忘れもしないあの男の声だ！

そう気付いた途端どくどくと心臓が馬鹿みたいに早鐘を打つ。

「うっくん？どこに行つたのかなあ？」

閉じ込めていた人間が消えた割りに男の声に焦りは感じられない。こつこつと男はベットから離れ、わたしが一先ずほっと息を吐きかけたその時、行き成り足を掴まれる。

「ひゃっ！」

そのまま容赦なくベットの下から引きずり出された。完璧に不意を疲れたわたしは抵抗することもできずに床で鼻を擦る破目になった。

痛い。物凄く痛い！

ひりひりする鼻を手で押さえるわたしだったが見覚えのある紫色の瞳に上から覗き込まれているのに気付いて血の気が引いた。

恐る恐る顔を上げるわたしの腕を掴みながら男はにつこりと満面の笑顔を浮かべた。

「おはよう。随分面白い寝相だね」

嫌味以外の何者でもない言葉にわたしは乾いた笑いを返すしか出来なかった。

し。
にっこにっこ笑う男に確実に引きつり笑顔を浮かべているわ

側から見たらさぞ滑稽な光景であろう。

赤い髪のアリス

—おいで

闇の中から誰かが私を誘う。

不思議な声。聞き覚えのないのに聞き覚えのあるような気がする。こんな声、全然知らないはずなのに、知っている。不可思議な感覚。

だれ？

問い掛けに声は答えずただ私を誘うだけ。

—こちらにおいで

私を呼ぶのは、だれ？

胸がざわめく。身体がどこかに引っ張られるような感覚にひやりとしたものを感じた。

—もうすぐ、君に逢える

声が嬉しげにそう囁く。その言葉だけは耳元で囁かれたかのように近くで聞こえて私は軽く目を瞬いた。

ふわりと風が私の髪を撫でた感触がした。声が笑う。

—アリス。君に、逢える。

声が水の音に変わる。

その音に私の身体が竦む。

いやな思い出が蘇ってくる。

水は嫌いだ。

大切なものを遠くへ連れて行つたから・・・水は怖くて嫌い。

不意に空気が水になる。突然の出来事に私はなす術がなく水に沈んでいく。

息が出来ない。水が気道を塞ぐ苦しさ、どれだけ足掻いても手足は重く身体はどんどん下へ下へと落ちていく。

視界が揺らぐ。上の方で光が揺らいでいた。

がぼつと最後の空気が私の口から気泡となって登っていく。

ユラユラと揺らぐ視界。

苦しい。

苦しい。

苦しい。

(・・・・・・・・ス・・・・・・・・)

意識を失う寸前、視界の端に金色の髪が揺らぐのが見えた気がした。

「~~~~~っ!」

がはつと私は起き上がった。

「はあはあはあ！」

心臓がバクバクいつている。息が全力疾走したあのようなあがつていてしばらく私は何もできなかった。

「なんで……あの夢が……」

今更だ。何年も前の出来事なのにいまだ鮮明に夢に見る。

忘れていない。

あの苦しさ。怖さ。絶望を。

忘れられない。

水が連れて行ってしまった大切なものを。

きつと私はまだ、許されてない。

彼女に許されない。

「……馬鹿だな……私」

死者は何も語らないから死者なのだ。

死者は何者を許さないし責めない。償いを求めない。それらを求めるのはいつだって生者だ。

寝間着が汗でぐっしりと濡れて張り付いてくる。……気持ち悪い。

着替えないといけない思いながらも私はしばらく身動きができなかった。

「アリス？どうしたの？」

私を起こしにきた姉が私を一目見るなり血相を変えて駆け寄ってくる。

「アリス！」

姉の手が私の頬に添えられ無理矢理顔を向かされる。青ざめた姉の顔。姉の手も身体も震えており私より姉の方が倒れてしまいそうだ。

「ああ・・・なんて顔色なの！大丈夫？気分が悪いの？」

矢継ぎ早な問い掛けに私ははつきりと大丈夫だと伝える。

ここで曖昧にしたら姉のことだ。私をベットから出しはしないだろう。

「大丈夫よ。怖い夢を見たの。それでベットから出るのがちよつと怖かったの。心配させてごめんなさい」

可愛らしく子供のような理由をでっち上げる。夢見が悪かったのはホントだからまるつきり嘘だというわけではないので私の良心はあまり痛まなかった。

「ほんと・・・？アリス？」

「本当よ？だから私はほら、元気でしょ？」

恐る恐る触れてくる姉の手を頬に導く。姉の手は温かい。恐らく姉も私の頬の温かさを感じているはずだ。姉がホツとしたように微笑んだ。

「本当に、大丈夫なのね・・・」

身支度を整えた私は安心した姉とともに朝ごはんを食べる。私が

学校であつたことを話すのを姉が嬉しそうに頷いている。

いつもの朝。変わらない光景。

それなのにその日はどこか違っていた。

変わらないはずの日々のはずなのに、どこか違う風に感じられた。

―おいで

「・・・・・・・・・・っ」

「アリス？」

突然後ろを振り返った私に姉さんが不思議そうな声を出した。

駄目だ。姉さんを不安にさせちゃいけない。

私は無理矢理笑みを作って姉さんに語りかける。

「ううん。なんでもないわ」

「そう・・・。そうだアリス新しいリボンを買ったのよ。貴方の金の髪によくあう青い色なのよ。さあ、こちらにおいでなさい。つけてあげるわ」

うらやかな日差しが差し込む庭で姉さんが嬉しそうに私の髪を梳いていく。私は姉さんにされるがまま大人しくしていた。

姉さんが嬉しそうに私の髪を梳いていく。丁寧に大切なものを扱うかのように梳かれていくのを私は感じた。

白い荒れたことなどない手が器用にリボンを結んでいく。

「はい。出来たわ。うん。よく似合っているわよ。アリス」

鏡、鏡と姉さんが小さな手鏡を手渡してくれる。小さなその手鏡

を裏返したまま私はすぐには覗き込めなかった。
躊躇いが手を留める。

「どうしたの？アリス？」

「ううん。ちょっと見るのが怖いかな・・・って」

「あら、心配しなくてもちゃんと可愛いわよ」

姉さんは私の言葉を違う風に捉えたらしくおかしそくに笑っている。

それに私も笑い返す。無邪気な子供らしい素直な笑み。それを必死になつて装う。

手の中の鏡を恐る恐るひっくり返す。そこに映し出されるものが何か知つていてもなお緊張せずにはいられない。

小さな鏡。だけど鏡は嘘を映し出さない。

どんなに嘘偽りで塗り固めていても鏡は素直に存在の本質を現す。鏡に映し出されるのは私の姿。

「ほら、可愛いでしょ？」

にこにこと姉さんの笑顔がうつり込む。緩やかなウェーブがかつた金の髪に澄み渡った青空のような青い瞳。慈愛に満ちた笑顔がよく似合う人だ。

「あなたの金色の髪にとてもよくあうわ」

ハシヤグ姉さんの声がどこか遠くに聞こえる。

鏡に映ったのはどこか途方に暮れた真っ直ぐな赤い髪と目を持った少女。その顔が戸惑ったように私を見ていた。

鏡は嘘を付かない。嘘を付くならそれは人間の方だ。

姉さんが用意してくれた青いリボンは私の赤い髪にはちっとも似合っていないかった。

私は金の髪のアリスではない。

本物のアリスはとても可愛らしい子だった。

日の光を紡いだような金の髪、深い湖面を思わせる青い瞳にはいつも闊達な光が浮んでいた。年のわりに大人びていて悪戯好きでだけど誰も本気で嫌えない。

明るくて誰からも好かれていた。彼女の周りにはいつも自然に人が集まっていた。

私とは全然違う。

私は無愛想で人見知りが強い。少なくとも人当たりがいい人格ではない。

アリスとは正反対の人間だ。

だけどアリスと私は友達だった。

少なくともアリスはそう言ってくれていたし私も彼女を友達だと思っていた。

アリスはお屋敷の御嬢様で私はそのお屋敷で雇われた使用人だったとしても。

身分の差はあったけどアリスはあまりそういうことを気にする子ではなかったし彼女のお姉さんもそのことで私たちを責めたりはしなかった。

私がアリスと同じ年だったからよい友達になるとでも思われたのかも知れない。

とにかく私とアリスの交流は特に咎められることなく続いていた。

「ねえねえ！あつちに綺麗な椿が咲いたのよ。一緒に見ましょう」

「ピクニックに行きましょうよ！！お弁当を持ってお姉さまと一緒に！」

「家庭教師の先生が難しい宿題を出されたの……」

穏やかでありふれた日常もアリスがいるとどこか華やいで見えた。仕事の合間にアリスに連れまわされるのは酷く疲れることもあったが楽しいことの方が多かった。

「わたし！貴女のこと大好きよ！一生友達でいましょうね！約束よ！」

澁刺とした笑顔でそう、言ってくれたアリスはもういない。

—おいで

部屋で一人私はノートを広げていた。だが、その紙面は白紙で先ほどから全く進んでいない。

休み明けに提出しなければならない世界史の課題なのだが先ほどから一文字もたりとも進んでいない。開いた資料が風でばらばらとめくれているがどうにかする気にはなれなかった。

一向に進まないノートの上にペンを投げ出すと私はボンヤリと窓の外をみた。

開けっ放しの窓からは気持ちの良い春の風が入ってくる。

—こちらにおいで

気持ちの良い風だ。ついうとうと居眠りをしたくなる。眠気が私を緩やかに包んでいく。

ああ、眠いなあ……。

私の意思に関係なく瞼が下がっていく。

眠い……。

我慢ならないぐらい眠かった。

（おかしいな……昨日はよく、眠ったはずなのに……。）

まるで徹夜したみたいに眠い。

ゆるゆると瞼が閉じていく。視界が狭くなっていくのを他人事のように私は感じていた。

閉じていく視界の中で誰かが窓から入ってくる気配がした。有り得ない。ここは三階。伝うような木もないのだから誰が入ってくるはずもない。

物音に微かに瞼が上がる。ボンヤリとした頭の片隅でそんなことを考えながらも私は身を起こす。

カタンと先ほどより大きな物音が聞こえた。さらにはつきりと意識が鮮明になっていく。

「……………だ、れ」

瞼が完全に開いていく。

誰がいる。

もはやそれは確信だった。

この時点で眠気なんぞ吹っ飛んでいた。はつきりと瞼が開く。

今まさに私を抱き上げようとしていた不審人物とまともに目が合う。

「……………」

互いに無言。いや同じ無言でも互いに意味が違う。
不審人物は私起きたことへの驚きのための無言。
そして私の場合は・・・不審人物の格好への驚きのための無言だ。

「・・・・・・・・ねこみみ・・・・・・・・」

そう、猫耳だ。

まごうことなき猫耳。あの三角のぶつはどこからどうみても猫耳にしか見えない。

「あ、目が覚めた？」

猫耳をつけた不審人物がとても不審者には思えないほど堂々とした態度で微笑みかけてくる。

男だ。まだ若い二十歳前後。整った愛嬌のある顔をしていて大抵の女なら好印象を抱くだろう。・・・・・・・・頭の上の黒い猫耳さえなければ。

猫耳。しかも男の格好は黒い燕尾服に白手袋。とどめに左目にはモノクル。頭の猫耳を無視すれば立派な執事である。

念のために断っておくがこのお屋敷にはこんな酔狂な格好をする人間は一人もいない。断言できる。というかこんなコスプレ男は知り合いにはいない。

ある意味ど胆を抜かすような出会いに混乱していた頭がすっと冷める。

こんな知り合いなぞいない。ここは私の・・・・アリスの部屋。
こいつは不法侵入者。ならば私のすべきことはたった一つ。

「だれかあああああああ！！！」

零れた言葉はすぐさま塞がれ飲み込まれた。思わずぎゅっと瞳を閉じてしまう。

感触が離れてはまた戻る。暴れ出したのに身体はしっかりと抱きこまれていたためそれは叶わない。辛うじて自由になっていた左手首で力いっぱい男を叩くが哀しいかなまったくダメージを与えられていない。

一体なにが起きているの！

頭の中がパンクしそうだった。

ようやく唇が完全に離れた時には私は一人で立つことすらできない状態だった。

男の手が私を支えていなければへなへたと床に座り込んでいたはずだ。

唇に触れる。触れた途端に先ほどの感覚が生生しく蘇り私の顔が真っ赤になる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・な・・・・・・・・・・・・・・・・」

あまりの衝撃で言葉がでない。わが身に起こった出来事に感情と思考が付いてきてくれない。

ただただ啞然とするしかない私とは対称的に猫耳男は特に動揺を見せずなんの断りもなく私を抱き上げた。一瞬の浮遊感のあとには私は猫耳男の腕の中にいた。

予想以上に近いところにある顔に否応なく顔が赤らむ。

「あんた・・・！」

暴れる私を簡単に押さえ込みながら男はいとおしそうに私の顔を

「あああああ！！！」

私と猫耳男の身体が空中に投げ出された。
強烈な風を受けて私は半狂乱に叫ぶ。
死ぬ。ぜったいに死ぬ！

「猫耳男と無理心中なんていやだあああああああ！！！」

恐怖と絶望のあまり私は強く強く猫耳男にしがみ付く。私の目から零れた涙が上へ上へと登っていく。

「死なないよ？」

どこかのほほんとした猫耳男の声が聞こえてくる。

「あのぐらいの高さなら死ぬどころか怪我すらしないよ」

「あんた馬鹿！！三階から落ちたら死ぬ！運が良くても大怪我よ！！！」

戯けたことをほざく猫耳男に本気で腹が立った。やっと定着してきた御嬢様言葉なんて吹っ飛んでしまっている。あほだ！私は確信した。本物のどアホだ！！こいつ！！

「はいはい。落ち着いて。もうすぐ穴が開くから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・穴？」

今、穴って言ったよね？こいつ・・・・・・・・。穴なんて開いているわけ・・・・・・・・開いているし！！

私たちの落下地点にいつの間にやらぽっかりと大穴が開いていた。かなり深いらしく底は真っ暗でまったく見えない。

「なんで……穴が？」

「そりゃ、開いているから」

さも当たり前のように猫耳男が答えてくれるが生憎と私にはまったく意味が分からない。

「なんで!!」

「穴だからね。開いていて不思議はないよ」

「理由もなく自分の住んでいる屋敷の庭に大穴がいていた普通不思議に思うわよ!!」

しかも今朝まであんな大穴はなかった。絶対になかった。誰がどうやってなんの目的であんな大穴を掘ったのか謎である。

「そこに穴があるのだからその理由を問いただしてもそこに開いているとしか答えられないよ？」

私は意思の伝わらなさにクラリと目眩がした。

駄目だ。根本的に意思の疎通が離れない。

こいつは私とは違う世界に旅立つちゃっているタイプだ。くらくらす頭を抱え込みたくなった。その間も私たちは落下し続けている。今はもう大穴の中だ。上を見上げると入り口の光が随分と遠くなっていた。

どんどん落ちていく。微かに見えていた光がいまや完全に消えて

いる。

それほどまでに深い場所まで落ちてきたのだ。
死ぬ。このままだと底に激突して死ぬ！

こんなのは瞬時に死ぬか時間をかけて死ぬかの違いでしかないではないか。

「こつちの方がより性質が悪いわよ！」

恐怖で気が狂いそうだ。

「死ぬ」と繰り返す私に元凶の猫耳男はやはり余裕の態度で「死なないよ」と繰り返す。あゝなんだかこいつに当たるのも馬鹿らしくなってきたよ。

何もかも疲れた私はゆっくりと目を閉じた。

「あ、出口だよ」

猫耳男の声に再び目を開ける。

最初に感じたのは風に混じる花の香り。これって……金木犀？でも今は春のはず……

だけど風にのって香るのは確かに金木犀の香りだ。
どうなっているの？

ボンヤリとした頭にこれまでの展開は急激過ぎた。どうしようもない。

さくつと軽く草を踏む音と共に猫耳男が「到着」と嬉しげに私を地面に降ろした。

そう、地面に。

「え、え、え？」

嘘。だって今まで落っこちていたのに。

「一体いつの間に地面が……」

私が立っているのは確かに地面。草が生えていて小さな花も咲いている。

どうやら森の中の道らしく遠くに町らしきものが見えた。

試しにその場で飛び跳ねてみるが確かに地面は私の足元に存在していた。夢や幻ではない。

「え、だつて……先まで私たち穴の中を落ちていて……」

「穴が終われば出口。即ち地面なのは当たり前だよ」

相変らず説明になつていない説明をする猫耳男である。ついでに言えば出口の先が地面だろうがああ落下スピードで無傷な方がおかしい。

何から何までわけが分からないことだらけである。

彼はパンパンと服をはらう動作をすると真っ直ぐに私を見据える。モノクルの向こうの瞳が猫のように細まり私を見ていた。

「ようこそ。アリス。歓迎するよ」

拉致誘拐犯が何を言うか……！

すかさず距離を取る私に猫耳男はちよつと残念そうな顔をしていた。頭の上の猫耳がへなりと下がる。尻尾も同じように。

まるで本物の猫のようだ。だけど目の前にいるのは人間。あれだつてきつと良く出来た玩具なんだ。

だから私は猫耳男を睨み付けた。

そんな私に猫耳男は苦笑いしてから場を仕切りなおした。

「さあ、アリス。僕と賭けをしないかい？」

芝居掛った言い回しでそういう猫耳男に私は思い切り眉を顰めた。猫耳男の言い方こそ問い掛けだったが実際は違う。断定だ。この男の中ではもう決まっている。

「賭け？」

一体何を言い出すんだこいつは……。

「穴に入る前もそんなこと言っていたわね……一体何が目的？ここはどこ？あんた誰？言っとくけど私はあのお屋敷の御嬢様ってわけじゃないから身代金なんて要求するだけ無駄よ」

訳があつて御嬢様……アリスを演じてはいるが本当の私は御嬢様でもアリスでもない。

あのお屋敷とは血縁関係も縁もない使用人だ。

猫耳男は私の言葉におかしそうに笑うと「違うよ」とまるで出来の悪い生徒に諭すように言った。

「僕は貴女が本物のアリスでないと知っているし身代金なんて全然興味ない」

「だったら何が目的なのよ！」

「貴女」

さらりとんでもない言葉を猫耳男は吐いた。予想外の言葉に私の動きが完全に止まる。

「僕の目的は貴女。だから無茶をしてまで貴女をこの世界に連れて来た」

(・・・・・・・・こわい・・・・・・・・)

猫耳男は笑っていた。普通に見れば優しいとさえ言える笑顔なのに何故だが無性に怖く感じた。まるで危険な動物の前に立たされているかのようだ。

「アリス・・・・・・・・僕と賭けをしよう」

「・・・・・・・・賭け？」

「ええ。賭け。僕と貴女の二人だけの賭け。アリス、貴女は帰りたいよね？」

「当たり前でしょ！」

何を言いだすのだこの男は！帰りたいに決まっている。きつと睨みつけてやるが相手はなぜだか逆に嬉しそうに私を見ているだけだ。・・・・・・・・気持ちが悪い。

「そう、貴女は帰りたい。だけど僕は貴女を帰したくない。だから賭けをしよう。

ルールは簡単。貴女が帰る方法を見つければ貴女の勝ち。これが貴女の勝利条件」

「・・・・・・・・じゃあ・・・・・・・・あんたの勝利条件は？」

「貴女が僕を好きになってくれること。これが僕の勝利条件」

ゆっくりと相手の唇が言葉を紡ぐのが見えた。

ゲームスタート。

耳に残る声がそう呟いた。

それが私の（半ば強制的な）ゲーム開始のベルだった。

「なによ・・・それ・・・!!」

一方的なゲーム開始に私は本気で腹が立った。

「何よそれは！訳が分からない！！賭けなんて知らない！今すぐ私を帰しなさい！！」

訳のわからない出来事の連続だった。最後のこれはその最たるものだ。

訳も分からなさ過ぎる！

「あんたの賭けとやらにのるつもりはないわ！今すぐ私をお屋敷に帰してよ！！」

つかみ掛からんばかりに詰め寄る私にだけ猫耳男はまったく揺るがない。静かなけどやはり怖いと思わせる瞳で私を見ているだけだ。

無性にそれがしゃくに障る。

「黙っていないで何か言いなさいよ!!」

「なにを怒っているの?」

私が全力で掴みあげているのに男は全く不自由を感じていないかのように喋る。悔しくて悔しくて涙が滲みかけたの殆ど意地で堪える。この男にだけは泣き顔なんぞ見せたくは無かった。

男の手が私の腕を掴む。互いの息がかかる位まで顔を寄せ、私に囁く。

「本当は逃げ出したかったくせに」

突き放つ感じではなかった。むしろどうでもいい事のように言われたのに突き放されたと、そう感じてしまうのは私の被害妄想だったのか。

思考が一瞬白くなる。手が小刻みに震えていた。

「な・・・・・・・・」

思いもよらない猫耳男の言葉に声がつまった。

「お屋敷からも過去からもアリスという名前からも姉さんからも貴女は逃げ出したかった。現在の自分が嘘偽りでしかないと知っていたから貴女は逃避を望んだ。

心底望んでいたくせにいざそれらが叶うと帰りたいと願う。・・・・どうして?どうしてそんな矛盾が起きる?」

こいつ、何者・・・・・・・・。

鋭い刃で致命傷を与えられた。見えない傷口から血がドクドクと流れ落ちていく。

体中が震えていた。怖い。この男は怖い。

それは理解できないものに対する本能的な恐怖だ。

掴みあげていた手から力が抜けていく。逃げようとした身体を男の手が再び抱き寄せる。男との距離が限り無くゼロに近くなる。

「どうして？ 帰っても貴女でいられない世界にどうして帰りたいの？」

見上げると黒い瞳が静かに私を見ていた。その瞳に映る私は酷く心細そうに見えた。

男は本気で不思議そうな顔で私にそう問ってくる。なぜ、偽らなければならぬ世界に貴女は帰るのか。

“私”でいられない世界。

“アリス”でいることを強要される世界。

『わたしは貴女のこと大好きよ』

あの笑顔のいない世界にどうして……。

「アリス？」

どうしようもないくらい残酷なことを言いやがったくせに私を呼ぶ声はどこまでも優しく甘い。まるで恋人が愛しい人の名前でも呼んでいるようなそんな声が私を呼ぶ。

「……………に……………」

右手をしっかりと握り締める。強く強く。

キッと睨み付けた拍子に悔し涙が一粒零れた。

「あんたなんかには答える訳がないでしょうがぁ！」

ドガァ！

私の渾身の右ストレートががら空きだった男のわき腹に命中する。

「がはぁ！・・・」

その場に崩れ落ちかける男の胸倉を掴み上げて（火事場のなんとか）さらに二発ほど殴る。

ごき！という嫌な感触と音と共に男がぶっ飛んでいくの荒い息をつきながら見ていた。

だが、私の気はまったく晴れていない。

「いたたた。アリス、酷い・・・乱暴だな・・・」

殴られながらも男はやっぱり余裕に見えた。そしてその余裕が激昂した私をますます追い詰める。

「このっ！」

パシン！と振り上げた左手が男の頬を張る。

「この！この！この！」

続けて叩いて、終いには男の胸を拳でドンドン叩いていた。憎らしかった。心底憎らしかった。

「きらい……………」

言葉に出してはつきりと自覚する。

そうだ、きらいだ。こんな奴。こんな最低な男だいきらい。

「あんたなんて大嫌い」

涙で視界が歪む。だから男がどんな顔をしているのか私には分からない。

キツイ眼差しで睨んで心からの言葉を投げ付けてやった。

「絶対にあんたなんて好きにならない」

猫耳男が嬉しげに唇の端を上げる。まるで本物の猫のようなその笑顔。

「そうこなくては面白くない」

「……………余裕ね。とっても気に喰わない」

男の顔を引き寄せ間近で微笑んでやる。多分私の笑顔は荒んだとても笑顔とも呼べない笑顔。

こんな男絶対に好きになるはずない。

確信がもてる。

だからこの賭けは絶対に負けない。

ここまで嫌いだと思った相手は他にはいない。

憎いと心の底から思った。

「絶対に負けない」

その場の勢いもあった。目の前の男へのどうしようもない怒りも手伝った。

口からでた言葉は余りにも強い感情が込められていて自分でも何を口走っているのか把握しきれていなかった。

だけど口にしたではつきりと自覚した。

この男は許せない。負けられない。私の心の一番奥底を見透かし暴いた男を許すことなどできない。

男が緩やかに笑う。その瞳に宿る怖さがやっと分かった。

男の瞳に宿っていたのは狂気だ。狂おしいほどに何かを求めている目だ。それを私は怖いと感じていた。

なぜならそれは私に向けられていたからだ。

「僕は負けないよ。絶対に貴女を帰さない」

「絶対に帰る方法を見つけてやる」

私たちは互いに不敵に笑いながらそんなことを言う。

私は男から手を離す。男は乱れた襟を正すと嬉しげに笑ったがその瞳は獲物を前にした猫の目だ。

「アリスが賭けに乗り気になってくれて嬉しいよ」

邪気のない笑顔に背を向けた私に男が声をかけた。

「アリス」

「……何」

振り返らずに答える。顔も見たくないという意思表示のつもりだ

つたのだが生憎と相手には伝わっていないらしい。

「ゲームの案内人は白ウサギ。街に行くなら白ウサギを探してみなよ」

白ウサギ？ウサギが案内人って・・・動物園でも探せってか。

「あんたの言うことなんて信じると思う？」

吐き捨てるような言葉に返って来たのは変わらない男の声。

「別に信じる信じないはアリスの自由。僕はゲームの参加者として情報不足の貴女にヒントを与えたまで。いわゆるハンデ、という奴だよ」

かるゝいノリがやはりしやくに障る男だ。
何がハンデだ。優位ぶっているのが余計に腹ただしい。

「そのヒントをどう扱うのかはアリス。貴女次第だ」

親切ぶって聴こえるが本性を知った今となつては悪魔の囁きにしか聴こえない。

だいたい根本的な信用信賴がこの男に対してない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無言で歩き出した私に男が最後の言葉をかける。

「スカイ」

「…………え」

思わず足が止まる。それを見越したかのように男が補足する。

「僕の真名。他の誰にも呼ばれたくないけど貴女になら呼ばれても構わない」

顔は見えないけど声は今まで聞いたどんな声よりも優しい。

スカイ……空。似合わない。

そんな感想しか正直でてこなかった。

「いえ、むしろ呼んで欲しい。だから、今度会ったときには名前で呼んで欲しい。できれば僕も貴女のことを名前で呼びたいので教えてくれると嬉しいかな」

それではというのを最後に声が消える。声だけじゃなく今まで感じていた気配まで綺麗に消え去ってしまった。

慌てて振り向くとそこには誰もいなかった。

「うそ…………」

まるで幻だとも言いたくなるように忽然と猫耳男は消え去っていた。

私は思わず自分の頬をツネリその痛みに顔を顰める。

「いたい」

ということは夢ではない。

なんということかあいつは私が目を離れた間に忽然と消えてしまったのだ。謎の言葉を残して。

「なんなの・・・一体」

それにあいつ・・・

『できれば僕も貴女のことを名前で呼びたいので教えてくれると嬉しいかな』

ふざけたセリフ。だけど・・・

「誰が教えるか」

あの日。水が私の大切な人を連れ去ったあの日以来誰も呼ばない私の本名。本当の名前。

“アリス” じゃない「私」。

私はあいつがいた辺りをジッとみる。そして上を見上げた。そこにはあいつが自分の名前だと言った空が青く広がっているだけだった。

テクテクと森の中の道をしばらく歩いていくと案外迷うことなく街らしき場所に出た。

商店街なのだろうかアツチコツチに店が出ており少ない人が出入りしていた。

そんな中をテクテクと私は歩いているわけだがどうにも居た堪れない。

なぜならどうも周りから見られているような気がしてならないか

らだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

周りの人間の服装と私の服はそう変わらないから服が珍しいとかじやないわよね？

よそ者だから警戒している？

狭い田舎ならともかくここは結構広い街みたいだし、いくらなんでも全員の顔を知っているなんてことないでしょう。

「・・・・なんで？」

理由がわからない。だけど確実に私は目立っていた。

救いなのは好奇とか物珍しそうな視線で悪意の類いはなさそうなところかな？

「????」

首を捻りつつも歩く。実害のないことより考えなければいけないことが今はある。

「白ウサギ、か」

諸悪の根源が言い残した「ヒント」モドキが気になった。

白ウサギを探すべきかそれとも自力で帰る方法を見つけるか……。

「というか白ウサギって何よ」

案内「人」と言っていたぐらいだから人間よね？あだ名とか通り

なとかそんなのかな？

「でも、白ウサギがあだ名ってどんな奴よ」

貧困な私の想像力ではとても人物を想像できない。頭にウサギ耳でも生えているのかっーの。

「はあ~~~~」

溜息がでた。なんだかよく分からないことに巻き込まれちゃったな····。それにこんな場所に連れてこられて···お屋敷じゃきつと大騒ぎだ。···優しい姉の半狂乱になった姿を想像して私は暗澹たる気持ちになった。「アリス」がいなくなっただけから不安定になった姉の精神を私がアリスになることで辛うじて平穏を保っていたのだ。

こんなに長い時間姿を消していたらあの人の脆い心は確実に壊れる。

帰らなくちゃいけない。

私は元の場所に···あの場所に帰らなくては····。

『本当は逃げ出したかったくせに』

毒のように囁かれた言葉に思わずむかつ腹がたつ。あの····。
···男····。

土足で人の触れられたくない部分を容赦なく抉りやがって。
確実に心の中で百回は殺している。

唐突に猫耳男にされた所業の数々が思い返され頬が引きつった。

あの野郎···もつと殴つとけばよかった。

とても気が晴れていない。むしろ中途半端に報復しているため鬱々とした状態である。

しかも……しかも、である。
唇に触れる。生々しい感触が蘇ってきて私の頬は私の意思とは無関係に赤らむ。

「ファーストキスがあんな……あんな……猫耳つけた執事コスプレをした男だなんて!!」

嫌過ぎる。間違いなく人生最悪の部類に入る悪夢だ。

しかも一回だけでなく何回もされた。というかあのキスには一体なんの意味があつたんだ?……嫌がらせ?それとしたかつたから?どちらにしても嫌がる女を無理矢理襲うような輩だ。最低の部類の人間に違いない。猫耳だけど!

(……やっぱり今度会ったら思う存分殴ってやる!!)

そつ心に誓うと私はとり合えずヒントに思考を戻した。

「ヒントだって本当にヒントかどうかわからないし……」

あいつのことだ。畏だつてことも十分に考えられる。短い間しか接していないがあいつは性格が悪い。すこぶる悪い。腹黒だ。絶対に!

にこやかな顔で私を騙そうとしていたとしても私は驚かない。
それに何よりも……。

「これからの寝床と食事、どうしよう」

かなり切実な問題だ。商店街を歩いていて気付いたのだがどうも使用されている通貨が私の知っているものとはまるで違うようなのだ。

拉致されたのが部屋だったから手持ちはないしあったとしても使えない。

無一文で売れるものも持っていない。

「はぁ・・・」

最悪だ。出てくるものといえば溜息ばかりである。役に立たない。生産性皆無だ。

黙っているとどんどん嫌な思考にはまり込みそうだ。後ろ向きで悪い方へ考えがちになる自分の性格は十二分に把握してはいるが自分ではどうしようもない。

ドツボにはまって這い出せなく前に思考を変えた。

噴水の縁に座り私は昔のことを思い出す。

お屋敷で働く前。まだ独りぼつちで生きていた頃の私。

「お屋敷に拾われる前に戻ったみたいだ」

あの頃はお金も親もなくて一人だった。

ボロボロの格好でその日の寝床と食事のことで精一杯だった。生きるためには何だってやらなければいけなかった日々。満たされることなんてなかった。

「これから・・・どうしよう・・・」

仕事を探すにしてもとり合えず今日の宿ぐらいは決めないと。

「うっっん」

いつその事公園でも見つけて野宿かな・・・。

「はあ……白ウサギか……どう捜せていうのよ……」

愚痴に近い囁きに丁度私の前を通り過ぎようとしていた男が聞きとめたように立ち止まり不思議そうに私を見た後に小さく呟く。

「……白……ウサギ……?」

うん?と顔を挙げて私はしまったと思った。

そいつの頭に垂れたネズミの耳を発見してしまったからだ。反射的にここに連れてきた誘拐犯の猫耳を思い出し距離をとり、相手を観察する。年頃はあの猫耳男と同じくらいか。

ブーツにコートにと服装的には何の違和感もないが尻尾と耳がネズミ。違和感が大きすぎる。

なにこいつ……あの猫耳男の仲間?

滅茶苦茶警戒した目で見ていた私だが相手もどこか焦点の定まらない目で私を見詰める。

しばし互いに無言で睨みあって……かくんと男の首が垂れる。

「……すう……」

「つて!なにいきなり居眠りしているのよ!!しかも立ったままで!」

ガクガクと揺さぶると男はすぐさま目を開ける。

「いかん……。また、寝ていた……」

たいして「いかん」とも思っただけなのに男がそう呟いた。

また!!そんな「また」がつくぐらいこいつは外で立ったまま寝

ているの!!

驚愕の真実に呆然とする私をよそに男はボンヤリと私を見る。やる気を感じさせない男である。

「お前は……」

茶色の瞳がダル気に私を見る。

「な、なによ……」

思わずビクついてしまう。どうにもこうにも獣耳の男は警戒するべきだと刷り込まれてしまっていた。……もちろんあの馬鹿男のせいだ。

「白ウサギの……知り合いか？」

「!知っているの!!」

思わず男に掴みかかり問い詰める。どうやらあの猫耳、嘘は言っていないかったらしい。

「知っているのなら居場所を教えて!!私、変態猫耳男に無理矢理この場所に連れてこられて困っているのよ!」

矢継ぎ早に言う私を男がやっぱりダルそうに見つめながら何か探るように黙り込みやがて何かに思い当たったらしく答えてくれた。

「変態……猫耳……ああ、チエシヤ猫の……ことが……」

結構な言い草だったがそれで通じるあたりあの男の日頃の言動が窺える。

絶対にろくなことしてないとは思っていたが一連の会話で更に確信が深まった。

「あいつのこと・・・知っているの？それにチエシヤ猫ってなに？あいつ自分のことスカイって名乗っていたけど」

「・・・なに？」

男の顔色が変わる。本気で驚いたのか気だるげな空気がなくなつた。

そうしていると普通に男前に見えた。頭のネズミ耳がなければの話だが。

「チエシヤ猫が真名を教えたのか・・・？」

「はあ？「まことな」？なにそれ？」

訳が分からず聞き返すと「何言っているんだ。こいつ」みたいな目で見られた・・・.. なによ。それはこっちのセリフよ！！

「お前なにを・・・.. いや、待て、お前・・・..」

何が気になったのか男はじろじろと私を見ている。いやらしさを感じないものの何気に居心地の悪い視線だ。身の置き場がない私をほっという男は一人何かに納得したように頷いた。

「そうか・・・お前は。そういえば赤い髪と目なんて見たことない・・・..」

ブツブツと何事か呟く。というか赤い髪と目なんて珍しくもなんでしょうかと思っただけ。困惑する私を他所に男は何か考えこんでいたが不意に私を見る。

「お前。チエシヤ猫に会ってから今までに起きたこと全部話せ」

命令口調にかちんとくる。

「はあ？何言ってるのよ。あんた」

一気にガラが悪くなる私。・・・幼い頃に形成されたものって中々薄れないものだ。だが、相手は私の上を軽くいく猛者であった。

男は私を見下ろすと一言一言区切りながら

「いいから、黙って、言うとおりにしろ」

絶対零度の眼差しを体感する日が来ようとは思ってもいませんでしたよ。はい。

内心ものすご〜く悔しかったが生存本能とかそういうものが警鐘を鳴らしまくっていたので私は次々事の次第を説明した。

私が説明し終わるまで黙って聞いていた男は聞き終わるなり「はあ〜」と心底面倒そうな溜息をついた。

「・・・厄介な・・・あの馬鹿猫が」

心底本当に心底嫌そうにそう呟く男に私は首を傾げるしかなかった。

事態がちつとも読めません。

「あの馬鹿は馬鹿らしく実に馬鹿な行動に走ったということか」

馬鹿「あの猫耳男だということはわかったが……もしかこの人あの馬鹿猫が犯罪に走ったのに頭を痛めているのかな？」

「えつと……あんだあの馬鹿の友達かなんか？」

言ってから後悔した。ものすごい目で睨みつけられたからだ。

「冗談でもそんな気色の悪いことを言うな。あいつと知り合っているのが俺の人生最大の汚点だ」

先程まで気だるげな話し方だったのに否定だけは早口でものすごく嫌そうだった。

「そ、そうなんだ……」

どうやら仲はよくないらしい。

信用してもいいのかな？でもでも敵の敵が私の味方とは限らないし。

悶々と考えこむ私を他所に男は先程の「友達」発言が尾を引いているらしく顰め面だ。

苦い顔のまま私の方を見る。

「ついて来い」

「へ？」

変な声が出た。男は無言で一瞥すると元の気ダル気な喋り方に戻

った。

「白ウサギに会いたいのだろ？・・・お前の状況は・・・どこぞの短慮で軽薄で考えなし馬鹿猫の所為でお前が思っている以上に複雑だ・・・あいつの方がうまく説明できる・・・それに・・・この事態に一枚噛んでいる・・・かも、しれない」

気になるかつ不親切な説明だけして男はスタスタと歩き出す。慌てて後についていく私をチラリと横目でみると少し歩調を緩めてくれた。

「私、まだあなたのことを信用したわけじゃないんだけど・・・名前も知らない男についていく気なんてないわよ」

今現在について行っているので説得力皆無だが私は気にしないことにした。

人間自分に都合の悪いことには目を瞑るものである。

男はやっぱり面倒そうな顔で私を見ると溜息混じりに「ネムリネズミだ」と名乗った。

「・・・・・・・・・・変な名前」

思わず本音が零れた。御嬢様の猫がはがれると私は途端に口が悪くなって率直になってしまふ。怒るかなとも思ったが相手は怒らなかった。何故だか呆れたように溜息をついて私を見る。

「・・・・正直だな・・・・一応言っておくが・・・・本名ではなく通り名だ」

「通り名・・・・ネムリネズミが？」

白ウサギといいどうにもこうにも変である。そう思っていることが顔に出ていたのかネムリネズミが説明してくれた。

「ここでは誰も本名を隠して生きている。俺だけが特殊という訳ではない。通り名は誰でも持っている。ないと不便だから」

どうやらここお国ガラでは本名はあっても隠すものらしい。代わりに通り名を使って呼び合っていると……そっちの方が不便じゃないのか？

「……ところで俺はまだ……お前の名を知らない……のだが？」

言われて少し口ごもる。一瞬本名を名乗るかどうか迷い結局私の口からは「アリス」という名がでた。

「アリスか……本名か？」

これにもまた少し迷って結局は正直に答える。

「いいえ。ちょっと事情があって今はアリスって呼ばれているの……本名は別にあるわ」

突っ込まれるかなと思ったがネムリネズミは特に何も言わなかった。その代わりに別の忠告をしてくる。

「ならここではアリスで通せ。迂闊に本名を明かすと厄介事に巻き込まれる」

「例えば？」

本名を明かしただけでどんな厄介事に巻き込まれるというのだ。

「ここでは・・・本名を明かすということはその相手に心を明け渡すという意味がある。分かりやすい例えを挙げれば・・・求婚などのときに」

「き、球根？」

園芸と本名にどんな関連性が・・・。

「違う。求婚。結婚を申し込む時に使う方だ」

冷静に切り返すネムリネズミ。

ちよつと待つてよ？私ここで既にとある人の真名を知っちゃっているんですけど・・・。

あれってまさか・・・そういう意味だったとか？

「えつと・・・あの・・・それじゃあ・・・あのチェシャ猫？だっけ？そいつが私に真名を明かしたのって・・・」

「・・・普通に考えて求婚だろう」

否定して欲しかったのにあっさりきっぱりとネムリネズミは肯定した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・私、あいつのこと嫌いなんだけど」

「向こうは・・・・・・・・好きなんだろ・・・」

やっぱり冷静に答えられて私の限界があっさりと越えた。

「ちょっと何よ！！勝手に拉致誘拐したあげく問答無用で即求婚ってどういっつもりなのよ！！」

ネムリネズミの服の襟を掴んで前後にガクガク揺さぶる。

「……………知らん。俺に……………聞くな……………首を絞めるな……………苦しい」

そっいうわりにはダルそうなネムリネズミには構わず私は更に言い募る。

「あの……………野郎！！」

「往来で婦女子が叫ぶ……………言葉では……………ないな……………」

どうしても良さそうにネムリネズミが突っ込む。普段の私ならこんな言葉もちろん叫んだりはしないが今は本気で頭に血が上っていた。

「なにあいつ自分中心に世界が動いていても思っているの！！人を巻き込むな！！さっさと私を元の場所に返せ！！」

「……………お前が怒っているのは……………わかったから……………少し黙れ……………さすがの俺も……………通行人の視線が……………少々、痛い」

なおも喚く私の口を塞ぐとネムリネズミは私の腕を引っ張り足早に歩き出した。

もちろん私は暴れたが万力のように彼の腕は外れなかった。

「まったく……つくつく猫は……厄介事を引き、寄せる……」

気だるそうにそう言うネムリネズミの言葉がやけに印象的であった。

白ウサギの住処は時計屋敷と呼ばれる屋敷だという。

普通に「ふ〜ん」と相打ちを打っていた私はいざ実物を目の前にした時、心底驚いてしまった。

「うあ……」

白ウサギの住みかだという屋敷は想像以上に大きく立派であった。見上げるほど大きなお屋敷って初めてみた。

それに屋敷のあっちこっちに時計をモチーフにした細工が施してあり時計屋敷という名前は伊達ではないようだ。

ぼけ〜と見上げる私を他所にネムリネズミはさっさと門を開けて中へと入っていく。無用心なことに門番はいない。

「って勝手に入っているの？」

「……別に俺は気にしない」

いや、私は気にするんだけど……。

ネムリネズミは自分の家のようにずんずん不法侵入していく。

外装も変だったが屋敷の中も相当変であった。

アッチコッチに時計がある。動いているもの動いてないものただ

のモチーフだったり本当の時計だったり一見しただけではどちらかわからないものもかなりある。

そして絶えず聞こえてくる時計の音。

いくつもの時計の音が不協和音のように響く。だけどずっと聞いていると不思議なことに一つの調和を持って聞こえてくる。

不可思議な空間だと思う。

そんな不可思議空間をネズミ耳の男と一緒に歩いている今現在が一番不思議なんだけどね……。

先を歩いていたネムリネズミは廊下の奥にあった大きな扉の前で立ち止まる。

本当に大きな扉だ。作りも立派で恐らくは主の部屋なのだろうがやっぱりというべきかこの扉も時計のモチーフからは逃れられていない。

ネムリネズミはノックも何もなく黙って時計の彫られたノブをまわす。

微かな音と共に開かれた先は別世界だった。

別世界のように素晴らしい、ではなく全く逆のベクトルで別世界。

「……………なによ……この汚い部屋は!!」

思わず怒鳴ってしまう。

足の踏み場もないを絵に描いたような荒れっぷりだ。部屋に主はここで仕事をしているのかあつちこつちに色々な工具や用途不明な部品がごろごろ転がっているし何かの設計図やら書き込みされた紙が床に無雑作に散らばっている。

おまけに部屋の壁には大小さまざまな時計が飾られていて針の音がうるさいくらいだ。しかも壁紙から調度品まで部屋にある全てに時計がモチーフにされているから時計尽くしである。

なんなの……一体なんなのよこの部屋は!!

居心地が悪すぎる。

こんな部屋に住んでいるなんて白ウサギってどういう人物なのよ！
本当に人物像がつかめない。

呆然とする私を他所に勝手を知っているらしいネムリネズミはズカズカと部屋に入っていく。・・・部品やら書類やら床に散らばっているものを容赦なく踏みつけているけどいいのかなあ？部品に至ってはバキッと不吉な音を立てているものも少なくないけど。

ネムリネズミほど図太くない私は一々床の物を退かしながら彼の後を辿る。よくこんな場所で暮らしていけるわよね。信じられない。比較的片付いていたソファ―に座る彼の隣になんとか腰を落着ける。

「ねえ、白ウサギはどこ？」

ズカズカと入り込んでいるが部屋に人がいる気配はない。どうやら留守だったらしい。

キョロキョロと辺りを見回し隣のネムリネズミを見ると・・・。

「すう・・・」

健やかな寝息を立てて寝ていた。

「ちょ、ネムリネズミ！！」

いまの今まで会話していたくせにどうして寝ているのよ！！
慌てて彼の肩を揺さぶるがネムリネズミは起きやしない。

「こら！！起きろ！！寝るな！！っていつかどうして短時間で熟睡体制に入れるのよ！！」

というか他人の家に主が留守中に勝手に上がり込んだ挙げ句に居眠りって……。

どうしてこう、出会う人間（？）皆一筋縄じゃない奴ばかりなのよ？

呪われているんじゃないだろうかと本気で心配なってきた私だったがどうしようもない。

「……まったく……今日は厄日なの？」

ネムリネズミを起こすことは諦め私はソファアの背もたれに深く縋る。

本当に今日は色々あり過ぎだ。

チエシヤ猫が部屋に不法侵入してきて、庭に開いた大穴からへんてこな場所に連れて来れて挙げ句他人様の家に無断で上がり込んで……。

「はぁ……」

溜息しか出てこない。

「なんか……疲れたかも……」

ふあゝと小さく欠伸をする。自覚すると急速に眠たくなってきた。しかも隣にはスヤスヤと気持ち良さそうに眠るネムリネズミの姿があった。

「眠い……」

ソファアの手すりを枕にして私は急速に眠りの世界へと落ちてい

った。

また、夢だ。

『アリス……アリス！！』

亡骸にすがり付いて泣いていた後ろ姿が頭の中に蘇ってくる。

地面に横たわった少女。その顔は白いを通り越して青白くまったく生氣を感じさせなかった。ずぶ濡れの金の髪が地面に広がり水が滴っていた。一目見て少女が生きていないことがわかる。周りにいる誰もが痛ましげに少女を見下ろしていた。

ぽつんと私の髪から水滴が零れる。冷たい。

私も少女と同じようにずぶ濡れだった。濡れた衣類がぐっしょりと肌にへバリついて気持ちが悪い。

私は事態が全く把握できなかった。いや、認めたくなかったのだ。私はこの時全力で現実を否定していた。

「……アリス……」

静かに横たわる少女の名を口にするが近寄れない。近寄る資格など私にはない。

彼女を助けられずに一人だけ生き残った私には。だから私はただ見ていることしかできなかった。

ずぶ濡れのまま。震えた体と凍りついた心でただ見ていたのだ。

——かわいそうに

どこからともなく声が聴こえた。哀れまれているのに腹が立った。可哀想なんてそんなの嘘。私は「可哀想」なんかじゃない。そん

な風に言われる資格なんて、ない。

―貴女は可哀想だ

声がさらに続ける。優しいような毒のようなその言葉に縋りつきたくなる自分が酷く嫌だった。

やめて私は、同情も哀れみも欲しくはないの。

―心に空虚を抱え込み悲しいのに泣けない。

泣く資格なんて私にはない。

―ずっと許しを請うている

永遠に許されることなんてない。

―そんな貴女は酷く卑小で俗物。どろどろとした感情を抱え込んで自分ではどうしようもなくなっている。

そう。その通りよ。だからもう放っておいて!!

叫んでも声は止まない。耳を塞いでもまるで毒のように私の心に染みこんで来る。

―だけど、僕はそんな貴女に惹かれた。自分が大嫌いで価値なんて見出せない、迷って苛立って落ち込んで感情の行き場がないそんな貴女の姿が酷く僕を動かした。

―虚ろだった心は貴女で満たされた。僕を変えたのは貴女。だから、僕は―

闇が一層濃くなる。もう何も見えない。聞こえない。一気に闇へと堕ちていく。

目を覚ます。一瞬自分がどこにいるのか分からなかったがすぐに眠る前の記憶を思い出し頭を振った。

「やっぱり夢じゃないし……」

夢ならよかったのに。とほほと肩を落とす私の中に夢の内容は欠片たりとも蘇ってこない。

前髪をかき上げ、小さく溜息が出た。

「はぁ……どれくらい寝ていたんだろう」

外の景色を見る限りではそう、時間は経っていないようだった。

……そしてなにより……

「隣で健やかに眠り続けているこの男はどうすればいいのかな……」

すうーと本当に気持ち良さそうに眠り続けるネムリネズミ。まさしく通り名に相応しい眠りっぷりである。

「……本当によく、眠っているわね」

呆れるぐらいの熟睡ぶりだ。

ちゃんと鼻先を指で突いてみる。ネムリネズミはちょっと眉を潜

めただけで眠り続行。

起きているときはやる気を感じられないダレた感じの人なのに眠っている顔はどこか無邪気だ。元々の造りが整っているのに普段のやる気のなさが良さを削ぎまくっているのね、きっと。

つらつらと男の寝顔をみながらそんなことを考えている私はちょっとアホではなからうか？

そんな考えがふと頭を過ぎった。

如何如何。どうやら常識ハズレなことが続けざまにあつたために神経が麻痺している。

よくよく考えても見れば嫁入り前の女がよく知らない男と密室で二人きりって拙い気がする。姉が知ったら卒倒ものだ。

（まあ、それは良家の子女の常識なんだけどね）

ふう・・・と思わず溜息が零れた。

「・・・綺麗な、顔」

傍らで眠る男の寝顔は息を飲むほど綺麗に見えた。同じ人間だとは思えない美しさはどこか人間味に欠けている。

（そういえば・・・チエシヤ猫もやたら顔はよかったわよね・・・なにここの人間は皆美形という法則でもあるの？これで白ウサギまで美形だったら本気で怒るわよ）

そう顔はよかったのだ。今までの人生のなかで文句なしで一番に輝くぐらいの美形だったのに・・・中身のと変態は外見のよさで補えない。

嫌な考えを振り払い、手を伸ばしてネムリネズミの前髪に触れてみる。サラサラした感触とともに髪が私の指先から零れ落ちていく。

私の髪も一応ストレートで手入れもちゃんとしているがこいつほどサラサラキュウティクルな髪ではない。パツと見た感じ枝毛見当たらないし痛んでいる様子も見当たらない。・・・どう考えても手入れなんてしそうにもない男の髪なののである。

・・・なんとなく腹がたつてくる。男の癖に居眠りネズミの癖に女の私より髪がサラサラで顔が整っているってどういうことよ。

「女の敵みたいな男ね」

この場合の意味は勿論、男のくせにそこらの女より綺麗な顔してやがるという意味での「女の敵」である。

「ムカツク~~~~」

グイと髪を軽く引つ張つてやるとネムリネズミ「うつ」と眉を顰めたがそれでも目を覚まさない。いつそ天晴れといいなくなるぐらいの眠りぶりだ。

「お~~~~い。起きろ~~~~。朝ですよ~~~~?」

実際はとおに昼を過ぎているだろうにそんなことを言ってみる。

だが、相手はまったく起きる気配はない。

ふ~~~~む、これは何か余程のことがないと起きそうにないわね・・・・。

スヤスヤと気持ち良さそうに寝息を立てるネムリネズミ。・・・そうだ！

「いいこと思いついた!」

自分の思いつきにパンと思わず手を叩く。

さて、とポケットの中にある「乙女の必需品」を確認し私はにんまりと笑った。

「やっぱり・・・こんな状況でのお約束っていったら“これ”だよね。」

私の手には携帯用の櫛とゴムとピン。

そう私はネムリネズミの髪をみつ編みにしたりピンで留めたりして可愛くしようと考えたのだ。

「ふふふ」

自分でも怪しいと思える笑い声で私はネムリネズミの茶色掛った髪に櫛を通し鼻歌混じりに髪を編んでいく。

ネムリネズミは男にしたら髪が長いのでみつ編みをするのには十分であった。

まずは顔のすぐ横でみつ編みを作るとそれをゴムで留める。続いて反対側にも同じようにする。前髪は赤いピンで留めて後ろ髪を緩くりボンで結んでみる。

そうすると私より年上の男性なのにビックリするくらい可愛く見えた。

「うあ・・・どうしよう。すごく楽しいかも・・・!」

ネムリネズミは男性にしては線が細いし眠っているせいかもしれないけど容姿も中性的だからリボンやらが違和感なく似合っていた。本人が聞いたら眉を顰め、嫌がっただろう。もしくは某ネコが聞いたら「こんなネズミ可愛くともなんでしょう!」と言って「むしろ僕を可愛くしてください!」と馬鹿なことを確実に口走っ

ただろうが幸いにも彼はここにはいないし、ネムリネズミも眠っている。ついでに言えば私を止める者も存在しない。

自分でも「ネムリネズミが起きたら怒られるかも」と思いつつ髪の毛を編む手は止められなかった。

ああ、姉さんがアリスの髪をやたらと構いたがった気持ちがものすごく良く分かる。

極上の素材が側にいたら構いたくなる。ものすごく構いたくなる！ものすごくドキドキしていたがこれが恋だとか愛だとかではなく可愛いものに対する気持ちなのだった。

「ふふふ！次はどんな髪型にしようかな~~~~！」

そう言つて私が再びネムリネズミの髪をいじり始めた時、なんの前触れもなく入り口の扉が開いて見知らぬ男が入ってきた。

第一印象―大きい。

身長は百八十をゆうにこえていたが木偶の坊という感じは受けない。ネムリネズミとは逆に男性らしい魅力に溢れた男だった。動きやすそうな服装に頭には何故かターバン。

第二印象―誰？

突然のことに反応できないでいる私に男が気付く。

「……………うん？」

薄い茶色の瞳が私を写す。その瞳が案外優しい色をしているので私は少々意外に思った。

男はしばらく私を凝視すると顎に手を当てなにやら考え込む。そしておもむろに口を開いた。

「……………えっと……………あんた誰だ？それにネムリネズミになにしてんだ？」

男の指差した先にはピンを留められ髪を編まれた状態で眠り続けるネムリネズミの姿。

「あ、え、あはははははっ（汗）」

あからさまに不審者を見るような目で見られて思わず出した私の誤魔化し笑いが虚しく辺りに響く。

・・・まあ、喜々として眠っている人間（？）——そう言っているのかわからないが——の髪をいじっている人間にそう聞きたくなるのも分かる。いま、気付いたけど私結構怪しい人？

「えつと・・・・・・・・」

自分がものすごく怪しいと自覚してしまうと何をどう言えばいいのか全く思い浮かばない。

「・・・・・・・・髪いじって遊んでました」

私の返事に男が黙り込む。

居心地の悪い空気の中でネムリネズミの健やかな寝息だけが耳に届いていた。

・・・・・・・・っていうかい加減、起きてよ！

男はじつと私を見ている。敵意は感じないが好意めいたものを感じない。なにか観察されているような気がした。

えつとせめて私がどうしてここにいるかぐらいは説明した方がいいよね？

「私は・・・・・・・・その、白ウサギって人に会いたくて・・・」

シドロモドロに説明をし始める傍らで今だに眠りこけているネムリネズミを起こすべく彼の肩を強く揺さぶる。が、眠りたいらしいネムリネズミは私の手を払いのけて再び眠りの園へと逆戻りした。
・・・この、役立たず！！

感じた苛立ちのままネムリネズミを睨みつけていた私に男の笑い声が届いた。

驚いて振り返ると何がそんなおかしいのか男が腹を抱えて肩を震わせながら笑っていた。

「え、え？」

思わぬ反応に目を白黒させる私に男は笑いが残る顔で「すまんまん」と頭をポンポン叩いてくる。

「まさかネムリネズミをそんな射殺しそうな顔で睨み付けれる女がいるとは思ってなかったかさ。大抵の女なら見惚れるのが常だったから・・・新鮮な反応についつい笑っちゃった。あはは」

あははってあんだ。

爽やかに笑っているけど発言内容何気に失礼じゃないか？

そう思ったが悪気はなさそうなので口にはださなかった。

「はあ・・・」とか言いながら改めて男を見してみる。

第一印象通り身長は高い。かなり顔を上に向けないと私とは視線が合わない。だけど人懐っこい笑顔のせいか身長が高い人間にありがちな威圧感や圧迫感は感じなかった。

言動は少々荒っぽさを感じさせるが基本的にいい人っぽかった。

そんな風に観察している私には気付かず（というか気にせず）男は側で眠り続けるネムリネズミに近寄るとそのふさふさのネズミ耳を思いつき引っ張ると大きく息を吸い込み次の瞬間にはものすごい大声で怒鳴っていた。

「お~~~~い!!! いい加減起きやがれ~~~~~」

「~~~~~っ!!!」

私の耳に衝撃が走りぬけた。

あまりの大音量に窓ガラスがピリピリ震え、外の木に止まっていた鳥たちが驚いて一斉に飛び立っていく。私はいえ男の行動が読めず耳栓をし損ねてしまいこの大音量をともに喰らって床にソファーに伸びていた。

「み、みみが……みみが……あ……」

耳がキンキンではなくぐわんぐわんする。耳鳴りとかそういうレベルではない。本気で耳が壊れるかと思った。

（兵器だ……人間兵器がここに……）

あまりのショックに身動きさえとれない私だが信じられない言葉を聞いて思わず飛び起きた。

「ちっ！ やっぱ起きやがらないか」

「嘘！！ “あれ”で起きないの!!!」

男の言葉通りすやすやと眠り続けるネムリネズミの姿に私は本気で戦慄を感じた。

「な、なんで・・・あの兵器のような大声で寝ていられるのよ！」

「・・・・兵器？」

私の兵器発言に男が怪訝そうに眉を潜めているがそこは華麗にスルーした。いまはそんな瑣末なことを気にしている場合ではない。

「なに？ どうして？ こいつの耳は腐ってんの？」

衝撃のあまり口調と態度に地が出る。だが男は大して気にした風もない。

「真顔でえらいひでえこと言うな、あんた」

そう言う男だったが彼からネズミネズミを擁護するような発言は出てこない。もしかして薄々疑っているとか？

二人揃ってネムリネズミを見る。スヤスヤと実に気持ち良さそうに眠っていますよ。こんちくしょーめ！

心の内でそう毒つきながらネムリネズミを指差し男に声を掛ける。

「ねえ、どうしたら“これ”は目を覚ますの？」

もはや名前ですら呼ぶ気がしない。こんな奴「これ」で十分である。

にこやかに笑ってそう言う私に男はぼそりと「ひでえ・・・」と呟く。そんな男に私はにっこり笑いかけてやる。

「なにか、言った？」

「いえ。何一つ口に出していません。はい」

神妙に頷く男。 よろしい。

男はやれやれと頭を掻くと困ったように首を傾げている。

「ネムリネズミとは結構長い付き合いなんだかな・・・こいつをすんなり起こす方法となると。怒鳴ろうが蹴ろうが殴ろうが起きやしねえかなあ・・・」

こら、そこ遠い目で現実逃避しないでよ！！

「じゃあ・・・どうすんの？私、白ウサギって人に会わせてくれるっていうから“これ”と一緒にいるんだけど」

まったくもって迷惑である。

腹がたつてせめてもの腹いせにネムリネズミの頬を引っ張る。「

うっ」と痛そうに呻いたが起きる気配はない。

そんな私を男が少しビツクリした様子で見っていた。

「なんだ・・・あんた俺に何か用事があったのか？あれ？でも、俺たち初対面だよな？」

「え・・・。もしかして・・・あなたが・・・」

ネムリネズミの頬を引っ張る手を止めた私に男「白ウサギは「おう」とその通り名にそぐわない豪快な笑みを浮かべその名を口にした。

「俺が白ウサギ。時計屋敷の主であんたの探し人ってことになるな」

よろしくと彼は私の手を握った。

人生において思わぬ出来事に遭遇することはまあある。

かっぱらいをしていて絶対にいるはずのない所に警吏がいて捕まりそうになったり。

死んでしまった令嬢の身代わりとして暮らしたり。

だけど……いくらなんでもこれはないだろう！！

変な猫耳男に拉致誘拐されて見知らぬ土地に連れてこられて変なゲームをふっかけられた挙げ句がこれだなんてあんまりだ。理不尽だ。信じられない！！

ぽふぽふと枕を殴りながら私は動揺する自分をどうにか宥めていた。

いま、私がいるのは白ウサギの住居、時計屋敷にある部屋の一つだ。

白ウサギは狭くて悪いと謝っていたが私の感覚では十分すぎるほど広い部屋である。その部屋の上等な枕を私はただひたすらに殴っていた。

なぜ、私がこんなにも動揺しそして時計屋敷の一室にいるのかとういうと……。時間は少し遡る。

「…………あの馬鹿猫が…………」

私の説明を聞くなり白ウサギは顔を顰めてどこかの誰かと同じようなセリフを実に忌々しそうに吐いた。

「えつと念のために聞くけど貴方もあいつの知り合い？」

ネムリネズミに「友達」ときいてえらく凄まれた経験から私は言い回しを変えてみる。

「ああ。．．．あいつがガキの頃から知っているぞ。向こうは俺に無関心だが．．．まあ、知り合いといえば知り合いだ」

「付き合いが長いのに無関心なの？」

普通は付き合いがあつたら無関心ではいられないと思うが？
白ウサギは軽く肩を竦めて、「あいつは普通じゃねえからな」と呟く。確かに普通ではない。妙に納得してしまう言葉である。

「あいつは基本的に誰も関心を持たないからな．．．。例外があつても負の方向の関心だし」

それってどうよと突っ込みかけて違和感に口を閉じた。

うん？まてよ？

どうも白ウサギが話すチェシャ猫と私の認識しているチェシャ猫とはどうにもズレがあるような気がする。

「ねえ．．．私はあいつに．．．不本意ながら好かれていたみたいんだけど？」

なにせ初対面からこっちの都合とか気持ちとか常識をぶつとばしてキスなんぞしてきた男だ。しかもその後の言動もどうにも無関心だとか負の方向性は感じられずむしろいらぬぐらいの押し付けがましい親愛の情に溢れていたような気がする。

白ウサギの言うような他人に無関心か負の感情しか抱かないような奴とは印象がまるで違う。

うっーんと首を捻る私に白ウサギが困ったように顎を撫でる。

「多分。お前さんは特別なんだろう。あの何事にも無関心・冷徹・冷酷の男が異世界からこの世界に引つ張り込むぐらいだ。並大抵の執着じゃねえぞ」

そう言う彼の口調はからかうと言うよりかは哀れむに近かったかもしれない。要約すると「ロクデモない奴に好かれちまったなあ」だろう。全然うれしくないんですけど！！
だけどそれに突っ込むより気になることがあった。

「……………ねえ、白ウサギ？」

「なんだ？」

「いま、「異世界」って言わなかった？」

「言ったがそれがどうした？」

「どういう意味」

「そのままの意味だが？」

「……………」

あっけらかんと重大発表をしてくれた白ウサギの首を私は無言で絞めた。

「のあー！！いきなり何すんだあー！！うおー！両手を交差させるな！！
っていうかなんか手馴れてねえか！！」

白ウサギが騒ぐが無視して絞める。騒げているうちは死なない。
大丈夫だ。……多分。

「嘘よね？冗談でしょ？」

「な、何がだ！！」

「ここが異世界だとか電波なことあんたが言っていたでしょうが
！！」

がぁーと火を吐かんばかりに勢いで噛み付く私。頭の中がかなり
混乱中だ。

否定してほしい。たちの悪い冗談だと言って欲しい。だけど白ウ
サギはちつとも私の期待にはこたえてくれない。

私を氣遣ってか強く反抗できない白ウサギは私の手を掴みながら
嫌な事実を突きつけてくる。

「電波なんぞ誰が放つか！ここは真正銘お前さんにとっては異
世界！別の世界だ！」

「嘘だ！」

間髪入れず否定する。

「本当だって！」

白ウサギも負けずにそんなことを言ってくる。

「し、証拠は！！」

苦し紛れの私の言葉に白ウサギは私の手を掴むと未だに眠っているネムリネズミのネズミ耳を触らせる。

「ちよつと……一体なに……え？」

手に触れたネズミの耳は温かい。それだけならともかくぴくぴく動いているし柔らかい。

布とかビニールとかの感触じゃないよ？これ。どう考えても……ほ、本物としか……。

「え、え、えええええ？」

「お前さんの世界に獣耳を生やした人間はおらんだろ？」

そんなけつたいな特徴の人間がいる訳がない。

あれ？でもそうだとしたら実際にここにいるネムリネズミの耳は……。え？あれ？

混乱する頭を落着けるために数回深呼吸する。うん、大丈夫。えつと普通は本物の獣の耳を生やした人間なんていない。うんこれは当たり前だ。

だけど今実際に目の前に獣の耳を生やした男が眠っている。

「……………有り得ない……………」

私の住んでいたところの常識ではネムリネズミは存在しないはずだ。なのに、存在している。それは即ち……………。

「ほ、本当に……………そんなことが……………？」

あるのだろうか。異世界にやってくるなんてことが。

茫然自失。何も言えなくなった私を白ウサギが心配そうに覗き込んでくる。

「おいおい……。まさか気付いてなかったのかよ。チエシヤ猫もネムリネズミも何も言わなかったのか？」

「……………聞いてない!!」

チエシヤ猫は訳のわからんことばかり言っていたしネムリネズミもろくな説明なんてしてくれなかった。

誘拐されて見知らぬ土地に連れてこられたとは思っていたけど見知らぬ世界だとは普通思わないわよ!!

「なによ……。なんなのよ!! 一体全体どうしてこんなことになってんのよ!!」

もう駄目だ。今まで押さえに押さえていた感情が爆発する。

「帰して!! 今すぐ速攻に速やかに私を元の世界に帰しなさい!!」

白ウサギの襟を掴んで前後に力の限り揺らす。

「うおい! ちょ、おちつ……」

「ける訳がない!!」

うあ~~~~んと泣きながら馬鹿の一つ覚えのように白ウサギを揺さぶる。

「帰して帰して……帰せって言ってんだろぅがぁ!!」

「なんでそんなドスが効いた声が出せんだよ!!」

「うつさい!とにかくかゝえゝせゝ!!」

頭に血がのぼって言葉使いに下町口調が混じりはじめる。

帰らなきゃいけない。

焦燥感が私の心を占める。

帰らないと……。一刻も早くお屋敷に……。私の世界に帰らないと!!

脳裏に思い浮かぶのは優しくそして弱い女性の姿。

私が大切なものを奪ってしまった女性。

姉さん。

「いいからとつと帰せ!」

白ウサギの顔を間近まで引き寄せて私はそう言った。

私の行動に意表を突かれた白ウサギは驚いたように目を丸くして私を見る。その目がなんだか驚き以外の感情が込められていたようにも思えたがその時の私はそんなことに気付く余裕なんてなかった。ただただ自分の居場所に帰らなければならぬ気持ちがある。その時の私を動かしていた。

「アリス」

静かなだけと逆らうことの許さない白ウサギの声に私の手から力が抜ける。力なく垂れた手を大きくて無骨な手がそつと握った。のろのろと顔をあげると複雑そうな顔をした白ウサギの顔とかがち合った。

どうやら彼は言葉を選んでいようで少しのあいだ躊躇っていたがやがて決意したように口を開いて、それを私に伝えた。

「アリス……残念だがな……帰ることは無理だ」

何を言われたのか理解できなかった。

いや、理解することを拒否したというべきか。

「……………え？」

呻くようにそれだけ口から飛び出た。

いま、なんて言われた？

……………帰れない？

「……………うそ……………」

もう一度「うそ」と繰り返す。まるでそう言えばそれが真実になるかのように何度も何度も「うそ」と言う。

だけど、目の前の現実が変わったりなんてしない。

いつだってそうだ。

残酷な、「うそ」だと信じたいことほど現実だ。私は知っている。身に染みてよく知っていた。

いつまでも続けばいいと願ったことほど私の目の前から消えていく。

知っていた。知っていたのに……………どうして……………。

じんわりと視界が歪む。いけないと思った時には涙が地面に落ちていた。

「あ、アリス？」

涙にうるたえた白ウサギの声に泣き止まないといけなと思った
いるのに・・・面白いほど涙は止まらない。嗚咽に肩が震えていた。
泣き止まないと。泣いて何かが変わるわけじゃない。泣いている
暇があるなら行動に移すべきだ。頭ではそう分かっているのに。
涙は止まらない。身体も嗚咽も自分の思い通りにならない。

「うつ・・・」

しかも・・・出会って間もない男の目の前で泣いているのだ。最
悪。最悪すぎる。

泣き顔を見られなくて下を向いた。大粒の涙が床の上に無雑
作に置かれた書類を濡らしていく。ポタポタと私の意思とは関係な
く零れていく涙は拭っても拭っても溢れて零れる。

意地になって拭う私の手を白ウサギが掴む。

「そんなに強く擦るな」

顔をあげる。白ウサギがしょうがないと言わんばかりの表情で私
を見ていた。

いまだに涙を流し続ける私の目元を外見からは想像もつかないぐ
らい優しい手つきでそっと涙を拭う。まるで父親にでも慰められて
いるような気がした。

父親なんていたことないけど居たとしたらこんな風に慰めてくれ
るものなのかもしれない。

涙が少し引つ込む。それでも涙は出ていたけど気持ちの上では少
し落ち着きを取り戻していた。

「帰れ、ないって・・・ほん、と？」

嗚咽も堪えられないから子供のような質問の仕方になる私に白ウ

サギが答えてくれる。

「……本当だ。……正確に言えば帰る方法が分からないがな」

「わから、ない？」

「お前みたいに別の世界からやってきたっていう人間自体が珍しいんだ。お前の前といえばかれこれ三百年前に一人いたぐらいだ」

三百年……途方も無い年数を示され呆然とする。

「そ、その人はどうなったの！」

「……記録ではそいつはお前みたいに誰かに連れてこられたとかじゃなくて純粹たる事故でこちらの世界に紛れ込んだみたいだったんだが……どうなったのかは記録に残ってない」

ヘタリと膝の力が抜けてソファーに座り込む。

手が震える。

帰れない。その言葉が何度も何度も頭の中でリフレインされていた。

ぎゅつと目を瞑って元の世界を思った。

帰らなきゃいけないのに……。

「……帰れないと……決まった、訳じゃ……ない、じゃない……か」

いつから起きていたのかネムリネスミが眠そうに瞳を開けて私を見ていた。

「ネムリネズミ……?」

「う……」と軽く手を挙げると彼はダルそうに身体を起こす。
寝起きなせいかいつもの倍以上ダルそうに見えた。

「ということだ。ネムリネズミ」

私と同様に困惑気味の白ウサギにネムリネズミはのん気に私たちが
が見落としていた事実を告げる。

「二つの世界が行き来できないのならどうしてチェシャ猫はア
リの世界に行けた?」

「あ……」

確かにそうだ。あいつは私の世界に現れた。

「異邦人もだが「異邦人」が実際にこの世界に来ることが出来る
という「事実」がある。この二つが示すのは……」

「二つの世界を行き来する方法がある!」

ネムリネズミの言葉を待てずに答えを先に叫んだ私に彼は大して
感慨深そうにもせず頷く。

「そういう……こと、だ……どう、する?」

「え……」

「方法は・・・ある、だろう・・・だけど・・・見つかるか、どうか・・・わからない・・・帰れるかどうかわからない・・・むしろ、帰れない・・・確率の方が・・・高い・・・」

浮き上がりかけた心が再び沈みこむ。

そうだ。帰れると決まったわけじゃない。

「それでも・・・帰りたいの、か？」

その言葉に心臓の鼓動が早くなる。

「わ、私は・・・帰らなきゃ・・・」

そうだ、帰らなきゃいけない。

元の世界へ。

帰らないと・・・。。

「そう、か・・・」

私の返事に何を感じたのかそれだけ言うとネムリネズミは腕を組んで壁に寄りかかっていた白ウサギの方に顔を向けた。

「白ウサギ・・・」

「なんだ？」

ネムリネズミが私を指差す。

「こいつをここに置いて、くれ」

ぎょっとしてネムリネズミを見る。だがいつも通り眠そうな顔が

あるのみ。まさか、寝ぼけている？

「てめえ……相変わらず勝手な奴だな……」

白ウサギが呆れたように言う。　　「っていうか突っ込みどころが違う！

「まあ、部屋は余っているから別に構わねえけど」

構えよ！少しは！！

「そうか。ではそういうことで」

ちよつと待て！！私を抜きにして話しを勝手に進めるな！！
驚きのあまり涙が完全に引っ込んだ。

「ちよつ……」

声を荒げかけた私をネムリネズミが止める。

「これで衣食住はすべて保証されるぞ？なにが不満だ」

「うぐっ！」

「帰らなければならないにしてもお前は世界の通貨も知識もないのだから願ったり叶ったりだろ？」

「むぐぐぐっ」

確かに……いずれは絶対に帰るとしても方法を見つけるまでの間この世界にいなきやいけないのは確実だ。それを考えたらこの申

し出は非常に有りがたい。

悔しいが相手の言葉の正しさに黙り込んでしまった私の態度に頷く。

「納得したか。なら、決まりだな」

そういい終わらない内に今までのキリリとした口調が一気に眠そうなものへと変わる。

盛大に欠伸をすると彼は再びソファーに横になった。すぐに健やかな寝息が響いてくる。

そして時は冒頭へと戻ってくる。

「まったく……散々な一日だった……」

何の罪もない枕に八つ当たりするのにも飽きた私は枕の皺を伸ばすとそれを本来の用途で使う。

ぽふっと頭を乗つけて天井を見詰めた。

見知らぬ天井……どこかこの世界そのものが私にとって見知らぬものなのだ。

生まれた時からずっと住んでいた世界ではない。それを考えると不思議な気分になる。

「本当に……信じられないわ……」

夢だと今からでもいいから思いたい。

だがもう遅い。私はこの世界が現実だと認識してしまっている。それは覆らない。

「はあ……」

溜息しかでてこない。

こうしていても始まらない。

眠気で瞼がだんだんと落ちてくる。

「かえらな・・・きや・・・」

呟く声はすでに言葉にならなかった。

色々あつて疲れていたせいかなその日、私は夢も見ないぐらい深く眠った。

眠りに落ちる寸前に誰かが私の頭を優しく撫でた気がしたけど・・・
きつと夢に違いない。

愛しい少女は彼の手の届かない夢の国へ行ってしまったている。

どうやって侵入したのかチェシャ猫は小さく寝息を立てながら眠るアリスの側に座るとその赤い髪を優しく撫でる。撫でられているのがわかるのかアリスが微かに笑う。

その表情にチェシャ猫もつられて微笑んだ。

「・・・帰らないといけない・・・そんなことを言っている内は帰ることはできないよ？」

甘い甘い声。恋人に睦言を囁くようにチェシャ猫はそんなことをアリスの耳に囁く。

「もつとも帰してなんてあげないけどね」

くすくすと楽しげに囁くチェシャ猫の目はまったく笑っていない。冷たい感情の凍てつきが見て取れる。本当に帰す気はないのだろう。

そう、帰さない。

愛しい少女。彼の心に住むたった一人の存在。ようやく出会えたのだから・・・還さない。絶対に逃がしはしない。

「ねえ・・・アリス？」

意識の無い少女に顔を近づける。白い頬、赤い唇そして今は閉じられてしまった瞳。

チエシャ猫の手がアリスの頬に添えられた。

「君を守るよ。どんな苦しみも悲しみも貴女に近づけさせない。真綿に包む様に大切に大切に大切にする。僕の全てをかけて貴女を愛している。だから・・・」

チエシャ猫の声が微かに擦れる。誰も聞くとのない思いを小さく告げる。

「だから、貴女も僕を愛して」

貴族と奴隷

自分が他の人間より目立つ容貌を持つのは自覚していた。

もともとクォーターであり先祖がえりといって良いほどの容貌に加えて銀の混じったような赤髪に金の強い赤い瞳はよからぬ者たちの関心を惹き付けるに十分らしく変質者やら誘拐騒ぎに巻き込まれたことは数知れない。

だが、まさか自分が異世界に来るといふ異常事態に巻き込まれた挙げ句に右も左も分からない状態のときに最初に遭遇したのが奴隷商人だったのはどんな神様の嫌がらせですか？と言いたい。

「はぁ……」

考えると溜息が出る。

普通なら異世界に来たというだけで人生の一大事だということにそここのところよりも目下自分の人間としての尊厳が失われていることの方が彼女にとっては大事だった。

「どうしたもんだか……」

捕まった時も檻に入れられた時も商品としてもものすごく露出の激しい服に着替えさせられた時も力の限り暴れて叫んで抵抗したのだが結局の所彼女は今回の目玉商品として舞台に上げられようとしている。

「つたく……人を商品扱いしてんじゃないわよ！この×××××！」

小さく毒付いた彼女の言葉にたまたま側にいた見張り役がぎょっ

としたように檻に入れられた少女を見た。

鳥かごに似せて作られた檻の中に居るのは珍しい髪と瞳の色を持った極上の美少女。

銀の混じった赤い髪は綺麗に結い上げられ紅玉のはめ込まれた髪留めが光っている。纏っている白い衣装は彼女の赤い髪と瞳をよくはえさせており耳元でゆれている雫型のイヤリングも極上の紅玉だ。そしてそれらの装飾品の美しさに引けを取らないどころか全てを引き立て役にしてしまうほどの美しさを持った少女。紅を差さすとも赤い唇・真っ白な処女雪を思わせる肌。そして何よりも惹き付けられる、その瞳。強い意思を宿したその金紅の瞳に眼を奪われてしまう。

男なら誰でも手に入れたいと思うほどの容貌と魅力に溢れた少女がえらく荒れた口調で下町のゴロツキが言うような言葉を口走ったのだから見張り役が眼を丸くして少女を見たのは仕方がないだろう。しかもえらく凄惨な瞳でこちらを睨みつけてくる。

「ああ？なによ？何見ているのよ？見せもんじゃないのよ？お金取るわよ？」

もうこの段階でどれだけ綺麗な格好をしていてももうただのゴロツキにしか見えない。

ついでに言えば彼女は盛大に「見世物」にこれからなる予定なのだがそこを突っ込む勇氣は彼にはない。言ったら自分は最後だと本能が悟っていた。

盛大に据わった眼で睨みつけてくる少女に見張りの男は冷や汗を流しながら眼を逸らした。

「けっ！根性なし」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今、見張りの生存本能は安堵しているが男の矜持は盛大に砕け散った。

煤けた見張りを他所に舞台から合図がよこされ少女が乗った檻がフワリと浮いた。

「うわっ！」

人がいないのにフワリと浮んだ檻の中で少女が慌てふためく。

「な、なに？ま、魔法？」

すつと音もなく舞台に向かう檻に周りの誰も驚いていない所を見るとどうやらこれは当たり前のことらしい。

「剣と魔法の世界？」

あながち間違いではなさそうと思っているうちに檻が舞台の中央に到着する。

「さあ！皆さんお待ちかねの本日の目玉商品です！」

檻の中にいる少女に向けられる眼・眼・眼。

その視線に醜悪なものを感じて少女は顔を歪めた。

「銀が混じった赤い髪・金紅の瞳を持った美しい少女。妾にするもよし本妻にするもよし！いや〜お金があつたら私が落としたいぐらいの掘り出しものです！まさに本日最後の商品に相応しいといえましょー！さあ、お値段は100万ガラからスタート！」

この世界の貨幣価値は分からないが会場が騒いだところをみると結構なお値段らしい。だがすぐに「110」という声上がり見る見るうちに値段が釣り上がっていく。

それほどの価値をここにいる人間は少女に認めたということなのだろうが正直少女にとってみれば「気持ち悪い」の一言である。

えらく熱くなった会場とは裏腹に少女の顔はどんどん冷たいものになっていく。足と腕に飾りのように細工された鎖が巻かれているため暴れられないが幸い口は塞がれていない。

少女は一度深呼吸をしてもう一度会場を見る。

どれもこれも醜悪で最悪な顔ばかり。

人間を売り買いつけることになんの疑問も持っていないのだろう。

あるいは奴隷は同じ人間とは思っていないのか……。

くくつと小さく笑う。そういう奴らって自分が奴隷になったらみっともない醜態を晒すのだろうと思った。

「400」

肥満体型のいかにもあくどそうなおっさんの声に会場がどよめく。

「400!400が出ました!他に声はないですかあ!」

司会者の熱心な声におっさんが勝利を確信した顔でふんぞり返る。そこそこで悔しそうな顔をしている男たちがいるが声は上がらない。

「400以上を付けられるかたはいらっしゃいませんか!いらっしゃいませんようでしたららくさ……」

少女は息を吸い込む。

盛大に心のままにこの場にいる全員を罵り倒してやろう。殴られ

ても……殺されても言いたいことを全部言い切つてやる。

「あんたらあええ加減に……！」

「１０００万ガラ」

静かなそれでいて聞き逃せないほど強い声が少女の怒声に被せるように会場に響いた。

しーんと静まりかえった会場の視線が一人の青年に集中する。

金色の髪に同じ色の瞳が静かに少女を見詰める。着ている服は地味だが見るものが見れば上質な作りでどこかの貴族だろうと当たりをつけることができた。

少女はそこまで察することは出来ないが彼がこの場で唯一自分が嫌悪感を抱かない相手であることに気付き、そんな相手が奴隷を売り買いするこの場にいることを不思議に思った。

会場中の視線を集めた張本人は静かな顔のままもう一度繰り返した。

「１０００万ガラ」

その言葉に時が再び動き出したかのように先ほどとは比べ物にならないほどのドヨメキが会場を満たした。

結局、少女をセリ落としたのは突然現れた青年だった。

怒涛の「１０００万ガラ」発言に呆気にと取られていた肥満体型のおっさんだったがよほど少女に執着があるのか結構しつこく食い下がっていた。が、しかし。

「1050!」

「2000」

「くっ……2060!」

「3000」

「なっ……つつ……3010!」

「4000」

「ぬっ!」

とこんな感じでおっさんがどれほど食い下がるうとも青年が有り得ない金額の吊り上げを行い最後にはおっさんに憤死しそうな顔をさせつつも青年が5000万ガラで少女をセリ落としたのだった。ほくほく顔の奴隷商人たちを他所に青年が少女を引き取りにくるまでの間彼女は自分の「主人」になった青年について考えていた。

「おかしい……」

そう、おかしい。少女は会場を見ていた。だから分かる。

「あんな人、いなかった……よね……」

欲に眼のくらんだ奴らばかりだと嫌悪感を抱いたから良く覚えてる。あの青年はいなかった。あんな存在感の強烈でそしてあの場に相応しくない欲のない瞳をした人を見落とすなんてしないと思う。なのにあの時、少女がセリ落とされそうになった瞬間、青年の声

が響くまでは認識していなかった。

「うゝん？」

「何を考え込んでいる」

「へ？」

顔を上げるといつの間にか鍵を開けられた檻の中にあの青年がいた。金色の感情の読めない目が静かに少女を見ていた。

「あつ……」

「行くぞ」

短くそう言うところらの返事は聞かずに少女の手足の拘束を解くとそのまま彼女を抱え上げ歩き出す。

「うああ！」

慌てて自分にしがみ付いてくる少女にも周囲の啞然とした視線も全て無視して青年はずんずんと進んでいく。

「え、あ、ちよつ……！行くってどこに！」

青年は立ち止まることなく当然のように答えた。

「俺の家だ」

これは物語。

異世界から落っこちてきた少女と無表情で変わり者な男の、出会
いの物語。

白き華

生れ落ちたその瞬間からわたしの運命はわたしでない誰かによって定められていた。

生贄

その言葉の意味を理解しないうちからわたしは生贄になるために生かされた。

五歳の時にはより霊的存在に近づけるようにと左目を抉られた。痛みあまり泣き叫ぶこともできないわたしを回りの大人たちは冷めた瞳で見詰め続ける。

冷めた瞳。その瞳に宿る感情の意味をその時のわたしは知ることにはなかった。

生贄。それがわたしを示す全てで生きている意味。・・・存在理由。

生贄だから泣くことは許されず。

生贄だから笑うことは許されない。

生贄だから怒ることはしてはならず。

生贄だから悲しむことはできない。

全ての感情を捨てて。心を消す。

どのようなものにも染まることのない。

無垢で白きもの。

そうあるべき存在。

白無^{はくむ}。白きもの。なにものでもない者。

それがわたし。そう教えられた。

五年前まで、そうだった。

わたしが生贄に捧げられるはずだった鬼が一族を滅ぼすその時まで。

「……すまない」

恐ろしくも寂しい目をした鬼と出会うまで確かにわたしは「白無」だったのだ。

時雨は頭を掻き毟ってパソコンの画面を睨みつけていた。

画面には文字が書き連ねてありところどころ「勇者」だとか「魔王」なんていう文字が躍っている。

「まったく……思い浮かばないのよ。ってもうこんな時間か」

時計を見ると七時を少し回っている。

年齢不詳の美女は手にしていたタバコを灰皿に勢いよく押し付けると文章を保存してパソコンの電源を落とす。

編集部からは今日中に原稿を送れと矢のような催促をされていたが知ったこつたない。出来ないもの出来ないのだし可愛い姪っ子との朝ごはんタイムを犠牲にしてまで仕事をする気は時雨にはない。

担当編集者が絶対に聞きたくない暴言を考えながら時雨は自室のふすまをあけて台所へ向かう。古き良き日本家屋は長年使い込まれた家独特の安定感を感じさせる。五年前、知人のツデを頼って購入した一軒屋だが時雨は気に入っていた。

生まれ育ったのが同じく日本家屋だったせいか酷く落ち着くのだ。ぎじぎじと鳴る廊下をしばらく歩くと時雨の鼻に魚の焼けるいい香りが届き始める。それと同時にトントンという規則正しい包丁の音。

どうやら彼女は今日も生真面目に早起きして朝食を用意してくれているようだ。

（やれやれ・・・子供らしくたまには寝坊とかしてくれてもいいんだけどね・・・）

暖簾を分けて覗き込んだ台所には近所の高校の制服姿の少女が一人黙々と葱を切っていた。

調理の邪魔になる長い黒髪を一つに潜り、白いエプロン姿の少女は無表情に黙々と葱を切る。その手元は一切の迷いもなく動き、とう間隔に切られた葱が山盛りになっていた。

葱丸々一本を切り終わると今度はそれをコンロの上にある鍋に入。多少どころでなく多すぎる。

ついつい口が出てしまう。

「・・・白無。いくらなんでもそれはいれすぎ」

「時雨」

包丁で今度はかまぼこを大量に切っていた少女が手を止めて振り返った。

彼女の名は白無。時雨の姪で現在彼女の被保護者でもある少女である。

容貌的にはどこにでもいるような少女である。叔母である時雨が華やかな感じの美女なだけに彼女の平凡さは余計に際立っている。

だが、彼女を初めて見た人間は彼女の容貌よりも先に目が行く場所がある。

彼女の左目を覆い隠す眼帯。

年頃の少女がするには余りにも無骨すぎるそれが彼女の印象の殆どを担っていた。

白無は能面のような顔で時雨を認めると軽く頭を下げて感情の籠もらない声で

「おはよう」

「・・・おはよう。白無。あ、味噌汁にかまぼこや葱は普通そんなに入れないから」

挨拶を返して、ついでにそう言ってやると白無は葱がてんこ盛りになった鍋とかまぼこが零れんばかりに溢れているまな板とはみやり、黙ってタッパーを出してかまぼこを入れ始めた。

どうやら葱の方はどうにもならないと判断したらしい。

「さて、と。今日は鮭？味噌汁が出来たらご飯にしようか？」

白無が無言で頷く。その拍子に長めの前髪が軽く左目を隠すように揺れた。

時雨はふと白無の左目の眼帯の白さが目に入った。

今はもうない、狂った一族の最後の生贄だった少女。

生まれた時から理不尽に命を絶たれることを運命付けられた少女はその運命を外れ、今、目の前で生きている。
だが、それまでに彼女が奪われたものは余りにも多すぎた。

左目、家族、そして・・・感情。

時雨が白無を保護してから五年。

少女は十五になった。

本来なら鬼に捧げられる年齢へと成長した。

鬼はもう、いない。

彼女を生贄にしようとした一族も滅びた。

なのに時雨の胸は時折ひどく騒ぐのだ。

運命から解き放たれたはずの少女がいまだにその運命の輪から抜け出していないような気がしてしまって不安が心の隙間に入り込んでくる。

不安が顔に出ていたのか白無が心配そうに覗き込んできていた。

「・・・時雨？」

「あつ・・・」

気がつくとも白無がこちらを見ていた。

他人が見れば無表情だと思っ顔にほんの少しだけ心配そうな表情を浮かべて。

昔に比べたら格段に感情を出すようになった姪の頭を無言でぽんぽん叩いてやる。

「?・・・・?」

訳がわからず軽く頭を押さえる白無を笑いながら時雨は食器をだして食事の準備を始めた。

「いただきます!!」

「いただきます」

温度差の違う二つの声が手を合わせそれぞれ食事を開始する。

本日の献立はホウレン草と白ゴマの和え物に鮭の塩焼き。(葱が大量に投入された)味噌汁に甘い味付けの玉子焼きに炊き立てのご飯とノリ。

それらを食べながら時雨は白無に向かって一人喋る。

極端に無口な姪は軽く頷くだけで言葉を発することは滅多にないがちゃんと話は聞いているらしく意見を求めれば素直に返してくれる。

なんてことはない普通の朝食風景。

だけど五年前まではどう足掻いても手に入れることできなかった光景だ。

時雨は自分が「普通」ではない自覚はある。本来なら白無とこんな風に食卓を共にする資格がないことも知っていた。

自分が心を滅茶苦茶にされた白無をどこまで護ってやれるのか・・・幸せを教えてやれるのかわからない。ただ・・・幸せになってもraitai。

「白無・・・今日は卵焼き上手だね」

口に入れた玉子焼きは程よく甘く、焼き加減も丁度良い。見た目も綺麗でよく出来ていた。

白無は一度箸を止め、ぎくしゃくとご飯を口に運ぶ。非常にわかりづらいがどうやら照れているらしい。くすりと時雨は笑ってしまった。

軽く俯いて表情はわからないが髪の間からのぞく耳は微かに赤かった。

食事を終えて、後片付けをしようとする白無を無理矢理居間にとどめて自分が片付けをし始めた時雨の耳に能天気な・・・ここ五年ほど聞かない日はないほど馴染んだ声が届いた。

「おっはよございます!!」

「おや。今日は一段と元気がいいね。晶」

玄関まで出てきた時雨にお隣さんである晶少年は「へへっ」と人懐っこい笑顔で笑うと鞆を持って出てきた白無に手を振る。

白無は一瞬立ち止まるとやはり無表情のまま深々と頭を下げ挨拶する。

「おはよう。晶」

「おはよ!! 白無!!」

彼に尻尾があれば千切れんばかりに振っている。

（犬、だな）

しかし、外見通りの小型犬ではない。獰猛で認めた主以外には決

して懐かない大型犬だ。

晶という人間をよく知っている時雨はそんな評価を下す。
はたから見たら分かりやすいくらい分かりやすい晶の好意にやや
苦笑いを浮かべて見守る時雨を他所に晶は早く早くと白無の手を取
る。

靴を履きかけていた白無は焦ったのかわたたとスピードをアッ
プさせる。

「あ・・・ごめんなさ・・・」

皆まで言わず時雨が怖い顔で晶を叱り付けた。

「こゝろ。晶。うちの姪を焦らすな」

「あ、ごめん・・・」

晶がしゅんとうなだれる。見えない尻尾と耳が揃って垂れている
ような気がして時雨は内心爆笑していた。

（わ、分かりや過ぎる！？）

バンバンと辺り構わず叩きまくりたい衝動に駆られるがグッと我
慢する。

用意が出来たらしい白無がこちらを向いて小さく頭を下げる。

「時雨。いつてきます」

「はい。いつてらっしゃい」

軽く手を振ると白無もぎこちなく手を振り返す。

それが彼女らの日常。

五年かけて作り上げてきたかけがえのない日々。
登校していく若人の姿が見えなくなるまで見送ってから時雨は家の
中へと帰っていった。

ゆつくりと隣を歩く白無に歩調を合わせる。彼女と出会ってから
五年の間にすっかり身についた歩調に晶はちよつと誇らしい気持ち
になる。

ちらりと隣を歩く白無に視線を走らせる。無表情で何を考えてい
るのかわからないと言われる彼女だが晶には案外考えていることは
わかりやすい。

例えば今はきつと今朝やらかした失敗の原因について延々と考え
ているに違いないし・・・そうでなければ安いスーパールのチラシ情
報の吟味なんかをしていると思う。

白無の無事な方の目が微かに揺れる。目ざとくその変化に気付い
た晶が彼女の名を呼ぶ。

「・・・白無？」

晶の声に一拍置いて白無がぎゅっと晶の制服の袖を掴む。

彼女のその行動と自身の感覚から彼女が何を感じ取ったのかを晶
も遅まきながら気付いて目を細めた。

「ついてないね。交通事故かなにかあったのか」

晶が目を細める先には真新しい花が供えられた交差点。そしてそ
こに薄らと見える半透明の血塗れの女性の姿。

晶と白無は人には見えないはずのものが見える「目」を持ってい
た。

幽霊・アヤカシ・妖怪など普通の人間には見えない存在が見える

二人はその分それらの影響もまた受けやすい体質でもあった。

特に事故現場などはこのように被害者が「いる」ことが多いので晶は暗雲たる気分に陥った。

「大丈夫だよ。白無」

安心させるように彼女の手を握る。ちょっと慣れなれすぎたかなと想ったが彼女は振り払ったり嫌がったりはせずじっと晶をみて。

「・・・」

黙って白無が頷く。だが、その視線は女の幽体を見詰めていた。彼女が何を感じているのかはその横顔からは読み取ることができない。

「白無？」

「（ふるふる）」

なんでもないと頭を振る白無。長い黒髪がそれにあわせて尻尾のように揺れた。

「大丈夫？別の道にする？」

「・・・大丈夫・・・行こう」

白無が歩き出す。前に行く少女と繋いだ手が微かに震えているのに気付き晶は自分より小さく華奢な手をしっかりと繋ぎなおす。突然ずんずんと前に進みだした晶に引きずられるような形になった白無が目面白黒させる。

2人が幽霊の側を通り過ぎるその瞬間。

『……………どうして私が死ぬの？どうしてどうしてどうして……………』

とめどなく呟かれる怨嗟の声に引きずられないように足早に通り過ぎる。

肌を突き刺すような冷氣と不気味さに息が止まりそうな錯覚を起こす。

「ふう……………ここまでくれば大丈夫か」

幽霊の姿が見えない位置に来た2人は安堵の溜息をついた。

「晶……………手……………」

「うん？手って……………」

視線の先にはしっかりと繋がれた自分たちの手。

「うあー！！ご、ごめん！！」

ぱつと手を離す。晶の顔は真っ赤だ。

白無は少しだけ不思議そうな顔をしたが深くは追求しなかった。ただ、繋いでいた手をじっと見ていたのが晶には気になった。

「白無……………嫌、だった……………」

ここで嫌だったと言われたら大ダメージだ。再起不能になるかもしれない。

だが、幸いなことに白無は間髪入れずに首を横にふつてくれた。

「ううん。違うの・・・晶の手は温かいなって・・・思った・・・

」

人ってこんなにも温かいんだねと言う白無に彼女一体今までどんな人生を歩んできたのかその断片を見たような気がした。

ゆっくりと歩き出した白無に付き添うように晶もまた歩き出す。

「いこう」

静かに白無が頷いた。

未来予報士

物心ついた頃から僕には不思議な力があつた。

僕には未来のことがわかるのだ。

不可思議な力は僕に未来を教えてくれる代わりに僕から「驚く」ということを奪ってしまった。

酷く退屈な人生。

考えても見て欲しい。

何を見ても何をやっても結果が分かるのだ。

テレビドラマも小説も何年何組の誰それが付き合っていたとか誰かの恋が成就したとか春が散ったとかそれら全てが僕にはわかる。

何とつまらない。

自分のテストの結果が分かる・・・どころかテストの内容がテスト前に分かる。

成長するにしたがつて多少はコントロールすることができるようにはなっていたけどそれでも見たくもない未来は見える。

「ふう・・・暇だなあ」

ころりと裏庭の日当たりの良い場所に寝転ぶ。

場所は高校。時間は授業中。

だけどあと三十分はここには誰も来ない。

僕はサボりの常習犯だけど捕まったことはない。

そよそよと春の心地よい風が吹いてくる。

僕は風の音を聞きながら目を閉じた。

つまらない人生。

驚きのない人生。

全てが分かつて・・・「知らない」楽しみがない。

僕の心は何かに倦んで諦めていた。

ああ、どうして僕はこんな「力」を持っているんだろうか？

「あ、あわ・・・」

うん？

どこからともなく声が聞こえてくる。

幻聴？

目を瞑ったままの僕は少し耳を澄ましたが声はそれっきり聞こえてこない。

やっぱり気のせいかと思いかけたその時頭上から女の子の声が響いた。

「え？人？なんで・・・って・・・きゃ！」

今度こそはつきり聞こえた。

ぱちつと目を開けるとそこには外と校内を隔てる壁によじ登りそのまま僕の上に落ちてくる僕と同じ制服姿の女の子の姿。

「なっ！」

僕は生まれて初めて口をひらいてばかーんとしたなんとも間拔けな顔を外気に晒した。

予想外過ぎる・・・というかなんで女の子が降って来るの！

そんな疑問を抱くが今はそれよりも女の子を助ける方が先だ。

起き上がり落ちてくる女の子に手を伸ばす。

「っ！」

仰向けになった僕の上に女の子が乗っかっている。

どうやら無事に受け止めれたようだ。

衝撃と重さで息が止まりかけたし身体の節々が痛いけど。
とりあえず女の子には怪我はない。

・・・僕には打ち身とかありそうだけど・・・そこは考えまい。

「ったたた・・・って・・・あああああ！すいません！大丈夫ですか！」

状況に気付いたらしい女の子がぱつと僕から飛び退くとすごい勢いで頭を下げ始める。

「ごめんなさい！遅刻して・・・それで門が閉まっちゃったんで壁をよじ登って・・・」

なるほどそれで壁をよじ登ってたのか。

何となく事情が見えてきて僕は苦笑いをしながら起き上がり・・・そして・・・あることに気付いて・・・愕然とした。

僕がここにいたのは「二十八分と十五秒までは誰も来ない」と知っていたからだ。

未来視の力でここには誰も来ないと「見た」からここでサボっていたのだ。

だけど・・・この子がやってきた。

「あの・・・？」

女の子が不思議そうに首を傾げる。

だが、それに構ってはられない。

分からなかった。僕は彼女が落ちてくるのを予知できなかった。

足元が崩れるかと思うぐらいの衝撃を受けた。

今まで・・・こんな風に僕が行動を予知できない人物はいなかった。

た。

「だ、大丈夫ですか？どこか怪我でも？」

いつまでも黙っている僕に不安になったのか女の子が恐る恐るそう聞いてくる。

軽くウェーブのついた髪、リボンの色から一年生だろう。

心配そうに覗き込んでくる顔は幼い。

まじまじと女の子を見る。

本当にどこにでもいる普通の女の子なのに・・・彼女の行動は読めないのだ。

試しに彼女の未来を見てみようとしても全然見られない。
今までなかった事態だ。

「君は・・・」

「え、はい？」

「君の名前は？」

「え？」

ゆるゆると事態を飲み込んでいった僕が驚愕の次に感じたのは喜びだった。

生まれて初めて、僕は僕を驚かす人間に出会えたのだ。
これが喜ばずにはいられないであろう。

僕はえ、え、と戸惑う女の子に笑いかけながら最初の一步を踏み出した。

「僕の名前は糸田 圭一。君の名前は？」

未来を読むことの出来ない人間との出会い。

それをどれほど僕が切望していたのかを僕は出会ってから知った。
困惑したように告げられた名前を僕は生涯忘れることはない。

この日、僕は生まれて初めて「驚き」を体験した。

約束

白い部屋。夜だけ格子を外された窓から差し込む月の光を浴びるのは一人の少女。

死装束を連想させる真っ白な着物を身に纏い、その着物より白き髪に月のような銀の瞳。

黒髪黒目の人間しか住まぬはずのこの地においてかような外見を持つて生まれた少女はその特異な能力と合わせり生まれた時より隔離された生活を強いられていた。

日中は窓も無い屋敷の奥に籠もり、月夜の晩のみこの部屋へと移り月の光を浴びる。

陰陽二つ力によって構成されているこの世界において少女の力は陰の力。

そのため、陽に属する太陽の光は少女にとっては毒に等しい。少なくとも少女はそう聞かされ育った。だから夜の光景しか知らなかった。

少女に名はない。ただ、「語り部」とだけ呼ばれていた。

幼き頃、少女は今よりずっと身体が弱かった。神託を一つ語るだけで倒れ、高熱を出す身体を何度呪っただろうか。

医者にも薬にも恵まれてはいたがいつも心のどこかに穴が開いたようだった。

そう、あの日も神託を終え、熱を出してしまった少女は部屋で一人、夢うつつに窓の外を見ていた。

欠けていく月を見ていると不意に影が差し込んできた。

「…………誰かいるの？」

熱で辛い身体を起こして窓に近寄る。外から誰かがこちらをのぞ

きこんでいる。小さな自分と同じぐらいの大きさ。

ビクビクしながらそつと外をのぞき込むと青い瞳と目があつて、思わず「あっ！」と大きな声を挙げてしまった。慌てて口を押さえるが声はしつかりと部屋の外に控えている侍女に聞こえてしまったらしく訝しげな声が聞こえてきた。

「……………語り部さま？どうかされましたか？」

「な、なんでもない……………気分転換に外を見ようとしたらちよつとクラクラしただけ」

「お体が本調子ではないのです。休まれてくださいまし」

「はい」

何とか誤魔化せた。再び窓の外に目をやると青い目に金色の髪をした異国の少年がびっくりした顔でこちらを見上げていた。窓を開けて少年に手を差し伸べた。

「こつちにおいでよ。そこは寒いよ？」

風変わりな格好をした異国の少年はエルクと名乗った。父親と共に世界中を旅して回っているのだという。この地へは旅の途中によつて数日後また旅に出るのだそうだ。

「……………どうしてこんな夜更けに外にでたの？ここは普通の人が入っていたら怒られるよ」

「寝ていたら物音がして……………気になったから外に出て探してたらここに迷い込んだんだよ」

プイツとふて腐れたように顔を逸らす少年に少女はクスクスと笑って彼をここまで導いた「音」の正体を明かした。

「エルクが聞いた物音は多分精霊だと思うよ。見ない顔だからかわれたんだよ。きっと」

ガクツーと肩を落とす少年。からかわれたのが相当ショックだったようではらくぶつぶつと精霊に対して文句を言っていた。

「なんだよ、それ……。勢い込んで剣まで持ってきたのが馬鹿みたいだ……」

「剣？」

興味津々で覗き込んでくる少女に少年は「ほら」と見えやすい位置に持ってきてくれた。

「へえ……。刀とは形が全然違う。それにこの鞘に彫られているのは龍だ」

「りゅう？ドラゴンのことをお前達はそう呼ぶのか。これは対の剣でこれは「地の剣」。片割れが

「天の剣」と呼ばれるんだ。」

「触ってもいい？」

「ああ。但し、剣を鞘から抜くなよ」

そろりと剣を持ち上げてみるが予想外の重さに思わず取り落とし

そうになる。

「重い。儀式のときにもった刀はもつと軽かったよ」

「おまえ・・・実践用の武器と儀礼用のを一緒にするなよ。第一、刀は剣より軽く作られているんだよ。扱い方から違うしな」

自分とそう年の変わらない少年が訳知り顔ですらすらと講釈をたれたので少女は面白くない。何となく気持ちが萎んだ気がして少女は俯いた。

クラツと視界が揺れる。「いけない」と思った時には身体が傾いていた。地面に倒れる！と目を瞑り衝撃に備えた少女の身体を少年が何とか抱きとめる。そして腕の中で荒い息をしている少女に気付きハツと顔色を変える。

「お前・・・熱があるじゃないか!!」

「平気、いつものことだもん」

赤い顔で頭を振る少女を少年は問答無用で寢床に戻した。

「病人は大人しく寝ている。この馬鹿!!」

「ば・・・馬鹿って何よ!」

「馬鹿じゃなきゃ戯け者だ。動くのも辛いくせに何起き上がったるんだ」

「だって・・・エルクが帰っちゃうのいやだもん」

泣きそうな顔で少女の手が少年の服の袂を掴む。

「私のこと……普通の子と同じように声を掛けてくれたのエルクだけだもの……。友達になつて、欲しかったんだもの」

その言葉に少年は一瞬だけ呆気にとられ、ついで怒ったような顔をして視線を逸らすとドスンとその場に座りなおした。

「エルク……。？」

「お前が寝るまではここにいる。それで、明日も来てやる。……友達、だから……。遊びにきてやる」

チラリと少女の方を見て、すぐに顔を逸らす。少年の顔がみるみる真っ赤に染まっていく。

「うん……。ありがとう……。」

あのと看確かに少女は幸せだった。

「……。語り部様……。お時間です」

扉の外からの侍女の声に少女は物思ひから現実へと意識を戻した。

「わかりました。今、行きます」

意識して稟とした声で答える。身に纏った着物がやけに重く感じたがそれを少女は無視した。

立ち上がった拍子に頭の上の髪飾りがジャランと鳴る。

背筋を伸ばし、真っ直ぐと前を見据える。今宵も迷える者が彼女の前に現れる。他者が彼女に求めるのは神託のみ。

そして彼女を庇護する者たちが求めるのは彼女の力によって得られる利益。

なれば、私は演じてみせよう。

神聖で清廉で従順な語り部を。

そして今宵も少女は仮面を被り、語り部となる。

務めを終え、部屋に戻った少女は窓際に座り込み月を見上げていた。

力を使った後はいつも身体がけんだるい。壁に寄りかかるように身体を預ける少女をただ、十六夜の月が見下ろしていた。

手足を動かす気にもならない。成長することに力を使った後の反動が酷くなっている気がする。

このまま死んでしまうのだろうか。

（約束だ。いつか絶対に迎えに来るからその時は一緒に世界を旅してまわるんだ）

小さな頃の約束を素直に信じるには自分を取り巻く現実が余りにも辛くて。そして自分もまたあのころの真っ直ぐに未来への約束を信じられるほどの強さを失くしてしまった。

信じたいと・・・信じ続けていたいと願ってはいても心の奥に根付いたあきらめがそれを打ち砕く。

「エルク……」

あなたは約束を覚えているの？

小さな子供の時分の約束を。たった一時、ほんの僅かな時を共有した私を覚えている？

（次に会った時にはお前に名前を付けてやるよ）

きつと約束は果たされない。

見上げれば月。名も無き少女は淡い月光に包まれながら絶望を見詰めていた。

目を瞑り、思い出すのは名前もない少女の白い色。

まだ彼の父親が生きて一緒に旅をしていた頃に数日だけ滞在した土地で出会った少女は雪のごとく白い髪と今宵の月を思わせるような見事な銀の瞳で自分を見つめていた。

精霊にからかわれ少女の住む、立ち入り禁止区に迷い込んでしまった自分に手を差し伸べた彼女に幼いながらも淡い恋心を抱いた。淡い微笑みが自然とこみ上げてくる。

きつとあの少女は知らない。

自分が一目で彼の心を永久に奪ってしまったことを。

たった数日で本当に本気の恋を彼に自覚させてしまったなんて言わなければきつと気付いてはくれない。

（約束よ。待っているから。絶対に迎えにきてね）

別れる日に交わした幼い約束。だが、一日だって忘れたことはない。

少年は腰に差す二振りの剣を触る。

左には父より譲られた「地の剣」
右には父の形見である「天の剣」

二振りの対の剣の感触を確かめ、少年は深呼吸をすると天上にかかる月を見上げた。

この世で最も愛しい少女もこの月を見ていればいい。そう、柄にもないことを考え、少年はそっとその場を後にした。

約束はもうすぐ、果たされる。

絶望し、感情を封じた少女と

約束を果たすため、旅をする少年。

重なり離れた二つの運命は一つの約束の下で再び交差しようとしていた。

異邦の少女とめんどくさがりな騎士

物語の舞台は数多の神々が眠る世界。

剣と不思議が当たり前前に存在する場所。

その世界には魔法にも似た「力」があつた。

特殊な道具を使い、世界に眠る神々の封印に干渉し、その力を一時的に世界に再現するこの術は敵対関係にある魔族の脅威に対して人間が自衛のために編み出したものだった。

これを封術といい、それを操るものを封術士と呼ぶ。

しかし、本来人間であれば誰でも使えた封術は「人魔戦争」の終結と人間との徹底抗戦を謳っていた魔族の王が絶対封印されたことからそのあり方を変えていった。

世界は混迷の時を迎えていた。

護るために編み出された力は同胞を傷つける道具に堕ちた。

神の力を借り、人は人を狩り続けた。

幾千幾万の屍が大地を埋め尽くし、無為に流された血が大河を紅に染め上げた。

叫びが怨嗟の声が嘆きが悲しみが憂いが憎しみが怒りが無為に死んでいく者の末期の声が世界を包み込み、それは永遠に続くはずだった神の眠りの一端を綻ばせ、まどろみの中にいた神の一柱が目覚めた。

その神の名は伝わっていない。

日の光そのもののような金の髪と鮮やかな銀朱の瞳を持った女神は世界のありようを見て嘆いた。

「なんと愚かで悲しいこと……」

女神が知っていた美しく穏やかな世界はもう無かった。

そこに在ったのはまさに生き地獄のような光景。女神は……その銀朱の瞳から生まれて初めて涙を零した。

一つ、二つと零れた涙は大地の屍を清め、血に染まった大河を清らかな水へと戻した。

女神の純粹なる思いが世界を包んでいた不浄なる気を優しく純化させていった。それらはまさに神の奇跡だった。

だが、世界を清浄な状態に戻すために女神はその力のほとんどを失った。

「知らぬこととはいえ世界をここまで荒廃させたのは間違いなく我らの力。この世界に一度生じた力を消すことはわらわには出来ない。だが枷をつけることなら出来よう」

最期の刻。残った力を使い女神は封術という人には強大過ぎる力に枷をつけた。

神々の封印への干渉を大幅に制限し、封術という力そのものを弱くした。それと同時にそれまで人間が当たり前のように持っていた第六感とも言ふべき不可思議な能力を女神は奪った。

この時から人間と世界との繋がりが恐ろしく希薄なものとなり、世界に満ちるマナも神秘に触れることも容易には出来なくなってしまうった。

一部を除いて人間は世界を感じる術を失った。

出会いとは不思議である。

生まれて二十六年。たったというべきか結構というべきかそれは判らない。だが、リーガの長くはないが短くもない人生の中でとびつきの忘れようにも忘れられない衝撃的な「出会い」が一つ、ある。

恐ろしいほどの偶然とほんの一欠けらの必然の間でふってきた出会い。

その日、その時、その場所にいなければ。あるいはもしくは……いくつもの「もし」の上にたった一つの出会いがあると考えるときんな出会いでも何かしらの縁があったのかと考えてしまう。

だからリーガは考える。

もし、あの日、あの時、あの場所を自分が歩いていなかったら、「彼女」と「自分」の運命は一体どんな風になっていたのだろうか。

日が落ちてすっかりと暗くなった夜道を一人リーガは歩いていた。リーガは薄い金に近い髪を後ろでしっぽのように結び、緑の瞳は面倒そうな光しか浮かべない青年である。

彼は商家の五男だが家業を手伝う道よりも騎士団に入った変わり種である。

五男とはいえ彼の場合幼い頃から無駄に発揮していた商才と鑑定眼に家族の方が是非家業を手伝わせ、ゆくゆくは看板を分けて支店を任せたいと考えていたのだが当のリーガがなんの断りも相談も前触れもなく十五歳の誕生日の朝に「誕生日の贈り物は何がいい？」と聞いてきた母親に開口一番。

「俺、「騎士団」の入団試験に受かったから騎士団に入る許可を

くれ」

母親は倒れる、父親は混乱する兄妹姉弟は揃って「頭は大丈夫か？！」と代わる代わるリーガの熱を測っていた。

家中が大混乱に陥った。

面白いものでそんな中で当の本人は嵐のような家族の反応をやり過ごしていたが。

家族の驚きと戸惑いはリーガという人間を知っていれば当然というべきものだった。

リーガという男は兎に角覇気というものがない。

泥に釘をさすようにぬるぬるした魚を捕まえるように掴み所がなく、こと流れ主義。

言われれば大抵のことに標準以上の成果を上げるが大抵のことは言われないとしない。

どこをどうしてこう育ったのか判らないが自主性というものがこの男には圧倒的に欠けていた。

そんな男が（思いつく限りで初めて）自主的にやったことが少年達の憧れ、精鋭中の精鋭との誉れも高い「騎士団」への入団だというのだから周囲の人々が信じきれず大混乱に陥るのも無理はない。

そんな大騒動をしてまで入ったにしては本人がかもし出す雰囲気のせいかもしれない自分の外見に頓着しないせいかもしれないと見たところ不良騎士団員にしか見えない。

どう考えても彼に仕事に対する熱意があるようには思えなかった。

ふらふらと歩く。

今日は新人団員のための歓迎会だったためリーガも酒が入っていた。

ほろ酔い気分という奴だ。

隙だらけのように見えるリーガだったが自分の後ろをつけて来ている気配にはちゃんと気付いていた。

（ひい・ふう・みい・・・武器を持った奴が五人つてところか・・・）

冷静に状況を整理してリーガは軽く肩を竦めた。何事にも面倒そうな顔をしているから気付かれないが割り顔のいいリーガがやるとやけにサマになっていた。

武器を持った不逞な輩につけられる覚えなどリーガには・・・残念ながらあった。

（あ~~~~、多分、飲み屋で口論になったあいつらだろうな。というか他に思いつかんし）

リーガの脳裏にほんの数刻の前の出来事が思い浮かびかけるが・・・。

（面倒だな・・・いいか別に、詳しいことを思い出さなくても）

そんな事ですら面倒臭がる男、リーガ。

がしがしと頭を掻く。まあ、細かいことを思い出さなくても向こうさんは自分を襲う気満々である。

結果は変わらないのなら面倒なことはしないのがリーガだ。

リーガは冷静に状況について考えを巡らせる。

平素でも上手く剣が使えないのに酒の入った今の状態で武器もちを五人相手にするのはちと骨だと冷静に判断したリーガはチラリと腰の剣を・・・正確には剣の柄にはめ込まれた銀の玉に視線を走らせた。

「ふむ・・・」

しばし考え込んだあと、そつと腰に下げた剣の鐔に指をかけ、足をとめて振り向く。

しつぽのように結ばれた髪が月の光をキラリと弾いて宝石のように輝いた。

鮮やかな緑の瞳が心底面倒そうにぞろぞろと出てくる男たちに隠しもしない感情を送る。

「……はぁ~~~~~面倒だ……面倒なのに更に面倒なことが起きるだろうな……考えただけで面倒だ……」

武器を手にした自分たちを見ても顔色一つ変えず「面倒」と繰り返すリーガに男たちが戸惑うように顔を見合わせる。

「面倒……面倒だ……なんで俺、こんな面倒に巻き込まれてるんだろう」

「そりゃ！てめえがフザケタことをしたからじゃねえか！！」

その場にいるリーガ以外の全員が声を揃えて突っ込む。
なんの余興だと言いたくなるくらいそれは綺麗に重なった突っ込みであった。

男の一人が棍棒を手にワナワナと拳を震わせる。

リーガを見る目はまるで親の敵を見るそれであった。

「てめえ……忘れたとは言わさねえぞ」

「忘れてはいないが……思い出すのが面倒で……」

ある意味綺麗サッパリ忘れるより酷いリーガの所業に男たちの殺気が膨れ上がる。それに気付いてリーガは心底嫌そうに眉を潜める。

「面倒なんだよな・・・」

ぼつりと呟いたリーガの右手が剣の柄に触れる。

「「騎士団」にバレた時の小言」

その言葉に応えるように剣に埋め込まれた銀色の玉―封具が鈍く輝き出す。小さなしかし致命的な変化に怒りに駆られた男達は気付かない。

「バレたらやれ始末書だの「騎士団」としての規律が云々と副団長が煩いだろうな・・・」

まあ、「騎士団」の特殊性と立場を考えればその煩さも納得できなくはないのだがやっぱり自分に降りかかるとなると面倒だと思ってしまう。

武器を手に一斉に男たちが襲い掛かってくる。その時には封具の光が誰の目にも視覚できるくらいまで強くなっていた。

リーガが小さく呟く。

「・・・我、願うは全てを止める戒め」

その声は本当に小さな声だったのに不思議とその場にいる全員の耳に届いた。

ざわり。

空気が変わる。

異常な雰囲気が一瞬に満ち始めた。男の一人が振り下ろした棍棒

がリーガに振り下ろされかけて・・・突如として消えた。

「なっ・・・!」

リーガは同じように・・・面倒そうな顔のまま立っているだけだ。剣に手をかけてはいるが抜いた形跡はない。

呆然と手元の棍棒に目を落とし、男は今度こそ声をなくした。棍棒がまるで途中から溶けたような断面を見せていたからだ。

「・・・一つ、教えてやる。面倒だけどな」

静かに面倒そうにリーガが口を開く。

「一応騎士団ってことになっているけど・・・俺ら別に武器で戦うことに特化しているわけじゃない。まあ・・・大部分が武器での戦闘を得意としているのは事実だけどな・・・中には俺みたいに剣に不得手な人間もいる。さて、そんな人間はどうやって「騎士団」での任務をこなしていると思う?」

こつこつとリーガが男達に近寄る足音だけが夜の闇に響いていく。どういことだろうか? 男達は一切の動きを封じられてしまっていた。

リーダー格の男の三歩ほど手前でリーガは足を止める。

それほど近くにリーガがいるというのに男はやはり動くことが出来ずにいた。面倒そうな顔をした男が心底恐ろしかった。

感じるのはほぼ本能的な恐怖だった。そしてそれ故に制御しづらい。

「正解はこれだよ」

腰から外した剣を男の視線の高さまで上げてやる。月の光を反射させ中心に埋め込まれた銀の玉が鈍く輝く。

その輝きと今、自分たちも身に起こった異変とを結び合わせ男は一つの答えを導き出す。

乾涸びた声でそれを口にだした。

「ま・・・さか・・・封術・・・」

封術を使うものは畏怖の対象として見られる。

封術士。数少なくそれ故に最強と言われる者達。

その一人であるう目の前の男は大して面白くもなさそうに鼻を鳴らした。

「ご名答。因みに棍棒を溶かしたのもあんたらの動きを止めているのも俺の使った封術。喧嘩には卑怯だがまあ、見逃せ」

ぼんと男の肩を叩く。面倒そうに億劫そうな顔でそのまま封術を発動させた。

「・・・我、望むは深き眠りの吐息」

くらりと男の体から力が抜け、その場に崩れ落ちる。残りの男達も同様に地面に倒れ、健やかな寝息を立てていた。

それらを確認するよりも早くリーガの口から零れたのは・・・。

「あ~~~~~面倒だ」

この男はどこまでもこんな性格である。

腰に剣を戻すと周りですやすよと眠る男たちを見て困ったように頭をかいた。

「こいつらどうするか・・・」

後先考えず動くもんじゃないと愚痴りながら溜息を零したその時、リーガの頭上に強烈な光が生まれた。

「なんだ？」

光の強さに目を細めるリーガの前で光は徐々にその強さを増していく。その様子はさながら小さな太陽のようだった。

「・・・ちい！我、描くは・・・って!!」

封術を発動させようとしたリーガだったが光の中から突然人が落ちてきたことで強制的に途切れた。

光があつたのは見上げるほどの高さ。そこから落ちれば当然、無事では済まない。

視界に映るのは見慣れる服を着たまだ若い少女。意識を失っているのかぴくりとも動く様子もなく落ちてくる。

「おいおいおい!!」

なにがなんだかサッパリ分からないがとりあえず人命第一とリーガは落ちてくる少女を救うために手を伸ばした。

「・・・間に合えっ」

ぎりぎりまで伸ばした腕の中にどうにか落ちてくる少女を抱えこむ。が、衝撃を堪えきれずに少女を抱え込んだまま地面を転がる破目になった。

「・・・つてえ・・・」

衝撃と転げた拍子にぶつけた痛みに眉を顰めながらもリーガは腕の中の少女に視線を落とし、彼女がちゃんと息をしているのを確認してほつと息を吐いた。

「生きているか・・・しかし、なんだこの子の格好は・・・」

よく見てみると実に奇妙な格好をした少女だ。

黒いスカートは縦に段の入っており、リーガの常識からすれば考えられないくらい短い。上に着ているのは薄手白い上衣にスカートと同色の上着。

胸元には青いリボンをつけている。

見た事もない型の服だ。使われている布もリーガの知らない手触りである。

それにこの少女は肌の色も違う。リーガの住むこの西方大陸に多く見られる白い肌ではなく黄色がかった象牙色の肌をしている。頬にかかった髪だつてここらでは見ない黒曜石のような黒だ。

「う・・・ん・・・」

少女が腕の中で小さく寝返りを打つ。艶やかな長い髪ของさらりとした感触がリーガの手に伝わる。

まだ十代だろうか。幼さの残る顔には穏やかな表情が浮んでいてリーガは思わずマジマジとその寝顔を見詰めた。

光から落ちてきたのはどう見ても普通ではない少女。

ひしひしと尋常でない事態の気配を感じてリーガはもう一度溜息をついた。

腕の中ではスヤスヤと眠る少女。

だが、彼女が普通の少女だとは思えない。

普通の少女は空から発光体の中より落ちてはこないだろう。

少女が落ちてきた光はとうに消え去り夜空には淡い月の光のみが灯っていた。

「俺、何か物凄く面倒なことに巻き込まれそうな気がすごくするんですけど……」

月は何も言うてはくれない。

ユウリは小さな頃から気が弱かった。引っ込みじあんで自分の意見を言うのが怖く、いつもびくびく小さくなっているような子供だった。

十八歳になった今でも自分を強く押し出すことが出来ないし、頼まれたら嫌だとは言えない。

そんな性格のくせになぜだかいつもユウリは面倒事や厄介事に巻き込まれる。

押し付けられる、の方が正しいのかもしれない。

周りの人間からしたらどんな用事を押し付けても断れないユウリのような人間は便利に映るのだろう。

だからいつも通り押し付けられた日直の仕事を片付けていたのに……どうして、こんなことに。

ユウリはどう考えても学校ではない場所の医療室のような場所で目を覚ました。

服装は目覚める前と同じだったけど後は軒並み記憶と違っていた。

「え、えっ？」

シーツを胸まで上げて動揺したように辺りを見渡す。

古いベットに清潔そうなシーツ。病院にはお決まりのベット周りのカーテン。

…… やっぱり覚えのない場所であつた。

「わ、私……一体……」

オロオロとシーツをキツク握り締める。

落ち着け。落ち着くのユウリ。考えて状況を整理しましょう。深呼吸して心の中で「落ち着け。落ち着け」と繰り返す。と、なんの前触れもなくカーテンが開けられる。

「きゃー!!」

思わず悲鳴を上げてベットの端まで逃げるユウリにカーテンを開けた人物は不機嫌そうに眉を潜めた。

「人の顔見るなり悲鳴を上げるとはお前、失礼な人間だな」

が、外人？

入ってきたのは金色の髪に緑の瞳を持つ、二十代前半と思しき外人の男性だった。

え？なんで？外人さんが？

訳が分からない。おまけに……。

（服が変だし……腰にぶら下げているのって剣、だよね……
じゅ、銃刀法違反？）

目の前の男性はユウリ感覚からいっただらゲームの登場人物を思わせる騎士の格好を少し着崩していた。そして腰には立派な剣。

な、なに？ 一体どうして銃刀法違反をした外人のコスプレが？
ユウリの頭の中がかなりいい具合に混乱中であつた。

そんなユウリを男性は面倒そうな顔をして見ると手短にあつた椅子引き寄せなんの許可もなく座る。

緑の瞳がじつと自分を見ていてユウリはなんだか落ち着かなかつた。しかも相手は銃刀法違反者だし。

「あ、あの・・・」

「なんだ」

じろりと緑の瞳を向けられてユウリは思わず委縮してしまう。

何も言えなくなつて縮こまるユウリに男性は「ちっ」と面倒そうに舌打ちをした。

怒らせた。

びくりと肩が震える。

自分の態度が他人を苛立たせることをわかつてはいたが自分ではどうすることもできない。

口を開くこともできずにユウリはただシーツを握り締めているしかなかつた。

そんな彼女に男性が「うゝゝっ！」と唸り声を上げるなり髪を乱暴に掻き出した。

不機嫌そうな顔が更に苦いものへと変化する。ぼそぼそと「面倒くさい」と呻いていた。

「あゝゝゝ。そう怖がるな・・・。怖がらす気はねえ。つつか泣くなよ？ 泣かれるとあとで俺が面倒な目に遭つ」

さつき散々面倒な説教を食らわされてたんだこれ以上面倒はゴメ

んだ。などとユウリには訳のわからないことをブツブツと呟くと男性は「いいな？」と念を押しをしてくるのでユウリは訳も分からずに頷くしかなかった。

「は、はい。わかりました」

「わかったんならいい」

うんうんと男性が頷く。

その様子が案外子供っぽくてユウリの口元に思わず笑顔が浮ぶ。それを目ざとく見つけた男性が不機嫌そうに目を細めた。

「なに笑ってんだよ」

「あつ・・・ごめんなさい!!」

ギリギリと睨まれすぐに笑うのを止める。再び硬い表情でベットの隅に蹲るユウリに男は「あゝ」とまた唸った。

「別に怒っちゃいねえからそう萎縮するな」

「は、はい・・・すいません・・・」

「謝るな」

「す、すいません・・・」

「だから・・・謝るなつて」

「ご、ごめんなさい・・・」

「言い方変えただけじゃねえか・・・」

「す、すいませ・・・ああっ・・・えつと・・・」

謝るなど言われてどう返答したらいいのか分からなくなったユウリがオロオロと視線を辺りに彷徨わせ始める。

「あゝゝゝ。悪い。俺が悪かった。前言撤回するから落ち着け」

「は、はい・・・」

しおしおと視線を男性に戻す。男性は不機嫌そうな顔のままユウリを見ていた。

怖いな・・・とユウリは視線を男性から心もち逸らした。

元々人の目を見詰めて話すのは苦手である。まして異性の怖そうな男性の目を真っ直ぐに見詰めることなどユウリには土台無理な話であつた。

「えつと・・・名前、聞いていいか？俺はリーガ。あんたは？」

男性。リーガは不機嫌そうな声のまま自己紹介をしてきた。その目は真っ直ぐにユウリを見ている。まるで尋問でもされるかのような気分になってきてユウリは泣きたくなってきた。

ユウリはその視線にますます俯きながら小さく名前を口にした。

「日比谷悠里です」

「ヒビヤユウリ？長い上に変わっていて言いにくいな。本名か？」

舌を噛みそうだと言う男性にユウリは慌てて補足説明をした。

「本名です！日比谷は苗字です。名前は悠里。悠里が私の名前です」

意気込んでそう説明するユウリだったが勢い過ぎてリーガに詰め寄りすぎていた。

緑色の瞳と至近距離でバッチリ目が合う。そして迂闊なことにリーガが結構な男前なことにもその時初めて気付いた。

ユウリは男性に免疫がない。というか中学校から女子校だったため年頃の異性と接する機会などないまま今までできていたのだ。こんな至近距離に男性の顔があるということに普通の少女以上の動揺を覚える。

「~~~~~っ」

声にならない悲鳴を上げて三度ベットの端に逃げるユウリにリーガがますます眉を潜める。

「自分から近寄っておいてなんだ、その反応は」

彼の言い分はもつともだとは思う。自分かなり失礼な態度を取っているという自覚もある。

だが……こっちの動揺も少しは理解して欲しい。

「す、す、す、す、すいません！！すいません！！すいません！！」

動揺のまま壊れた蓄音機の如く「すいません」を連呼して頭を下げるユウリにリーガがぎょつとしたように目を見開く。

「お、おい・・・」

「すいませんすいませんすいません!!」

「ちょ・・・」

「すいませんすいませんすいません・・・!!」

ぶちりと何か・・・聞こえないはずの何かがぶち切れる音をユウリの耳は確かに拾った。

(・・・え?)

と思つたときには時、既に遅し。
がしりと下げていた頭を驚?みにされた。

(え、え、ええええええ?)

そしてそのまま力を込められる。

「い、いたたああああああ!!」

「一々、謝るな!卑屈になるな!ビクビクするな!!見ているこっちがイライラする!!」

ユウリはリーガにアイアンクローをされているのだと気付いたときにはもう悲鳴を上げるしかなかった。

と、そんな彼女を哀れに思ったのか天は助けをよこしてくれた。

「リーガ。何してんの!!」

白衣を着た医者らしい青年が（やっぱり赤い髪に目で外人ぽかった）慌ててユウリからリーガを引き離す。

「なんで事情説明するはずの君がこの子の頭を鷲掴みにしてんだよ」

女の子になんてことをとぶんと怒る青年は頭を押さえて蹲るユウリに心配そうな視線を送ってくる。

赤い瞳が心配そうに揺れる。

「君、大丈夫？ごめんね。こいつ普段はやる気ないのに変なところで武道派なもんだから」

「全然フォローになってねえぞ。バスク」

「あれ？俺、別にリーガのフォローしているつもり、ないけど？」

「ねえのかよ……」

「ないねえ……」

「しみじみと言っな！」

いつの間にやら会話が漫才に突入してしまっている。じくじくと痛む頭を押さえつつユウリは2人に口を出すことすらできずにただただ会話を聞いているしか出来ない。

「大体リーガは女の子の扱いがなってないんだよ。頭鷲つかみにして怒鳴るって一体どういうつもり？」

「いや、それは・・・だが、こいつが・・・」

「だが・・・じゃないよ。どんな理由があっても女の子を泣かせるような男は駄目駄目だよ」

「だ、駄目駄目・・・なのか」

「うん。ものすごく~~~~~く駄目駄目だね」

「駄目駄目・・・」

「駄目駄目男・・・嫌な称号だね・・・」

ど、どうしよう・・・なんか私のこと忘れられている。

やっと収まってきた頭の痛みによりやく冷静に物事が見れるようになったと思ったら事態から景気良く蚊帳の外に置かれてしまっていた。

しかもリーガは駄目駄目男と言われて何故だかものすごくショックを受けているらしく不機嫌疎な顔はそのまま影を背負い込んでしまった。

「と、まあ・・・駄目駄目男は放っておいて。君、名前は？」

「え、あ、はい。日比谷悠里です」

「ヒビヤユウリ？変わった名前だね。俺はバスク。騎士団の主治医をやっている」

握手といって外見の華奢さとは裏腹に大きくて骨ばった手がユウ

リの手を包む。

「あ、えっと・・・こちらこそ宜しくお願いします・・・。それと日比谷は苗字で悠里が名前です」

「ユウリが名前？へえ・・・綺麗な音の名前だね」

なんの照れもなくバスクが名前を誉める。幼さの残るだけどやっぱり整った顔の青年にそんなことを言われて動揺しない女性は少ない。

ユウリの頬が本人の意思とは関係なく朱色に染まった。

「あ・・・う・・・」

こんな時どんな風に反応すればいいのかユウリには分からない。そのため意味不明な単語を発した後俯くしかなかった。そんなユウリにバスクが不思議そうな顔をする。

「あれ？どうしたの？」

「お前、本当に天然だな・・・」

呆れたように言うのはそれまで黙っていたリーガだ。どうやら駄目駄目男のダメージからは抜けられたらしくもう元通りの不機嫌顔に戻っていた。

「まあ、それはともかく・・・家名を持っているってことはお前、貴族か封術士か？」

「え・・・？貴族？封術士？・・・私の家はおじいちゃんの代

から飲食店ですけど……そもそも封術士って何かすら分からないし……」

自分の知らない単語が出てきてちよつと混乱気味のユウリに男2人が顔を見合わせる。

「封術士を知らない？」

「家名を持っているのに貴族じゃない？」

2人に浮ぶ表情は驚愕であつた。

「あ、あの……」

なにが起きているのだろうか？

どうして2人が驚くのが分からないし。封術士がなんなのかどうして自分が貴族と間違われかけたのが全然わからずユウリは混乱していた。

思えば目が覚めてから訳のわからないことだらけだ。
今まで気付かなかった疑問がムクリと沸き起こってくる。

「あ、あの……」

ユウリは再び2人だけの会話を始めたリーガたちに勇気を出して声をかけた。

リーガとバスクの視線がユウリに集中する。

「うつ」とその視線の強さに怖気かけるがどうにか気を持たせてユウリは口を開いた。

「こ、ここはどこですか？私、目が覚める前は学校にいたはずな

んです。なのに気付いたら全然知らない場所にいて、正直自分の状況が良く分からないんです」

どくんどくと心臓の音が煩い。

こんな風に人に自分の意見を言ったことが無いから余計に緊張する。

「……お前、もしかして……」

リーガが何かに気付いたように口元を手で覆い考え込む。

「リーガ？どうしたんだい？」

「いや……だが、そんなことがありえるのか？」

「おゝゝい。リーガ。自己完結しないでくれる？」

バスクの声も届いていないらしいリーガは不機嫌そうな顔をさらに深刻なものしながら考え込んでいた。

「ユウリ」

「は、はい！」

「ここがどこかと聞いたな。ここは大陸の南に位置するエディバル王国の領土の一つソルトボールという街だ。……聞き覚え、あるか？」

探るようなリーガの目。

バスクも何かに気付いたのか物問いたげな視線でリーガを見るが

口は出さない。

当然のことながらユウリはリーガの言った地名は何一つ分からなかったから首を振るしかない。

「えっと・・・ここ、日本じゃないんですか？」

ユウリの言葉に今度はリーガ達が首を振った。

「そんな地名は聞いたことがないよ」

バスクの言葉にユウリは愕然とした。雲の上から地面に向かって叩き落とされたような気分だ。

青い顔で黙り込むユウリにリーガが止めの一言を放った。

「すぐには信じられんだろうが・・・多分、この世界はお前の知っている世界とは違うと思う」

ユウリは目を丸くした。

すぐには信じられない言葉に耳を疑うことしか出来なかった。

『多分、この世界はお前の知っている世界とは違うと思う』

リーガと名乗った仏頂面のコスプレ外人さんが言った衝撃的一言をユウリは最初、信じなかった。

必死になって否定する材料を挙げる。

自分達が何を言っても今は逆効果にしかならないと思ったのかりーガとバスクは口を挟まない。

「だって私、普通に学校に行って・・・授業を受けて・・・それで・・・」

気を失う直前までの自分の行動を思い返しながら反論していたユウリだったが気を失う直前に近づけば近づくほど言葉が濁っていく。

「日誌を……書いて……」

廊下に出たら不意に目眩がしたのだ。

気が遠くなつて光で視界が一杯になつて……そして気付いたらここにいた。

「……………」

違う世界。

急に実感が湧いてきた。

理屈でなく感覚で納得がいった。

自分は今、全然知らない世界にいるのだと。

「本当に異世界、なんですか？」

でも否定したい気持ちも強いからついつい一縷の希望に縋り付いてしまう。

日本じゃないの？携帯を知っていますか？私は日本の東京にある高校に通っていて……。

思いつく限りの自分の知っている世界を構築するものを列挙する。それはもう藁をもつかむ心境で切々と彼らに語る。

からかわれているだけ。きっと二人とも冗談だよ。本気にした？と種明かしをしてくれる……。

そう思っていたのに聞いている彼らの顔に浮ぶのは理解の色ではなくて……。

その顔を見たらユウリは何も言えなくなっていました。

「本当にわからないんですね……」

胸が痛い。どうしようもなく痛い。

「私……」

じわつと涙が浮ぶ。

自分の状況を正しく理解した途端麻痺していた感情が一気に押し寄せてきた。

「?!おい……」

いち早くユウリの涙に気付いたリーガが狼狽したように声をかけてくるがその時にはもう大粒の涙がユウリの手の甲に当たってはじけていた。

「な、なくなっ……」

この状況で泣くなといわれても無理だ。

泣いている本人でさえ色々な感情がごちゃ混ぜになってどれが原因で泣いているのか分からない状態なのだから止めようがない。

嗚咽を堪えるので精一杯なユウリをバスクが極めて自然に抱き寄せる。

「大丈夫かい? そうだよな。いきなりこんなことに巻き込まれたらそれりゃ泣いちゃうよね」

いい子いい子と撫でてくれる手は温かくてユウリは余計泣けてきた。

「我慢しないで思いっきり泣いてもいいよ」

優しい声にユウリはバスクの服をつかんで胸に顔を埋めた。
涙が後から後から溢れてしまふのをそうすることで隠したかったのだ。

極めて自然に抱き合う形になった二人にリーガが突っ込む。

「っておい！バスクッ！なに自然に抱き寄せているんだよッ！」

「何怒ってんの？泣いているユウリちゃんを慰めているだけだよ？」

「だけって……お前……」

なにやら絶句したリーガにバスクは泣き続けるユウリの背中を叩いてやりながら意味ありげに笑って見せた。

「なに？自分が抱き寄せたかったか？リーガってムツツリタイプ？」

「断じて違うっ！」

泣いているユウリを見て泣き止ませてやりたいとは思ったが断じてバスクが言うような邪な思惑はないと断言できる。それにムツツリでもない！

「……………団長に報告してくる」

なにやらその場に残るのも居た堪れなくなってきたリーガはユウ

リが目覚めたこと団長に報告するという仕事を口実にその場から逃げ出そうとした。

が、ドアに手をかけたところである懸念を思い出しバスクに釘をさす。

「一応言っておくが……弱っている女に邪なことはするなよ?。」

「君とは一度じっくりとじっくり話し合う必要があるそうだね」

俺がそんなことする男に見えるのかい? 見えるから注意してんだよ。へえ〜。

につこりと笑い合うリーガ達のバックには冰山と吹雪が荒れ狂っているようにみえた。

部屋の気温が確実に二度は下がっている。

「まあ、俺は混乱して泣いている女の子に手を出すほど腐っちゃいないから安心しなよ」

「本当かよ……」

「あ、なにそのあからさまな疑いの目は」

「いや、だってお前って女に手が早そうだし……」

「憶測だよね? それってリーガの憶測だよね? 一度だって俺が女の子に手を出したところ確認してないくせに印象だけでそういっているんだよね?」

「ああ」

「うあ、ひどっ！いつもなら面倒とかいうくせにこういう時だけ素直に答えているよこの人！」

常日頃女性相手に口説き文句と勘違いしかねない言動を取るバスクを見ているとそう思ってしまったても仕方がないのではないだろうか。

まあ、騎士団は女性自体が少ない上にその数少ない女性陣が悉く図太い・・・いや一筋縄では……いやいや非常に自立心旺盛で強い方ばかりが揃っているのでバスクの口説き文句紛いの言動にも惑わされたりはしないがたまに街に出たときなどに店に入ると必ずその女性店員の顔を赤くさせる。

あれで自覚はないのだから天然とはかくも恐ろしい。

「とにかく過剰な接触と言葉はやめろよ？あとできるなら空気吸うな」

「さらりと遠まわしに「死ね」と言っていない？ねえ？」

「さて、俺は団長のところに行つて来る」

「うあゝ無視だよ。無視したよこいつ」

最低だよと嘆くバスクは無視してリーガはドアを開ける。ドアを閉める直前に部屋の中を見ると泣き続ける少女の小さな背中が見えた。

（異世界の人間か……。昔読んだ本に異世界の住人が迷い込んだことがあるっていう記述はあったが……。）

その本に書かれた事例は今からゆづに三百年は前のことだと記憶している。

「ふう・・・本当に面倒なことになりそうだ」

「騎士団」と呼ばれる集団がある。

それは如何なる権力にも属さない完全中立を旨とした集団。

大陸全土に支部を持つこの「騎士団」は元々魔族や魔獣の被害に対する自衛のために作られた集団であり、魔族が弱体化した現在でも魔獣などの被害の対処、治安維持を目的として活動を続けている。

現在、この「騎士団」を束ねるのはティナ・クロウ。

華奢な外見とは裏腹に「銀の殲滅姫」の異名を持つ女性騎士団長である。

騎士団本部にある騎士団長室でリーガはティナと向かい合っていた。

ティナはリーガの報告を聞くと面白そうに唇の端を上げた。

「異世界からやってきた少女ね・・・それは珍しい。でもあんな面倒事嫌だと公言している割には面倒事拾ってくるわね」

あからさまな上司の言葉にリーガは沈黙で答える。そんな部下の態度にリーガはあらあらと楽しげに笑う。

ティナは金の癖の強い髪を持つ外見・自称年齢二十歳の女性だがその瞳は固く閉じられている。

視界が塞がれているのに関わらず手元の書類にペンを走らせるティナの手は迷いが無い。しかも書かれた文字は完璧である。

風の噂によると彼女は決して盲目という訳ではないらしい。

「封魔眼」と呼ばれる封具と同じ役割を持つ特殊な力を持っている

るため普段は瞳を閉じているのだといわれている。

色々噂が耐えない人物ではあるが彼女が「騎士団」の長について十八年。その類い稀な指揮能力と戦闘能力で全騎士団員の尊敬と忠誠を勝ち取っていることだけは確かである。

「・・・少女の名前はヒビヤユウリ。十八歳。本人もなぜこちらに迷い込んだのか分かってない様子で今、バスクが宥めています」

淡々と報告するリーガの言葉に無言で耳を傾けるティナ。

リーガの言葉が途切れた時を狙ったかのようにティナの閉じられた目がリーガを見た。

「報告ご苦労。で、聞きたいのだけどあんたから見たその子はどう思った？」

「俺から見たユウリ・・・ですか？」

「ええ、そう。見たまま感想を教えて頂戴」

てつきりユウリに関する処遇を決めると思っていたのに意外な質問をされてリーガはらしくもなくうつらえる。

「どうって・・・その、普通の女だと思います・・・。やたら謝るし人の顔みてすぐビクビクするし気も弱そうだけど・・・」

「ふむ・・・普通の少女か・・・。一応聞くけど彼女から特別な力を感じたとかはなかったのよね？」

ティナの言葉にリーガは出会いの場面を思い返してみる。
どう考えてもあの光の球体以外に特別なものはなかったし、その

球体から現れたとはいえ少女からは特別な力など一切感じられなかった。

「いえ。謎の発光体が出現してはいましたがあいつ自身からは何も感じられませんでした」

リーガの言葉にティナは「ふゝゝむ」と考え込む。

家名もちで有名な封術士の家を実家に持つティナだったがそれらの立場をアツサリと捨てて「騎士団」に入団している。

そのためか余り堅苦しくなく、よくも悪くも緩い人物であった。

「・・・まあ、ここで考えてどうにかなる問題でもないか・・・リーガ。ヒビヤユウリはしばらく「騎士団」の監視下に置きます」

まあ、妥当な処置だなと思ったりリーガは甘かった。

「そして貴方には彼女の世話係を命じます」

「・・・は？なんで俺が」

思わず素が出たリーガにティナはにっこりと笑いかける。

「なんでってあんたが保護したのだから責任とりなさいよ。それに今、丁度人手不足だし一々他の人間振り分けるの面倒だし」

「・・・最後のが一番の本音だろ・・・」

「なに？団長命令に従えないの？嫌ならいいのよ？副団長にあんたの説得任せるから」

「引き受けさせて頂きます」

速攻で返事をしていた。

副団長の説得なんぞを受けるぐらいなら素直に初めから引受け他方が万倍ましである。

「あら、素直で私大変に嬉しいわ」

よく言う……。

どんよりとした目で睨み付けてもティナは露ほども動揺しない。さすが外見上は同年代でも団長就任から十八年まったく変わらない化け物……。

「なにか失礼なこと考えてない？」

「いいえ？別に？」

内心を綺麗に隠して慇懃無礼な態度を崩さないリーガ。

「まあ、いいけど。それじゃ任せたからお願いね？」

「満面の笑顔で……。あんた人に面倒押し付けて楽しいのか？はあ、第四部隊所属　リーガ。任務確かに承りました」

びしりと格好だけはつけ、敬礼をしたがリーガの顔はどこまでも面倒そうであった。

ユウリが泣き止んだ頃、まるで計ったようなタイミングで帰ってきたリーガはちらりとユウリを見るとそのまま決定事項だと前置き

した上でとんでもないことを伝えてきた。

「え」

「へえ」

リーガが世話役になる。

そう、聞いた瞬間ユウリは真に正直なことに顔を引きつらせ血の気の引いた青い顔で思わずこんなことを口走っていた。

「えっ！！嫌です！！」

しまったと思った時には時既に遅し。

恐ろしく不機嫌そうな顔で「俺だつて嫌だよ」と言葉ではなく表情で雄弁に語るリーガとその後ろで腹を抱えて机をバンバン叩くバスクの姿があった。

「ゆ、ユウリちゃん・・・君、最高！そういうこと普通は思っ
いても口には出さないよ・・・すごい、速攻で拒否した。あ、あ
ははははははっ！！」

すこぶるツボに入ったらしいバスクは笑いすぎて息をするのも辛
そうである。

「バスク・・・笑いすぎだ」

腕組みをしていつも以上に不機嫌そうな顔をしているリーガは八
つ当たりのように笑い続けるバスクの頭を叩く。

だが、バスクは叩かれたことすらも気にならないぐらいに笑いの
ツボに入ってしまったたらしくだひたすらに笑い続けていた。

「あ・・・う・・・」

顔が上げられない。

ユウリは自分の失言に深く深く落ち込んでいた。

しかし、である。ほぼ初対面で怒鳴られ、頭を鷲づかみにされた人間が自分の世話係になったら誰だってユウリのような感想を抱くものである。

そこら辺の割り切りが出来ないユウリは自分をひたすらに責めて、落ち込んでしまう。

何かあると他者に責任を求めるのではなく自分の中に見つけてしまうユウリの性質は美德ではあると同時に一種の卑屈さも持ち合わせていた。

「す、すいません・・・私・・・」

俯いたまま小さくなる。

このまま消えてしまいたい気分であった。

「あはははっ！！初対面で怒鳴られて頭鷲？みにされたらそりゃ嫌いにもなるよね」

「イエー！！決して嫌いなわけではないです！！好きでもありませんが苦手なだけです！！・・・あ・・・」

失言 その二である。

リーガはますます不機嫌そうな顔をするしバスクはバスクで声が擦れるほど受けているしでユウリはその場で穴掘って埋りたい気分になった。

バスクがリーガの背をバンバンと勢いよく叩く。

「よかったね！嫌いじゃないってさ！好きじゃないけど苦手なだけだって！」

「……………うるさい」

ベシと肩に乗ったバスクの手を払いのけるとリーガは椅子から立ち上がる。

「ユウリ」

「は、はい！」

びくと背筋を伸ばすユウリにリーガは軽く眉を上げるが特にそれには触れずにユウリに外出する旨を伝える。

「私も……………一緒に行くんですか？」

「お前、いつまでもその服装のままでいる訳にはいかんだろ？」

言われて自分が着替えの一つも持っていないことに初めて気付くいや、着替えだけではなくお金だってない。

「あ、そうか……………でもお金、持っていない……………」

オロオロし始めたユウリにバスクが可笑しそうに助言をしてくれる。

「安心しなよ。騎士団預かりだからもちろん騎士団の方で用立てるよ」

「で、でも・・・それじゃあ・・・」

一方的にお世話になっているのが心苦しい。
そう思ったユウリの考えを読んだかのようにリーガが鋭い指摘をする。

「ここでの常識も貨幣価値もわからん女でしかもお前みたいな子供が変な遠慮なんてしてもいいことないぞ」

「あ、えつと・・・でも・・・」

なおも遠慮しそうなユウリ。

リーガは不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「それじゃ・・・お前、いま、ここで騎士団を追い出されても生活していける自信、あるのか・・・」

「それは・・・」

いくらユウリが世間知らずでもそんなことは出来ないことぐらいわかる。

ここで放り出されたら野たれ死ぬ嫌な自信がある。

「ないんなら変な遠慮なんぞしないで大人しく保護されとくんだな」

「ちょ・・・リーガその言い方はどうかと・・・」

なにやら抗議しかけたバスクを無視して言いたいことを言ったり

リーガはさっさと部屋を出て行く。
その後ろ姿を慌てて追いかけながらユウリはなんだか胸が痛かった。

相性が悪い。

リーガは知り合ったばかりの異世界から迷い込んできた少女との
今までのやり取りを思い出すとそう結論つけた。

やたらおどおどした態度もすぐ謝るのも卑屈すぎる思考も見えて
て全部がイライラする。

別に怒っているわけではないのに何故だか話していると相手は俯
いていつてしまう。

そしてこっちが悪いことをしたような気分になるのだ。

ちよつと怒鳴るとすぐに涙目になる。出会って喋ってから数時間、
彼女は怖がつてまともにリーガの顔も見なくなっていた。

関係は確実に悪化の一途を辿っていた。そしてそれが確実に分か
るのに二人ともどうすれば解決するのか分かっていない。

なのにそんな2人は今、並んで大通りを歩いていた。

言わずと知れたユウリの日常雑貨の買出しである。

無言で歩く。

バスクはいま、この場にいない。

仕事があるとかでついては来ないのだとリーガに教えられた。

重苦しい空気を中和してくれる人材がいなかったために沈黙が2人の
間に暗黒を伴ってとぐろを巻いていた。

一言で言って気まずい。一言で言わなくても気まずい。

何か話題を提供するべきだろうか？

しかし、俺はこいつに怖がられているみたいだし、余計に俯かせ
るんじゃないのか？

怖がらせない会話ってどうやるんだ？

などなど不機嫌そうで面倒そうな表情の下でそんなことをツラツ

ラと考えていたリーガは外見よりずっと困っていた。

ユウリは「制服」と呼ばれる彼女の世界独特の服装のままで歩いているためやたらと目立つ。

ちらちらとすれ違う人たちが横目でユウリをみる。中にはわざわざ振り返ってまで確かめる者までいるのでユウリはさっきから一度も顔を上げようとしていない。

その度にリーガは相手に鋭い視線を送りつけ牽制しているのだが肝心のユウリは全く気付いていない。

ある意味から回っている好意に本人もユウリも気づかない。黙って歩く。

テクテクとユウリが小走りでついてくる。どうやら歩く速さが速いらしいと気付きリーガは歩く速度をユウリにあわせた。

ユウリが驚いたように見上げてくる。

見返すと慌てて目を伏せられた。だけどまた小さくこちらを窺う。なんなんだ一体……。

相手の行動の意味がわからずおまけにどう扱っていいのかも分からないリーガは本当に困り果てていた。

ここで口を開いたらまた泣かしてしまいそうでも言えずにいるリーガにユウリは顔を伏せたまま小さく本当に小さく「ありがとうございます」と呟く。

聞き違いかと思いユウリを見る。相変わらず視線はそらされているがその耳がかすかに赤い。

それ以上に何か言う気がなくなってリーガは無言で視線を前に戻す。

微妙に気恥ずかしい。

再び沈黙。ただどさっきと空気は微妙に違うものになっていることにユウリもリーガも気付いてはいなかった。

リーガはある大きな店の前で足を止めた。

「ここは？」

かなり大きな店だ。ガラス張りから見える店内には多くの品物と少なくともないお客の姿が見える。

「俺の実家」

「え？」

かなり驚いた。

リーガは「騎士団」にいる。だからてっきり騎士とかの家系だと思っただの。

だがよく考えてみれば「騎士団」と言っても特定の国に使用しているわけではないようなのでリーガみたいに商人などの一般階級出身の騎士団員が多いのかもしれない。

ぼんやりとそんなことを考えているとリーガはユウリを置いてさっさと店の中に入ろうとしている。

慌ててその後を追うユウリ。追いついてきた彼女を横目でちらりとみただけでリーガは無言で扉を押した。

チリンとドアベルが涼やかな音を風に乗せた。

「いらっしやいませ。何かお探しでしょう……」

店員だろうか？ドアベルの音を聞きつけて奥から出てきた青年が定番の文句を言いかけて……リーガの顔を見るなり黙り込んだ。

（あれ？この人……なんか、リーガさんに似てる？）

年はリーガより上のようだが顔の作りや髪の色などがよく似ていた。リーガがもう数年年をとればこうなるであろう容姿をそのまま青年はしていた。

（兄弟、かな？）

そう思っても仕方がないぐらいに目の前の2人は似ていた。オロオロとユウリが2人を見比べていると店員はしばし呆然とユウリとリーガに視線を行ったりきたりさせていたが急に奥に向かって大声を出した。

「大変だ！！皆！！リーガが嫁さん連れて帰ってきた！！」

それこそ外にまで聞こえるのではないかと思えるぐらいの大声でそんなことを叫ばれ、店内全ての視線がユウリとリーガに集まる。

「なっ・・・・・・・・！！」

「・・・・・・・・・・・・・つたく・・・・相変わらずかよ・・・・」

衝撃で固まるユウリとなにやら諦め気味なリーガの前にがやがやと奥から人が出てくる。

その数、十人。しかも全員どことなくリーガに似た容姿というか・・・・多分、彼の血縁者だと思わせる。

しかも上と下の年齢がえらく離れているように見えるのだが・・・・。

「え、え、え・・・・？」

あっという間に囲まれてユウリはどうしたらいいのかわからない。

「うあ……！！本当だ！！リー兄が女の子連れてきている！！」

「お嫁さん？あの人リー兄のお嫁さん？」

「あの朴念仁の面倒がりがついに嫁さんを連れてくるまでになったか……くう！！酒だ酒だ！！今日は祝い酒だ！！」

「というか……年、結構離れていないか？」

「リーガってば年下が好みだったのね」

「というか年下過ぎだろ。どう見ても十代じゃないか」

「な、な、俺の言った通りだろ？」

「リー兄。お帰り。そしておめでとう」

「ちよつとあんたはなんでそう冷静に……みんなも彼女が驚いているでしょ！」

「だけどよお！リーガが女の子を連れてきたんだぞ？冷静になれって方が無理だわ」

テンでばらばら。好き勝手言いたい放題。こつちの話を聞いてもらえそうにない雰囲気である。

チラリとリーガの方を見上げると眉間に皺を寄せて頭を手で押さえていた。

どうやら彼にも事態を収拾することが出来ないらしい。

「リーガさん・・・」

「俺だって困っている」

不機嫌そうにげんなりしたリーガの声。兄弟たちの雰囲気についていけないようだ。

なにがどうして自分がリーガの嫁にされなければならないのか・・・。

リーガの兄弟と思しき人たちは自分を歓迎してくれているのだけは分かるのがその勘違いはどうにかして解かないと。

「あ、あのっ!!」

勇気を出して声をかけた途端にその場にいる全員の視線が集まる。

(・・・うつ！)

思わず一步下がってしまう。だが、逃げるわけにはいかない。

「わ、私・・・リーガさんのお嫁さんではありません!!」

言えた!

そう思ったのは甘い考えだと思い知らされるのは一番幼い・・・五歳ぐらいの少年の無邪気な一言。

彼はうっーんと考え込み、なにやら思いついたのかぱつと表情を明るくした。

「わかった!おねえちゃんリーガ兄の「こいびと」でしょ!」

ユウリ、撃沈。

その隣でリーガがなんでこうなると言わんばかりに天井を睨みつけていた。

そして五歳児の発言に再び盛り上がる兄弟たち。

「おお！恋人だったのか！そいつはすまない」

「まったく早とちりだよ」

「こら！誰よ。「お嫁さん」なんて言ったのは」

「ゴメン・・・だってリーガが女の子をうちに連れてくるなんてなかったからついつい・・・そうか恋人だったのか・・・」

「恋人にしても年、離れてるよな・・・」

「・・・あんたは一夕細かいことを気にするわね」

「・・・嫁じゃなく、恋人・・・お祝いは恋人でも言った方がいい？」

「いや、嫁だろうが恋人だろうが祝いは言ってやるべきだと思うぞ」

「うあ～～い。リー兄が恋人連れてきた。恋人恋人！！」

「だから！静かにしなさいってば！！」

なんかもう滅茶苦茶である。

「……リーガさん……!!」

「知らん！俺だつて立場はお前と同じだ!!」

リーガが恋人連れてきたと盛り上がる家族に本気で目眩を感じたころパンパンと手を叩く音が聞こえた。

それまで騒いでいた兄弟たちがピタリと口を閉ざす。

「まったく……なんの騒ぎだ。そろいも揃って店先でなにを騒いでいる。お客様の迷惑だろう」

奥から姿を現したのは壮年ぐらいの男性。

（リーガさんの……お父さんだ）

その男性は先ほどの出てきた男性よりもずっとずっとリーガに似ていた。

違いといったら年とリーガの特徴ともいえる不機嫌そうな面倒そうな表情を浮かべていないことぐらいだ。

リーガの父親と思しき男性は自分の子供達と不機嫌そうに自分を見ているリーガそしてその隣で所在無さ気に立っているユウリをみて大体のところを察したのか呆れたように顎に手を添えた。

「まったくお前達は何かあると全員で騒ぐ。ホラ、仕事があるものは仕事に戻れ。仕事のないものは奥に行っていないさい」

テキパキと指示を出す父親にリーガとユウリを除く全員が素早く

動きだす。

それを横目に男性は他の客に頭を下げている。

「えっと・・・に、賑やかなご家族ですね」

「ハッキリ言えよ。粗忽で野次馬の集まりだって」

「あ、あははは・・・」

リーガの言葉にユウリはただ乾いた笑いしか返せなかった。

そんな会話を交わす2人にお客に対する謝罪を終えた父親が近寄ってくる。

「やれやれ・・・何かあるたびに見当違いの方向に騒ぐのは一体誰に似たんだか・・・。それよりリーガ。そちらのお嬢さんはどなたかな？」

子供達の加熱ぶりとは正反対に父親の方はアッサリとした対応であつた。

「あ、私は・・・」

「こいつは訳があつて騎士団の方で預かっている子供だ。事情があつて身の回りのも物を持っていないんだ。服を姉貴とかのお古でいいから譲ってくれ。あと下着や日用品なんかは店で売っているだろ？買うから適当に見繕つて欲しい」

ユウリの紹介もせずに目的だけを言うリーガに父親はさすがに苦笑いを浮かべた。

「まったく。お前は相変わらずだね……。いいだろう。用意させる。けどな……。リーガ」

「？なんだよ」

リーガの鼻を父親が容赦なく摘む。

「いっつつう！」

「お前、このお嬢さんが自己紹介してくれようとしたのを邪魔しただろ？お前が礼儀を知らないのは私の教育不足だとしても他人の礼儀まで邪魔するのはいただけないな？しかも私もお嬢さんに自己紹介できなかったじゃないか」

にこにこ極上の笑顔を浮かべつつ父親は息子の鼻を引っ張る。

「いててっ！引っ張るな！放せ！」

「はははっ！相変わらず可愛いじゃないか息子よ！！」

物言いは兎に角空々しい。

散々リーガに痛い目を見せて納得がいたらしい父親はユウリの方を見据えると打って変わって紳士的な態度で自己紹介をしてくれた。

「お見苦しいところをお見せしました。私はリーグル。このリーグル商会の主で……」

ここでリーガの耳を引っ張る。

「この愚息の父でもあります」

「さつきからイテエって!!」

「お嬢さんのお名前は？」

「って！俺は無視か!!」

にこにこ愛想のよい笑顔を浮かべるリーグル。正直な所リーガと顔が似ているためリーガが愛想のよい笑顔を浮かべているように戸惑う。

「わ、私はユウリといいます。今日は急にきて、無理を言ってますいません」

今までの経験から苗字は言わない。リーガが何も言わないところを見るとこれで正解のようだ。

ペコリと頭を下げるユウリにリーグルが頬を緩ませ、リーガの肩を叩く。

「いい娘さんではないか・・・本当に恋人ではないのか？」

「出会ってまだ一日も経っていないんだが？」

リーガの額に青筋が浮ぶ。それに気付いているのかいないのかリーグルがどこか遠い瞳で語り出す。

「ふう・・・駄目だな。私なんて母さんを口説き落としたのは出会って三十分後だったぞ」

「いや・・・親父達基準にされても・・・」

普通じゃないからそれ。と呟くリーガに思わず同意しそうになっ
てしまうユウリ。

そんな2人にリーグルが大げさに目を丸くして見せた。

「おやおや・・・出逢って間もないという割りには気があつてい
るようだね」

「「どこが（ですか）」」

否定の言葉がピッタリ重なってますます気まずい。そんな二人に
リーグルは微笑まそうに目を細めた。

「うゝゝん。変わった服ねえ・・・生地も見たことないものだ
し・・・」

ユウリの制服を手に取り、朱金の髪と銀の混じったなんとも神秘的な
瞳を持つ女性が感心したように呟いた。

「えっと・・・私のせか・・・じゃない、故郷独自の服と生地な
んですよ。コールファーンさん」

手渡された服に四苦八苦しながら答えるユウリに部屋の主・・・
リーガの一番上の姉であるコールファーンはユウリに手を貸してく
れた。

「コールでいいわ。皆そう呼ぶから。それと裾の長い服は苦手、
みたいね・・・」

どうにか服を着たはいいが裾の長い服に突っ掛かって何度も転びそうになるユウリにコールファーンは悩ましげに頬に手を沿え、首を傾げた。

「そう転びそうになると日常生活も覚束ないわね・・・」

さて、どうしようかと腕組して考えていたコールファーンだったがやがて何かを思いついたように箆笥を漁り始めた。

「コ、コールさん？」

「ちよつと待つてね・・・確か、この辺りに・・・あつた!!」

箆笥の奥の方に収めてあつたらしい服を誇らしげにこちらに見せる。

それは全体的に淡い色の生地で作られた一組の服であつた。

上はボタンのない頭から被る服で同色の羽織もついている。下はズボンで足首は絞つてあり、更にその上から腰巻を巻くようで鮮やかな布もあつた。

全体的な印象はユウリの世界のアラビアンナイトの世界だが細かい部分はコールファーンが着ているような服に合わせてあり、結果として上手く融合された一品であつた。

「これは・・・」

「ふふっ・・・昔ね。うちにいた他の国出身の従業員が着ていたものなんだけど彼女は結構お洒落さん

でね。こつちでも違和感ないようにでも故郷らしさは失いたくないって試行錯誤のすえ作つた服よ。

彼女がお嫁に行くっていうから記念にもらったの。役に立ちそう
でよかったわ」

さあ、着てみて頂戴と手渡された服は着てみたらこれまで渡され
たどの服よりも動きやすい。

ぐるりとその場で一回転してみて確かめてみるとうんうんと満足
そうにコールファーンが頷く。

「大きさも丁度良さそうね。確かもう二・三枚はあったと思うし・
・型も残っているから作ろうと思えば作れるわよ」

「えっと・・あの・・・服を譲っていただくだけでも申し訳な
いのに新しく作ってもらうなんてその・・・」

「本当に貴女は遠慮がちなのね」

出逢って一時間弱しかたっていないコールファーンからそう言わ
れユウリはますます肩を萎めてうなだれる。

「す、すいま・・」

「はい！謝らない」

「は、はい！」

びくつと背筋を伸ばすユウリにコールファーンは柔らかに微笑む
と見つけ出した服とそれから一応一般的な女性物の服を袋に詰めて
それを渡す。

「あ・・・」

「とりあえずはそれを持っていきなさいな。下着やなんかは妹が見繕って持ってくるから。・・・それと私は貴女を喜ばせたいから色々しているのよ？そんな私に貴女が言うべき言葉は謝罪じゃない。・・・言えるわよね？」

なにをとはいわれぬがユウリは照れたように俯く。

「ありがとうございます。コールさん」

「ふふつ。どういたしまして。照れているのはわかるけど今度は笑顔付きで言うて欲しいわ。まあ、それは次に期待して、喉が渇いたでしょ？リーガも呼んでお茶にしましょう」

ついでにその服もお披露目しちゃいましょうと楽しげに笑う女性にユウリもつられて小さく笑い声を上げた。

ユウリが一番上の姉に連れて行かれ、リーガはすることもなく実家の自分の部屋にいた。

いや、正確にいうとわざわざ自室まで押しかけてきた兄弟たちの戯言を右から左へと聞き流していた。

「なあなあの子本当の本当にお前の嫁さんでも恋人でもないの？」

「こそつとお兄ちゃんにだけ本当のことを言いなさいって！え、どうせ言ったら最後、ご近所お得意様に言い触らす気だろうって・・・いやだん！お兄ちゃんそんなことしないわよ！！痛っ！叩くこたあないだろうー！」

「・・・気持ち悪いこと、するから・・・」

「お前、ちょくちょくとこつち来なさい。お兄ちゃんが説教してあげるから・・・!!」

「よかった・・・さすがに二十六歳と十代って犯罪ばいよな・・・」

「けつきよくあのお姉ちゃんはお嫁さんなの？こいびとさんなの？どつち。ねえくどつち？」

際限なく騒ぐ兄弟たちの頭の構造がどうなっているのか本気で見てみたい。

リーガの額に大きな血管が二つ三つは確実に浮んでいた。

（好き放題言いたいこと言いやがってこいつらは・・・）

なんで自分が出会って間もない子供・・・しかも相性最悪の少女との仲を疑われなければならないのか・・・。

（人のことを犯罪者扱いしやがるし・・・女に縁がないみたいに騒ぎ立てるし・・・!!）

普段が不機嫌顔だから誰も気付いてはいながこの時の彼は浮かべる表情と感情が完全に一致していた。本気で不機嫌であったのだ。

或いは、兄弟たちはそれすらも気付いた上で発言しているのかもしれないかった。

本当にそうだとしたら俺の身内は腹の黒い奴ばかりだと半ばヤケクソのように考えるリーガ。

せめてもの反抗ですつと無視しているのだが兄弟たちの戯言は終

わる様子を見せない。

（こいつら・・・いつになったら消えるんだ・・・）

まだ幼い下の弟（十一歳と五歳）2人についてはまだいいが兄二人とすぐ下の弟（二十二歳）に関してはそれぞれ仕事が・・・それもちかなり重要な仕事が任されているはずなのにこんなところ弟をからかっていいのだろうか？

まあ、他の兄2人（比較的まとまな長男と三男）が他の三人の分まで仕事を押し付けられているのだらうけど・・・。

思い浮かぶのは兄弟の中でも常識と忍耐をなまじ持ち合わせてしまったがため著しくそれを欠く兄弟の後始末を嫌でもする破目になってしまった兄2人の眉間に皺を寄せた顔。

（こんなのに仕事を任せて・・・兄貴たち、胃に穴が空きそうだな）

家業についてはすっぱり手を引いているリーガだったが能天気な兄達の後始末に回っている二人を思うと不憫になってくる。

自分も十五まで彼らと同じような役回りを押し付けられていたから余計に。

「なあなあなあ~~~~！！リーガ無視してないで構ってくれよ！！」

「・・・構えてあんたそれ、嫁をもらって子供も三人いる男のセリフじゃないぞ・・・」

「ハッキリ言ってウザイ」

七男がばつさり切つて捨てる。この弟は冷静な顔できついことを平気で言う。少数の常識人・多数のお調子もの非常識人、放任主義者の中でどうしてこんな性格が形成されたのかリーガは不思議でならない。

「本当にこの弟たちは可愛げのない!!」

本格的に次兄が切れ、七男を追いかけてまわす。

無表情にしかし素早く逃げる七男。

それらをあははと笑いながらも止めはしない四男。
ぶつぶつと何事か思考に耽っている六男。

「リー兄？結局どっち？」

リーガの膝によじ登って己のそんなことを聞いてくる末っ子八男にリーガは本気で目眩がしてきた。

実に実に不本意ながら実家に帰ってきたと実感してしまうやり取りだと思ってしまう自分が哀れた。

（そうだ。・・・これがうちの日常だった・・・）

面倒なことが嫌いで、だけど面倒なことを毎日のように引き起こされた日々が走馬灯のように頭に蘇ってくる。

「まったく・・・頭が痛くなる・・・」

「おまつた~~~~!!」

ノックもなしにドアを開け放った長女にリーガは本気でその場に埋れたくなった。

「コー姉……」

「あら？なにになに男ドモが集まって何しているのよ。暑苦しい」

部屋の中に勢ぞろいしている弟たちにコールファーンは軽く鼻で笑うと背後を振り返る。

「まあ、いいわ。丁度いいからあんたらにもお披露目よ！」

「あ、あの……その……コールさん……」

気弱そうな声を見無視してコールファーンは背後に隠れている少女を無理矢理部屋の中へと引っ張り込んだ。

「じゃ……ん……ん……！」

入ってきたのは見慣れない衣装に身を包んだ少女。

黒い髪を後ろでみつ編みにし、ターバンを巻いている。

見た事のない服は一目で異国のものとわかるのに細かいところはリーガの知っている服の特徴を持っていた。

ぽか……んとその場にいた男全員の視線が少女に集中する。

「あ、あの……」

彼女の世界の服だという「制服」を着ていないせいか服装の奇抜さが「制服」より緩いせいか純粹に少女の容姿にリーガは初めて意識がいった。

黒い……見た事のないような色を持つ髪も夜をそのまま写しと

ったような瞳も・・・気弱そうな表情を浮かべるその顔も・・・以前とは全く違う風に見える。

姉がやったのだろう。ほんのりと化粧まで施されたユウリは人の目を十二分にひきつけるほどの魅力を醸しだしていた。

おろおろと泣きそうなユウリの肩に手を置きながらコールファーンが誇らしげに弟たちに問いかける。

「どうよ!」

姉のその言葉に兄と弟がどつとユウリに駆け寄る。

「いや~~~~!!びっくりしたよ!!すごく良く似合っている!」

「えらいべっぴんさんだなあ!!本当に美人さんだ!!」

「うんうん!!あ、リーガの恋人じゃないんだよね?俺、恋人に立候補してもいい?」

「おねえちゃん!きれい!お姫様みたい!!」

矢継ぎ早に言われてユウリは目を回したようで「え、え、え?」と言葉が出ないようであった。

「はいはいはい!そこまで!むさい男が集団で押し寄せてんじやないわよ!怖がっているでしょうが!」

しつしと犬を追い払うように手を振るコールファーンに追い払われた方はぶーぶーと文句を垂れる。だがそんなもんで家族内で最強権力保持者の意見を曲げることなどできない。

ぎろりと一睨みされただけで全員黙らされていく。

そして何故だかりーガまで睨まれた。……何故、俺までにらまねなければいけない。

無然と黙りこくる弟にはあゝと溜息を付くとコールファーンは手に持っていた袋をリーガに押し付ける。

「はい。これこの子の着替え一式と日用品。この子別の場所から来たって聞いたから服の着方とかは一応教えたから」

「お、おう……っう！」

反射的に受け取るリーガの足を華麗に踏んだコールファーンは低く恫喝する。

「あんたね……女の子が着飾つてるときぐらそのぶつちよう面なんとかしなさいよ！ 誉め言葉の一つくらいいいなさい！」

小さくだけ鋭く怒る姉をリーガは珍獣でもみるかのような思いで見返す。

「誉めるって……なんで俺が……っう」

先ほどとまったく同じ箇所を踏まれ思わずその場に蹲ってしまうリーガをコールファーンが腕を組んで見下ろす。

「全く……うちの男どもときたらウザイかヘタレか朴念仁ばかりで嫌になるわ」

「え、え、え。というかりーガさん！ 大丈夫ですか！」

リーガの側に膝をついて覗き込んでくるユウリ。その顔は心配気にこちらを見ているのに気付いてリーガは反射的にそっぽを向いた。なぜそんなことをしたのか自分でもわからないがとにかく視線を合わせたくなかったのだ。

その途端ユウリが「がん」としたような顔をして後悔したがいまさら視線を元に戻すのもしゃくでリーガは視線を外したまま痛みに耐えた。

「~~~~~」

「だ、大丈夫です、か？痛い……ですよね？」

「見ればわかることを一々聞くな」

「……っ！すいません……」

「謝るな。鬱陶しい」

「……すいま……あ……えつと……」

おろおろするユウリにいらつとするリーガは口調がつついキツクなってしまう。

困らせたいわけではないのに結果的に困らせている現状がいらいらを更に増していく。

あ~~~~くそっ！

いらいらする！

踏まれた足は痛いワイライラは増していくわいいところなしだ。最悪だ。そしてそんなリーガの態度にユウリは更に怯えて結果二人の関係は互いに決して嫌いなわけではないのに悪化するという悪循環に陥っていた。

それらを見ていた外野陣のうち二人の悪循環に気付いた人間若干名は静観。気付かない大多数は好き勝手に囃し立てていたのでリーガは早々に家を出たのであった。

帰り道は行き以上に重苦しい空気が漂っていた。

気まずいが大量に闊歩して盛大にパレードをしている。

（あゝどうしよう。リーガさんさっきから一言も喋らない）

ユウリは前を歩くリーガの背中を必死に追いかけていた。歩幅が違いすぎて駆け足でないと置いて行かれそうだ。

おまけに夕方なので人が多い。油断しているとリーガの背中を見失ってしまいそうになる。

待つてください。少し歩く早さを緩めてください。

たったこれだけのことが言えない。今のリーガは不機嫌で声がかけずらい。

だから息を切らせて必死について行く。リーガはユウリを一切振り向かないで一人でさっさと歩いていく。

人がリーガとユウリの間を容赦なく埋めていく。

前を歩く青年の背中が人込みに消えそうになる。急がないと。

走り出したユウリだったが石畳に躓いてしまう。

傾く視界。

「あつ……」

気付いた時には盛大に転んでいた。

「………つた……」

顔をあげると前を歩いていた背中は見えない。きよろきよると慌

ててリーガを探すがそれらしい姿もなく走りよってくる人影もない。置いて行かれた。

そう悟った途端息切れした体から力が抜ける。なんとなく立ち上がれずにその場に座り込んでしまうユウリ。そんなユウリを通行人が迷惑そうに避けて行く。

大八車の上に籠を乗つけて引くおじさんがユウリの前を通っていく。ユウリの世界ではお目にかかれない光景だ。

道行く人の着ている服も違う。お金も違う。ついでに常識も少々違うしユウリの世界にはないものがたくさんあるし逆に知らないものも沢山ある。

見知らぬ世界。ユウリの知らない世界。ユウリを知らない世界。ぞっとした。

これだけ人がいるのに誰一人自分を知る人がいない。

自分がどんな名前でどんな生活をしていたのか・・・それどころほんの少し前までユウリという存在はこの世界に存在すらしていなかった。

「・・・・・・・・いたい・・・・・・・・」

転んだ時にすりむいた手が痛い。

世界中からそっぽ向かれたような気分になる。

「いたい・・・・・・・・」

家路を急ぐ人の足音。民家から流れる夕飯の匂い。温かな日常の一コマなのにユウリにはその全てが痛かった。

どうして・・・どうして私がこんな目に遭うの？

普通に暮らしていただけなのに知らない世界に来ちゃって帰れるかどうかすらわからなくて・・・。

じわりと涙が滲んでくるのを必死に堪えた。

泣いたら・・・二度と立ち上がれそうにないと思えたからユウリは必死に耐えていた。

そんなユウリに影が差す。それと同時に手が差し伸べられた。大きな男の人の手。

「・・・・・・・・大丈夫か？」

その声は目が覚めて最初に聞いた声。

不機嫌以外の感情はないんじゃないかというぐらいいつも同じ不機嫌そうな声。

ゆるゆると目線をあげると予想通り不機嫌そうな顔でリーガが手を差し伸べている。

「リーガさん・・・？」

不機嫌そうな顔が少しだけ怒ったような顔に変わる。

「お前・・・歩くのが早かったなら文句ぐらい言え」

問答無用で手をつかまれ立さされた。

「言わなきゃわからねえ・・・ってあ～～～違う」

リーガはなぜだが視線をあらぬ方向に向けつつ早口になる。

そして意を決したように視線をユウリに戻すと一気に早口で捲くし立ててきた。

「今回は俺も悪かった。もっと気をつけるべきだった」

不機嫌そうな顔でそれだけ言うところの話は終わりだと言わんばか

りに歩き出す。手を？まれたままなのでユウリも当然つられて歩き出すことになる。

二人無言で歩き出す。手を繋いでいるせいだろうか今度は歩くのに支障はなかった。

歩きやすい。時々人とぶつかりそうになるのをリーガがさり気無く庇ってくれていた。

繋いだ手を振り解くことがユウリにはできない。リーガも離さないのになんとなく手を繋いだまま歩く。

「すまない」

「え？」

早口でしかも小さかったので思わず聞き返してしまった。

「……………なんでもねえ」

リーガはそっぽを向いて誤魔化す。その表情は見えなかったが耳は少し赤い。夕日のせいかもしれない別の原因か。

「なんでも、ないんですか」

「そうだ。なんでもない。お前に謝ってなどない」

「そ、そうですか……………」

そう言われると強くは追求できずにユウリも黙り込む。

「……………お前、ここは追及しろよ」

「え！あの・・・」

肩越しに恨みがましい視線を送られユウリはオロオロしてしまう。
私またなにか変なことした？

途端に不安が胸中を埋め尽くす。

どうしよう・・・また怒らせる！

うなだれるユウリにリーガは諦めたように空を仰いだ。

「おろおろすんな・・・怒ってない」

「そ、そうですか・・・」

うなだれていたユウリの視線が少しだけ上を向く。その少しだけ上がった視線にリーガが満足そうに・・・少しだけ口の端をあげた。

それはいつもの不機嫌さなんて感じさせない柔らかな笑顔だったけどユウリがそれを認識するよりはやく。

「さっさと帰るぞ」

「は、はい」

淡く儚く暮れていく夕日に隠れてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1367v/>

ねた的な小説

2011年8月10日12時06分発行